
緋弾のARIA～世界に見放され皆に見守られる者～

ゴマ増

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア〜世界に見放され皆に見守られる者〜

【Nコード】

N7723V

【作者名】

ゴマ増

【あらすじ】

世界から消されそうになった主人公……。そこへ主人公の両親とその育て親から頼まれたという神様が現れた。どうやら主人公の能力（この世界では使えない）が高すぎて世界が支えきれないらしい。神様はその能力が活かせて、支えきることが出来る世界に飛ばすことで主人公を生きながらえさせるつもりらしい。その世界は・・・緋弾のアリア！？一部能力がチート級の主人公がさらに神様に願いを5つかなえてもらって・・・。。。。

キンジ達と主人公が共に生きていくという話です。

第0話〜プロローグ〜（前書き）

ファンフィクションは初めてです。といってもこれ含めても二作です。しかも一作目は短編ですし、面白くないですし、面白くないですし……。でも自分で書いて楽しかったんで。悔いはないです。後悔もないです。反省はしていません。ゆっくりしていいね！

第0話〜プロローグ〜

「行くわよ！キンジ！ナオヤ！」

「ああ！」

「わかった！」

ここはとある潜水艦のなか・・・

俺たちの運命を賭けて今、『ヤツ』を追っていた・・・。

俺は神野 ナオヤ。

いたって普通の高校1年生だ。

いや・・・だったというべきか。

両親はいない。

母親は俺を産んでからすぐに亡くなってしまったらしい・・・。

残った父親も母親が死んでから二年後に事故で亡くなった。

その後、親戚の家で暮らし、随分とお世話になった。

だがその親戚も、一年前に事故で亡くなってしまった。

当然、悲しみに明け暮れていたがすぐに立ち直り、他の親戚に迷惑をかけないよう

前から計画していた一人暮らしを始めた。

幸い、計画していただけたあつて貯金もあり、バイトをしながら何とか生活している。

そんなギリギリな生活だが友達もたくさんできて、日々幸せだった。だが、神様は、こんな俺をまだ地獄に落としたいらしい。

俺の運命が狂った、ある日の学校の帰り道――――

「ふー・・・今日も疲れた。ふむ・・・4時かまだバイトまで時間があるな。どっかで時間でもつぶすかー。」

この日のバイトは6時からで、まだ二時間ほど時間があり、特に着替える必要もない仕事だったのでそこで時間をつぶすことにした。

――それがいけなかった。

「さーて・・・どこいこっかなあー。」

そう言って近くの公園をうろついていたその時、

『お主・・・なにをどうしたらそこまで能力を・・・?』

「っ!?!なんだ!?!声!?!どこから!?!」

さつきからされもない公園で突然聞こえてきた声の主を探し、あたりを見回すも、やっぱりだれもない……。

『ふむ……完全に超えておるなあ……。』

「どこだ！？どこにいる！？」

『ここだ』

そう聞こえた瞬間、突然目の前に奇妙な老人が現れた。

「っ！？……あんたは一体だれなんだ？俺に何か用か？」

『ほう……この状況でまともにしゃべれるとな……やはりあの世界しかないか。』

（この人……いったい何の話をしているんだ？）

『お主を殺す話じゃよ』

「っ！？心を読んだ！？っていうか殺すだと！？……冗談にしちやあ物騒だな」

『冗談ではないからのう。お主このままじゃとこの世界に消されるぞ？』

「なんだって！？どういうことだ！」

『そうじゃのう。ならこの世界の説明からせねばならんのう。お主

のおるこの世界は幾多ある世界の一つじゃ。そしてすべての世界にはいろいろな物がおる。お主らの言う幽霊、妖怪、鬼、幻獣、魔物、などがう。そしてこの世界には人間が住んでおる。比較的身体的能力が低く、発想力豊かな人間が住む世界。そして人間は生まれたときに世界ごとに人間の限界が決まる。そしてほとんどの人間はその限界を超えることなく、寿命が尽きていく……。だがのう、お主はすでに超えておるのじゃ。』

「……………は？」

『この世界で生きる人間の能力の限界を超えておるのじゃよ。』

「超えると……。どうなるんだ？」

『世界が支えきれんで崩壊するか、そうなる前に限界を超えた人間を世界が消すか、大抵はどっちかじやのう。』

「っ！？」

『じゃが、今回は特別にのう。お主の両親とその親戚がの、必死に頼んできたのじゃ。「ナオヤを殺さないでくれ」と。だから特別じゃ。』

「っ！？……………父さんと母さんと……………その親戚の人は死んだんじゃ……………」

『無論、死んでしまっているがの。消える訳じゃないんじや。ちゃっかり元気にしておるぞ？』

「・・・・・・・・」

不覚にも泣きそうになってしまった。俺を産んでくれたのにその後の人生を奪ってしまった母親、そのショックと仕事が増えたせいから事故を起こして死んでしまった父親、

そして今まで俺のことを何よりも大切に育ててくれた親戚。感謝してもしきれないのに一度もお礼を言わせてくれずに逝ってしまった。親孝行もできなかった。それが心残りだった。

そして・・・・・・・・それならなおさらこの大切な命失うわけにはいかなかった。ましてや存在してたことをなかったことになってさせる訳にはいかなかった。絶対に。

「・・・・・・・・それで、特別っていうのはどういうことだ？」

『それは、もう少し説明せねばいかんのう。さっきも言った通り世界は幾多も存在しておる。そしてみな、その存在を知っておるのじや。』

「?どういうことだ？」

『実はのう・・・・・・・・』

「大体分かった。つまりこの世界に存在する本のなかの世界が、そのまんま存在しているということか。たとえば緋弾のアリアとか。」

『そういうことじゃ。』

「そしてその世界のうち、俺の能力を支えることができる世界に非難してその世界で暮らしていくということか。」

『そういうことじゃ。ちなみにお主の能力では行けるところが一つしかなかった。』

「そんなに俺の能力やばいのかよ!？」

そんなに力があるのはうれしいような気がするが、そのせいでこの世界とも友達ともおさらばなんていうのはなんかいやだ。

「ちなみにどこなんだ？」

『うむ。お主の言った「緋弾のアリア」の世界じゃ』

「・・・・・・は？マジで？」

なんてこったー・・・・・・。さっきこの命を大切にしていこうとは思ってたのに常に命の危険にさらされる世界かよー！？

まあ好きだからいいけど。緋弾のアリア。

『で、そのままの身体能力で行くについて3日くらいで逝ってしまそうなのもう。5つの願いをかなえよう。』

「5つってどんな願いもか？」

普通いろんなところで聞く話だと1つか2つくらいじゃね？だとし

たらいったいこの人何者……。

『当然じゃろう。わし、神様じゃし。しかも最高位の。』

「は？」

『じゃから、わし神様。一番上の位の神様じゃよ。最高神とか呼ばれとるのう。』

はっはっは神様でした。しかも最高位だって。俺ずっとため口なんですけどー逆鱗に触れて消されたらどうしようwwww。

「すいませんっしたあああああああああ！！！！！！！！」

『おおう！？』

とりあえず全力で土下座しました。はい。

『まあまあそんなの気にせんでよいから、願い事を5つ言ってみなさい。』

「はっ！！！それでも3日で逝ってしまうくらい危ないんじゃないか・・・ちゃんとした願い事を考えなければ・・・」

『やっと落ち着きおったわ・・・』

「そうだなあ・・・じゃあ努力した時の能力の伸びを最大限にしてほしい。」

『わかった。』

「それから記憶はもったまんまで、見た目は・・・いいや。向こうでの俺の家をキンジの部屋の隣で。」

『わかった。あと3つじゃ。』

「？あとふたつだろ？」

『・・・ふふつ。わしもお主が気に入ったよ。残りの願いは決まった時にきこう』

「え？」

『願いが決まったら頭のなかでわしを呼べ。神様とでも呼べばすぐに行こう』

まあ、ぱっと思いつかなかったから助かるけど。

『それにしてもお主・・・見た目はそのままでもいいのか？ぱつと見が中性的すぎておもしろい女に見えるんじゃないか・・・』

「それに関してはいいんだ。・・・両親にもらって、親戚に育ててもらった大切な俺の体だ。」

『・・・そうか。』

「それよりいいのか？願い事」

『いいのじゃ。それでは準備はいいか？』

「え？ま、まだ心の準備が『いくぞお。それ』って聞いてないいいいーーーーー」

その瞬間、目の前が真っ暗になり俺は意識を手放した。

第0話〜プロローグ〜（後書き）

途中で一回書き直しているので矛盾点とか五時だ辻があったら教えてください。

ちなみに今のネタ何人がわかるんでしょうね。っていうかこのあとがき見てる人いるんでしょうかね？それよりこの小説見てる人（ry

第1話く出会いく(前書き)

第1話です。短いかもしれません。ではどうぞく

第1話く出会いく

くキンジ視点く

「その チャリには 爆弾 が 仕掛けて ありやがります」

なにがどうしてこうなったッ!!!

「チャリを 降りやがったり 減速しやがったり すると 爆発しやがります」

チラシを 切り貼りしやがって 作ったような 妙な声でやがります。

「ちくしょおーー!!」

眉を寄せて周りを見渡すといつの間にかセグウェイのようなものが俺の自転車と併走していた。

その上に乗っていたのは――――

「ッ!? UZ I か!？」

その銃座から俺を見つめるのはUZ I。秒間十発の9ミリパラベラムをぶっ放す、イスラエルIMI社の傑作短機関銃だ。サブマシンガン

（くそっ!! IMI社め! 恨んでやる!?!）

そして混乱する頭でチャリのあちこちを調べるとサドルの裏に変な

ものが付いていた。

（タイプまではわからんがプラスチック爆弾！！このサイズなら自転車程度なら木端微塵じゃねえか！？）

そして俺はとりあえず人気のない、第二グラウンド場に向かった。

（ナオヤ視点）

「う．．．ん．．？」

ここは．．．どこだ？たしか神様にあって願いをかなえてもらって．．．それで．．．。

「あああああ！！！！そうだ！！いま何時だ！？」

今日は確か始業式って言ってて．．．．いまが8時過ぎだから．．．

「キンジが！？まあでも『アイツ』がいるしいいか。」

『おい。聞こえるかー？』

「わああ！？びっくりしたあ．．．．ああ聞こえるよー」

『お主はこっちでは始業式からきた転入生じゃからな。』

「へ？どいの？」

『遠山キンジたちが通う武偵校にじゃよ』

「へえ〜……ってことは遅刻じゃん！……！！！」

『ごめん。時間ミスっちゃった。』

「おおおおおおOTZ」

『いや。わざわざ口でオーティーズト言わんでよかろうに。』

遊んでる場合じゃなかった。急がねば！

『いってらー。がんばってくれ。』

「おう。ありがとう、神様。」

そういつて俺は家を飛び出した。

――
（キンジ視点）

（なんだこの状況は……。）

今俺はたいへんなことになっている。え？武偵殺しの模倣犯だから当然だろうって？違う違うw

俺はできるだけ人がいないであろう第二グラウンドに向けて自転車を走らせていた。

その時、学校の屋上から一人の女の子がパラグライダーで俺を助けに來たのだ。

見事、俺は救出されたわけだが・・・その時、爆風で近くにあった体育倉庫のなかに吹っ飛ばされてしまった。

そして今跳び箱のなかではもみくちゃにされ、（その時見つけたんだがこいつの名前はアリア、神埼・H・アリアというらしい）そのアリアのブラウスがめくれあがっていたのだ。

（ッ！？俺はこういうのはダメなんだ！！）

ただ幸いにもあの禁忌のモードにはなっていないかった。が、この胸が押しつけられればきつとなってしまいうだろう。

「へ・・・へ・・・変態ーーーーー！！」

突然、聞こえてきたアニメ声の主はアリアだった。

「最低ーーーーー恩知らずーーーーー人でなしーーーーー！！！！」

「ち、違う！これは俺がやったんじゃないーーーーー」

ーーーーガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガッ

突然の轟音が体育倉庫を襲った。

「ーーーーな、なんだ！？」

「うっ！まだいたのね！？あのおもちゃ！！」

「おもちゃってなんだよ！？」

「あの二輪のセグウェイよ！」

「ってことは今のは銃撃！？」

わからない！今の俺にはどうすればいいのかわからない。

「あんた仮にも武偵校の生徒でしょ！？戦いなさい！！あっちは25台もいるわ！！圧倒的に火力負けする！！」

（25！？いつの間にそんなに！！）

———とそのときだった。予想外のことが起きた。

アリアが銃撃しようとして無意識に前のめりになったため、俺の顔にはアリアの胸が押しつけられてしまった。

（ああ・・・アウトだ。）

なってしまった。H S S・・・ヒステリアモードに。

ガガガガガッガキン

弾切れの音を派手に上げたアリアが身をかがめて拳銃に弾倉を差し替えている。

「———やったか」

「射程圏外に追いやっただけよ。並木の向こうに隠れたけどすぐ出てくるわ」

「強い子だ。それだけでも上出来だよ。」

「――は？」

いきなり口調がクールになった俺にアリアが眉を寄せる。

（ああ・・・やめてくれ俺よ・・・。突然その口調はきもい。）

俺はアリアの細い足と腕にすっぽり収まってしまふ背中を手を回し、立ち上がってしまったていた。

「きゃっ!？」

「ご褒美にちょっとした間だけ――――お姫様にしてあげよう。」

いきなりお姫様だっこされたアリアがボンッと真っ赤になった。

抱っこしたまま跳び箱のふちに足をかけ倉庫の隅まで一気に飛ぶ。

そして積み上げられたマットの上にアリアをちょこんと座らせた。

「な、ななな、なに!？ あんたどうしちゃったの!？」

「姫はその席でごゆっくり、な。銃なんか振り回すのは俺だけでいいだろ？」

第1話く出会いく（後書き）

矛盾点とかあったらおしえてくださーい。

第2話〜主人公の力〜（前書き）

特に書くことがないので第2話、どうぞ〜

第2話〈主人公の力〉

〈ナオヤ視点〉

「はぁ．．．．はぁ．．．．はぁ．．．．」

俺は今、武偵校に向けて全速力で自転車を走らせていた。

「はぁ．．．．はぁ．．．．やっ．．．．見えてきた．．．．
はぁ．．．．」

ズガガガガガガッ

やっと武偵校が見えてきたあたりで突然、ものすごい音が聞こえた。

（ッ！！キンジたちか！？）

音のした方へ向かうと25台のセグウェイが体育倉庫の周りを囲っていた。

（なっ！？25台だ！？！？どういことだ！？！？数が多すぎる！！）

そして体育倉庫のなかの跳び箱からアリアが応戦していた。

（原作通りならここでアリアがキンジに胸押しつけて、それでキンジがHSSになるんだったな。まあ、HSSなら問題ないだろ。）

そしてセグウェイが一旦戻ろうとして、こっちを向き、

(え?・・・あ。)

走ってきた。

「しまったあああああああああああ!!!!!!!!!!!!!!!」

くキンジ視点く

(さて、軽くつぶしてくるか)

「しまったあああああああああああ!!!!!!!!!!!!!!!」

「ッ!?外にだれかいたのかッ!!!」

「アンタ!まずいわよ!?あの数はAかSランクぐらいしか相手にできない!!!」

そのことを聞くまでもなく俺は体育倉庫の外に飛び出た。

「まずいッ!おいその君!!!逃げろ!!!」

そこにいたのは見たことのない女生徒(HSSの状態の俺ならやろうと思えばこの学校の生徒は全員思い出せる)だった。

つまり転校生ということになる。(ん?男の格好?・・・まああとで聞こう。)動揺して俺の声が聞こえてないようだ。あの様子じゃどうやらランクはEかDくらいだろう。

（あれじゃUZI25台は相手にできない!!!!早くなんとかしないッ!!!!）

が、遅かった。

ズガガガガガガガガガッ

「危ないッ!!!!!!逃げろおおお!!!!」

（ナオヤ視点）

（しまったあああ!?!見つかったッ!!!!銃撃戦の心得もないからどうすればいいかわからん!!!!!!）

その時、体育倉庫から誰かが出てきた。

「まずいッ!!その君!!!!逃げろ!!!!」

（キンジ!?!逃げろったってどこにいいいい!!!!!!）

ズガガガガガガガガガッ

（ほわあああああ!!!!撃って———）

その時俺は死んだと、そう思った。

が、

（ッ!?!弾が・・・見える!?!）

俺にはその弾丸が、スローモーションのように見えた。だが

（避けようにも数が多すぎるだろ！？一面弾丸じゃねえか！？）

まるで弾丸のカーテンでも迫ってくるような光景だった。

（ッ！！そうだ！！俺の銃で弾けないか！？）

その瞬間には銃を取り出していた、が

（どう反射させればいいのかわかんねええええ！！！！ッ！！そうだ！！！！！！神様！！！！！！願いたい！！！！）

『なんじゃー、っておおう！？なんかすごいことになつとるのうw』

（わらつとる場合かああ！！！！まあいいや！！！！それより願いたい！！！！HSSのキンジと同等かそれ以上の頭の回転の速さ！！！！）

『わかった。それ。』

その瞬間、俺の頭にはどこに何発撃てば生き残れるかが一瞬で浮かんできた。

（おお！！これで生き残れる！！！！ありがとう神様！！！！）

『そうか。よかった。願いたい事あと二つじゃ』

（わかった！！！！よし！！！！いくぞ！！！！！！）

俺はまず自分の心臓狙って飛んできているうちの一発に向けて撃ち、

その後少し右にさらに一発。

その下に並べて二発ずつ撃った。すると、

キキキキキキキキキキッという音を立ててすべてギリギリで俺をかすめていった。

そのあと、続けて俺に向かって撃ってきた、UZI18台に命中し、見事につぶすことができた。

「ッ！！！おい！！！！そっち狙ってるぞ！！！！」

俺は、キンジがこっちを見て唾然としているうちにUZIに狙われていることを教えた。

「あ、ああ！！」

その直後に――

ズガガガガガガッ

―――UZIがキンジの頭めがけて乱射していた。
（キンジ視点）

（まずいッ！！遅かったか！？）

だがその瞬間、俺にはあの子が一瞬何か考えるように止まったように見えた。

が、そのあと目にもとまらぬ速さで銃を抜き5発撃った。

その弾は見事なまでにUZIの9ミリパラベラムに当たり、さらに跳ね返った弾が他をはじき、あの子に当たる弾だけを弾いた。

（ッ！！！なんて子だ！！ランクは軽くSか！？）

そして跳ね返りながらUZI25台のうち18台に弾を返し、機能を停止させた。

「ッ！！！おい！！！そっち狙ってるぞ！！！」

突然こっちに声をかけられたためかなりびっくりしたが、今はそれどころじゃなかった。

「あ、ああ！！」

なぜなら、あの子が倒したのは18台でまだ7台残っていたからだ。そしてその7台が――――

ズガガガガガガッ

――――撃ってきた。

狙いはすべて俺の頭。

（なかなかいい狙いだ。）

俺は感心しながら上体を反らし、弾をよけつつ七発発砲した。

見なくてもその弾がどこに行くのかがわかる。

そして――

ズガガガガガガガンッ

――7台のUZIはすべて吹き飛ばされた。

第2話く主人公の力く（後書き）

またまた矛盾点などあったら教えてくださいー

第3話〜自己紹介〜（前書き）

第3話どうぞ

第3話〜自己紹介〜

〜ナオヤ視点〜

キンジはU Z Iから弾が出た瞬間後ろに反りかえり、U Z Iを見ることなく発砲した。

その弾は一寸の狂いもなく、U Z Iの銃口に吸い込まれるように入って行き――

ズガガガガガガガンッ

――すべて吹っ飛んだ。

（さすがH S Sモードのキンジは格が違うねえ……）

するとキンジが、

「その君、怪我はなかったかい？」

「ああ……一応大丈夫だ。」

……男に対しても結構やさしいのな……。ちょっとまてよ？君？まさか……。

「それにしても君は女の子なのに強いんだね。」

（やっぱり……はやめに訂正しておくか）

「あのー・・・俺男ですよ？」

「・・・・・・・・なんだって？そうだったのか。勘違いしてごめんな。」

（・・・反応が薄い。まあHSSだしな。それになんだかんだ言っても結局やさしいのな）

「ああいえ。よく間違われるんで気にしてないです。」

「そうか。たずかるよ。これからもう一人を迎えに行くんだが・・・一緒に来るかい？巻き込んだみたいだし、送るよ。」

（アリアだな。まあ会っておきたいし行くかな）

「分かりました。あ、俺は神野ナオヤ。ナオヤって呼んでください。」

「俺は遠山キンジ。キンジと呼んでくれ。それともう敬語じゃなくてもいいよ。」

「そう・・・だな。キンジ、急ごう。もう遅刻だと思うけど。」

「はは・・・そうだな。」

そして俺たちは体育倉庫へ向かった。

そこではアリアが跳び箱のなかから（戻っていたらしい）「なに？どうなったの？」という顔をしていたので軽くキンジから説明があった。

そして――――

「へっ……アンタがUZ-I18台を一瞬でねえ……。」

「ああ、彼がさっきアリアが迎撃した時の叫び声の主さ。」

「ああ……って彼！？こいつ男なの！？」

「そうだよ。俺も最初見た時は女の子だと思ってしまったけどね。」

「俺は神野ナオヤ。よろしく。」

「わ、私は神埼・H・アリアよ。よろしく。」

（ふう……第一印象はまずまずってとこか）

アリアが跳び箱のなかでござと何かしていた。

「あ！アンタ！！さ、さささっきあ、あたしの服！ぬ、脱がそうと
してたでしょ！！」

「アリア。それは悲しい誤解だ。」

そういつてキンジがベルトをはずして跳び箱に投げ入れた。

「あれは不可抗力ってやつだよ。理解してほしい。」

「あ、あれが不可抗力ですって！？」

アリアは跳び箱からキンジのベルトで留めたスカートを押さえつつ

「ひ、一人は変態で、も、もう一人はアホなダダ漏れ女!」

「ちょ、俺は男だというのと、そのダダ漏れ女は妙に卑猥だからやめて!」

「それに俺は変態じゃない。さっきのは誤解なんだよ。」

「う、うるさいうるさいうるさい!」

「……はぁ。まいったなあ……。アリアお得意の暴走状態に入ったようだ。」

「そ、それにアンタはさっきあたしの胸見てた!!これは事実!!立派な強猥よ!!!!」

あ、この流れは……。

「よしアリア。冷静に考えよう。俺は今日から高校二年生だ。中学生を脱がしたりするわけがないだろう。年が離れすぎだ。」

あ、言っちゃった。……逃げようかな?

「あたしは中学生じゃない!!!!」
がすんっ

床を踏みつけすぎて木片が散らばった。

……よし。どさくさにまぎれて逃げよう。

「・・・悪かったよ。インターンで入ってきた小学生だったんだな。助けられた時からそうかなとは思ってたんだよ。それにしてもすごいなアリアちゃんは————」

・・・たぶん勇敢な子だねとでも続けようとしたんだろう。

にしてもどこで逃げよう。

あ、顔を伏せて震えだした・・・俺巻き込まれそうだなあ・・・。

「こ・・・こんなやつ助けるんじゃないかった・・・。」

あちゃー・・・遅かった。

ばぎゅぎゅん

アリアが二回、キンジの足元めがけて発砲した。二丁拳銃で。

「あ・た・し・は・高・二・だ!!!!!!!!!!!!!!」

「じゃ・・・じゃあ俺はこれで・・・。」

と逃げようとしたところでアリアが二丁拳銃をキンジに向けた。

その瞬間キンジはアリアにとびかかりアリアの両腕を同じく両腕で挟んで後ろにつきださせた。

アリアは反射的に引き金を引いた。

バリバリバリッ ガキンガキン

弾が出なかったのどうやら弾切れのようだ。

そのままキンジとアリアが取っ組み合いのような形になったので俺はさっさと逃げようと外に出た。

すると今度はアリアが柔道で言う跳ね腰みたいな技で体格差をもろともせずキンジを投げ飛ばした。

キンジは勢いを殺さずそのまま体育倉庫から転がり出てきた。

なのでまあ、また逃げ損ねた。

「逃げられないわよ！あたしは逃走する犯人を逃したことは！一度も！ない！———あ、あれ？あれれ、あれ？」

叫びながらアリアはスカートのなかをわしゃわしゃと両手でまさぐっていた。

弾切れになったから弾倉を探しているのだろう。

（まあ、原作通りならキンジが持つてるはずだがね）

「ごめんよ」

キンジが、さっき投げられた際にすり取っていたであろう弾倉を掲げて、あさっての方向へ投げた。

ちなみにあさっての方向って結構使われてるけど……どの方向

があさってなんだろうねー・・・。

「――――あ」

遠くの茂みに落ちていく弾倉を見てアリアは、無用の長物になった拳銃を上下に振っていた。

やったな！やったな！という表現らしい。たぶん。

「もう！許さない！泣いて土下座して謝っても許さない！！」

そういつて拳銃をホルスターに収めるとセーラー服の背中に手を突っ込んで、二本の刀を抜いた。

そして驚異的な瞬発力でキンジの両肩めがけて突きを放った。

が、キンジはそれを背後に転がることで回避した。

「強猿男は神妙に―――ってわきゃっ」

アリアが新種のヤマネコのような声を出してこけた。

そこにはさっきキンジが投げた弾倉のなかに入っていたと思われる弾が散らばっていた。

アリアが何度となく立とうとするもそれを踏んでこけてしまい、その間にキンジは逃げてしまった。

「こ、この卑怯者！でっかい風穴。開けてやるんだから――！」

それが、遠山キンジと後に世界中の犯罪者を震え上がらせる鬼武偵、神崎・H・アリアの硝煙にまみれた最低最悪の出会いになったのだった。

「……と原作ではここで終わるのだが……俺がいるんでもうちょつと我慢してね。」

「むきーあいつ、絶対捕まえるんだからー」

俺はいまだに弾を踏んでこけ続けているアリアの元へ足で弾を払って道を作りながら近寄った。

「おい……大丈夫？」

「だ……大丈夫よ！それよりアンタ！なんで犯罪者が目の前にいたのに手伝わなかったの！？」

「いや、だって現場を見てたわけじゃないからどうか知らないし」

（実は全部知ってるけど）

「それにあのUZI倒したのキンジじゃん。正直、あの数はやばかったんじゃない？」

「うっ……さ、さすがに25台は多かったけど……ていうかアンタ！そのうちの18台はアンタがやったんでしょが！！あれどうやったのよ！？」

「あれ？いや、普通に避けられないから俺に当たる奴だけ弾こうとしたらこうなった。」

「こうなったってあんた・・・はあ・・・もういいわ。アンタ、名前はたしかナオヤだったわよね？」

「ああ、そうだけど」

「じゃあナオヤ、アンタ転校生でしょ？一緒に行きましょう。」

「ああ、いいよ」

そうして俺たちは、また問題が発生するであろう教室に向かった。

第3話〜自己紹介〜（後書き）

たぶん次の投稿まで時間がかかると思います。すみません。
まあ誰も読まないから関係ないと思うけど・・・。

第4話くクラスメイトく(前書き)

更新遅れました。すいません。やっぱり難しいですねく不定期更新に変更です。

第4話〈クラスメイト〉

〈ナオヤ視点〉

今、俺は自分の住んでいる部屋の隣にある遠山キンジの部屋にいた。

が・・・

「あんたたち、あたしの奴隷になりなさい!!!」

今のセリフでわかったようにここには今、この部屋に住んでいるから当然である遠山キンジと、

なぜか強引に連れ去られてしまった俺、神野ナオヤと、→のようにとち狂った発言をしている

神埼・H・アリアの三人がいた。

「神様よう・・・何がどうしてこうなったッ!!!」

〈今朝の回想・キンジ視点〉

「・・・というわけで今日から同じクラスになりました。神野ナオヤです。よろしく。」

そういつて自己紹介しているのは今朝、UZI25台に襲われた俺に不幸にも転校そうそう巻き込まれた、

ナオヤだ。そして・・・

「神崎・H・アリアよ。」

俺が襲われたときに助けに来た女の子、アリアだった。

(なんでこうなった・・・)

そう思ったのもつかの間、

「先生、あたしはアイツの隣に座りたい。」

いきなり俺を指差してそんなことを言いやがったのだ

俺は――

ずりっと椅子から転げ落ちる。

絶句。ただ絶句するしかない。

担任が「はい、三学期から転入してきた二人に自己紹介してもらうわよ」とか前置きしていたので嫌な予感しかなかった。

そして俺の死角にあった席から立ち、教壇に上がってきたのがまさにその神崎・H・アリアだった訳だ。

HSSも解けた通常モードの俺の頭ではどうすることもできず、半分は銃撃されるのも覚悟で震えていたんだが・・・。

神崎は突然俺を指差し、「隣に座りたい。」などといってきたのだ。

「な……なんでだよ。」

ようやく喉から出た声で呟く。

（正義の味方として利用する腹じゃないだろう。アイツはHSSに気付いた様子はなかった。気に入った——というのはないな。

怒ってたし。じゃあ隣の席に座ってじっくり殺そうということなのだろうか……）

「よ……よかったなキンジ！！なんか知らんがお前にも春がきたみたいだぞ！！！！」

（来たのは春じゃなくて死神じゃないか？）

「先生！俺転入生さんと席代わります！！！！」

まるで選挙に当選した代議士の秘書みたいに俺の手を握ってぶんぶん振りながら

右隣に座っていた大男が満面の笑みで席を立つ。

身長190？近いツンツン頭のこの男は武藤剛むつとう気。

俺が強襲科アサルトにいた頃、よく俺たちを現場に送ってくれた車輜科ロジの優等生で、

乗り物と名のつくものならスクーターからロケットまで何でも運転できる特技がある。

「あらあら。最近の女子高生は積極的ねえ。それじゃあ武藤君、席代わってあげて。」

先生はなんだか嬉しそうに言っていた。

（俺はうれしくないッ!!）

くナオヤ視点く

さっきからアリアとキンジのことで場が盛り上がってる。つまり・

（・・・俺のことみんな忘れてない？）

まあそれもそうである。美少女であるアリアが転入そうそうキンジの横に座りたい発言である。

さっきから先生もうれしそうにそっちばかり。

（わぁくい、俺帰っていい？）

というか何も言わなかったらこのまま帰っても誰も気づかない気がする。

というか俺が転入したことを忘れられそうである。

というか俺（ry

「あっ！せ、先生！そっちの転入生の席どうしますか？」

キンジがアリアの話題から逃げるように話を変えてきた。・・・う
う・・・キンジ・・・ありがとう。

「あ、そうねえ・・・じゃあ・・・」

「先生！こいつもあたしの隣がいいです。」

「「「「「「「「「「「へ？」」「」「」「」「」「」

クラス全員＋α（俺）、（一部除く。）から声が上がった。

「な・・・なんだってええええ！キンジ！転入生に負けるなよ！
？」

「なんの勝負だよ！？というかなぜ俺に言う！？」

「何言ってやがる！！そんなこと言っていると転入生に神崎さんとな
れるぞ！！」

「な、なにを言って—————」

ずぎゅぎゅんッ

キンジが反論をしようとした瞬間、二つの銃声が轟いた。

先生が銃を抜いていた・・・。

（あれ？原作だとアリアが発砲していたはずじゃ・・・）

「はーいみなさん。静かにしてくださいねー」

先生がものすごく黒い笑みで皆に問いかけていた。

「それでは転入生の二人はさっき決めた席に移動してください。」

「「は、はい」」

あの鬼武偵、神埼・H・アリアですらおびえていた。

「それでは授業をはじめるわね」

先生はいつもの様子に戻っていたが、他のみんなはいまだにおびえ続けていた。

今回の教訓・・・いつも穏やかな人は怒らせてはいけない。

皆このことを心に刻みつけたのだった・・・。

——放課後

「神野君。」

「あ、はい。なんですか先生？」

俺は担任の先生に呼び止められた。

「神野君は一般校からの転校でしたね？」

「はい。そうですけど。」

「えつとですね。武偵にはランクがあるのは知ってますよね？」

「はい。」

武偵ランクとはその武偵の能力を測定し、能力に応じたランク分けをするというものだ。

E〜Sランクまであり、キンジはE（今は。）、アリアはSランクである。

俺は一般校からの転校のため、ランクがまだない。防弾制服と銃だけは先に支給された（らしい。神様談）。

なのでランクを測るために呼び止めたということだ。

「今回はあまり時間がないので、大まかな測定だけするぞ。」

「わかりました。」

おおまかな測定は体力測定、射撃、狙撃、体術などだった。

結果は・・・

「…………お前ほんとに一般校から来たのか？」

「…………はい。一応…………」

強襲科^{アサルト}…………ランクR

狙撃科^{スナイプ}…………ランクR

インクスタ
探偵科・・・ランクR

「・・・お前・・・人間か？」

「・・・はい。多分・・・。」

なんかすごいことになった。

ランクRとはSランクの上に行くランクで世界でも数人しかいないらしい。

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

「あー・・・また今度、残りも測定するからな。」

「・・・はい。分かりました。ではまたきます。」

なかば呆然としながら家に帰宅すると・・・

「遅い！いままでアンタ何やってたのよ！！」

・・・なぜか家にいたエリアが文句を言ってきた。

「・・・いや、ランクの測定に・・・いやまて、なぜここに？・・・その前にどうやってここに？」

「質問が多いわねえ・・・まあいいわ。アンタちよつとこっちに

来なさい。」

いや、俺がよくないのだが。というか質問に答える気ゼロである。

「だから待てって。」

「なによ。うるさいわねえ。」

「いやいやいや!! どうやってここに入ったんだ!!」

「あんな鍵、簡単に開けられるわよ。」

不法侵入である。

「……じゃあなんでここにいる。」

「家のカギを開けたから中に入ったんじゃないの。」

「ああそっかあなるほどね……って納得いくかあああああ!!」

「なかなかの乗り突っ込みね!」

「うるせえ! もう一度言うぞ! な・ん・で・こ・こ・に・い・る!!
!!」

「太陽はなんで昇る? つ——「月はなぜ輝く?」ってなんで分かったのよ!?!」

知っているからな! 全部!!

「勘だ!!」

「嘘よ!!」

「そうだ!!」

「認めた!?じゃあ何でよ!?」

「勘だ!!」

「嘘だ!!」

「そうだ!!」

「認めた!?って無限ループ!?」

「チツ・・・ばれたか。」

「ばれるわよ!!!!」

「でも引っかかってたよな。」

「ッ!!うるさいうるさいうるさい!!いいから黙ってついてきなさい!」

「へいへい・・・」

とりあえずあきらめて俺は付いていくことにした。というかどこに行くのか知ってるし。

「そういえばアンタここに来た時にランク測定してたって言ったわよね？どうなったの？」

「ああ・・・時間がないから細かいのは省略したって言ってたけど・・・」

「うんうん。」

（なんでこいつこんなに俺のランク気にしてんだ？自分には関係ないだろうに・・・ってまさか・・・）

「どうしたの？早く言いなさいよ！」

「あ・・・ああ、えっと・・・アサルト強襲科インクスタと探偵科スナイプと狙撃科だけだったんだけど。」

「うんうん。」

「3つともRランクだったよ。」

「へえ～Rランクねえ。」

「そう。Rランク。」

「・・・は？」

「？なに？」

「何言ってるの・・・？Rランクは世界でも数人しかいないのよ？」

しかもあんたは一般校からきたわけだし・・・アンタがRランクなんてありえないわよ!」

「いや・・・そう言われてもなあ・・・ほんとのことだし。」

「う・・・嘘よ!! そ・・・そんなことあるわけがないじゃない! あ・・・またあたしをからかう気ね!? 許さないわ!」

「いや! ほんとなんだってば! おい! 聞けって!」

「許さない! 貴族を侮辱したことを後悔しなさい!」

そういつてアリアは拳銃をスカートのなかから抜いた。

「————風穴開けてやる!!!!」

（キンジ視点）

「はあ・・・クソッ。また面倒なのに目を付けられたみたいだ・・・。」

俺は学校が終わって帰宅し、銃の整備を終えてリビングで頭を抱えていた。

もちろん神埼・H・アリアについてだ・・・。

「どうするかなあ・・・。来年には一般校に転校するつもりだからあまり面倒事を引っ張って一般校で迷惑かけられないし。」

ずぎゅんずぎゅぎゅんッ

突然、外から銃撃が聞こえた。

「ッ!?なんだ!? なにかあったのか!?」

『待て!! 人の話を聞け! アリア!!』

「ナオヤか!? アイツ元一般高だろ!? マズイ!! って今
なんか... アリアって...?」

聞こえてきたのは今日、一般校から転校してきたという神野ナオヤ
の声と

『うるさいうるさいうるさい! 今更泣きながら土下座しても許さな
いんだから!』

「.....。」

ちょうど悩みの種になっている神埼・H・アリア本人の声だった。

(転校そうそう災難な...合掌。)

俺は心のなかで手を合わせ、なんだか疲れたので寝ようと部屋に戻
ろうとしていた。その時、

『一般高から転校してきてRランクだなんて信じられるわけないで
しょ!?!? しかも強襲科^{アサルト}、探偵科^{インクスタ}、狙撃科^{スナイプ}の三つでなんて!!』

「.....は?」

『だからほんとなんだってば!! そんなに信じられないなら教務科にでも聞けよ!!』

マスターズ

「嘘だろ……。Rランクなんて……。しかも3つも。」

『むぐッ……。仕方ないわね……。明日聞きに行つてやるんだから!! 嘘だったら風穴!!』

『分かったわかった!』

「なんだってんだ……。」

とはいいつつも危ない騒動が終わったので安心して寝れる……。はずだったのだが……。

くナオヤ視点く

なんとかアリアの怒り?をおさめて、やっと目的のキンジの家訪問となった。

ピンポーン……。。

ピンポーンピンポーン……。

あ、アリアの額に怒りマークが見える……。

ピンピンピンピンピンピンピンポーン……。

おいせめてポーンの出番も増やしてやれよ……。

ガチャ・・・

（やっと出てきた・・・。。。。合掌。）

俺は遅くも出てきたキンジに心のなかで合掌しておいた。

「遅い！！！！！！！！遅すぎるわよ！！あたしがきたんだからもつと早く出なさい！！！！！！！！」

そう言いながら（叫びながら？）キンジの鳩尾に見事なドロップキック炸裂！！某角川書店の団長さん並みである。（超えたかな？）

「ぐほああ・・・。。。。な・・・。。。。なに・・・。。。。しやが・・・。。。。る。」

息も絶え絶えにキンジが質問していた。

「アンタが遅すぎるからよ！！」

一部正論である

「ドロップキックはねえだろ！！！！」

もつともである

「うるさいうるさいうるさい！！」

「はあ・・・。。。。」

お？キンジもあきらめたか

「もう・・・いいから中には入れ。近所迷惑だ。」

「いい心がけじゃない。さ、ナオヤも入りなさい。」

（なんで俺命令されてるんだろ・・・）

「ごめんな、キンジ。」

「いや・・・お前が謝ることじゃないだろ。全部アイツが悪い。」

（・・・やっぱり事情を知らないとかこういう態度になるよなあ・
・。。）

「・・・キンジ。」

「?なんだ?」

「アリアをあまり責めないでやってくれ。」

「・・・どういうことだ?」

「・・・悪い。今はまだ話せない。」

今話せばきつと・・・物語が変わってしまう。そのせいでもしかしたら、どこかで原作通りにならず人が死ぬかもしれない。

それだけは・・・何としても避けたい。

「・・・そうか。わかった・・・善処しよう。」

「・・・ありがたい。」

「二人とも何やってるの？はやくきなさい！」

（・・・でもやっぱり、この強引さはイラッとくる何かがあるな・
・・・）

そして俺とキンジはリビングへ足を運んだ。

「来たわね二人とも。よく聞きなさい。」

それが――

「アンタ達！」

――俺たちの――

「あたしの奴隷になりなさい！！！！」

――運命の始まりだった。

第4話〈クラスメイト〉（後書き）

五時だ辻、指摘お願いします。

第5話く絶対奴隷宣言?く(前書き)

キャラが・・・キャラが崩壊しました・・・。
・・・なにがどうしてこうなった!!!!!まだ5話だ!!!!!

第5話〈絶対奴隷宣言?〉

〈ナオヤ視点〉

「アンタ達! あたしの奴隷になりなさい!!」

「……………は?」

（まてまてまてまて!? キンジは原作通りだからわかるけど……俺も!?!）

原作ではアリアとキンジが出会ったとき、俺はいなかった。

そしてUZIの数も25台ではなく7台だったはず。

（原作通りなら俺の出る幕はない。つまり俺が目立つこともなく、奴隷宣言もなかったはず。）

つまり————

（原作と流れが違う（……………）……………!!）

ということはいつどこで、自分の知っている原作の知識と違うことが起きてもおかしくはない。

つまり、原作では死なないはずの人が死ぬかもしれないのだ（……………）

（俺というイレギュラーがいる以上、いずれはこうなるとは思って

たが・・・予想以上に早かったな)

気を抜けばいつだれが死んでもおかしくない世界。

そこでのもつとも有効な武器が一つ、無効化された瞬間だった。が、

(それでも・・・俺は生き残ってやる・・・!! 誰一人として死なせることなく・・・!!!!)

生き残るための強い意志、決意を新たにした瞬間でもあった。

「・・・・・・・・ナオヤ・・・・・・・・現実逃避もそのくらいにして帰って来い・・・・・・・・」

はい、絶賛現実逃避中でした。

「ちょっと!! 聞いているの!?!」

聞いてましたよ。だから逃避したんですよ? わかってます? そこんところ。

「はぁ・・・アリア。奴隷ってどういうことだ?」

まあ知ってるけどね? 原作読破してるし。

「あたしと一緒に強襲科アサルトのパーティーを組みなさい!!」

「俺らに選択の余地は?」

「ない!!!!!!」

(即答かよ・・・)

「もう一度言うわ！アンタ達あたしの奴隷になり」「断る」なんですってえ！！」

さすがにイラッときた。原作ブレイク？俺がいる時点でそうじゃないか。ケケケ・・・ぶっ壊す。

「アンタ達に選ぶ権利はない！黙ってあたしの言うことを聞きなさい！！！！」

「おいアリア！！いくら・・・なん・・・で・・・・・・も」

・・・なぜ、今キンジのセリフが途中で途切れたのかという・・・

「・・・おいアリア・・・いい加減にしろよ・・・？」

俺がマジで切れてしまったからである。

「・・・い・・・あ・・・」

「お前・・・ちょっと調子に・・・乗りすぎだよ・・・？」

「・・・ひ・・・あ・・・」

キンジも、あのアリアですらもがくと震えている。

俺はよく、女と見間違われることがあるくらい中性的な容姿だが、昔何度か親がいないことでいじめられたことがあった。

どうやらそのときある程度の沸点を超えると、プロの傭兵ですらガクガク言わせるような雰囲気を漂わせるらしい。（自覚なし。）

そして最近いろいろと立て続けに起こりすぎて自分でもかなりストレスがあつたらしく・・・

「少し・・・お話しようか・・・?」

「「は・・・はいいいい!!!!」」

こんな感じに切れてしまったようだ。

ただ、もともと友達（と思っている人。）には沸点がかなり高いため、大きな原因は日頃のストレス、引き金はアリア、といったところだ。

おかげで今回はかなりマシらしい。

と、いうことで数分間アリアとO☆H A☆N A☆S H Iしてみた。

「ふう〜・・・」

「「（ガクガクガクガク）」」

「反省・・・した?」

「「（コクコクコクコク）」」

「ならよし!」

「（ふうく……）」

そういえばなんでキンジまであんなに必死にうなずいてるんだろ？

（そうだ、神様。）

『（ビクッ）な……なんじゃ……？』

（？……なんでそんなにびくびくしてんの？）

『そ……そそそんなことはないぞおい！？　ななななにを言ってるのやらさっぱりじゃ！？』

（そ……そうか？）

めちゃくちゃあわててないか？　まあ……いいや。

（そうそう願い事に関してなんだけど……）

『か……数か！？　数が足りんのか！？　百ぐらいかなえればいいかの！？　いいかの！？』

（い……いやいやいや！？　どったの！？　落ち着いて！！）

『お……お慈悲をおく……殺さんといてえ……（ガク　ガクブルブル）』

（いやいや！？　殺したりせんて！　何言ってるの！？）

『ひい~~~~~お助けえええええ!!!!!!』

(あ、ちょー!)

ぶっつ

(なんやろ・・・回線落ちしたみたいな音が・・・。あ、願い事・・・まあ今度でいいか。)

というか本格的に神様がおかしくなってきた。

(・・・神様のところにも精神科とかあるんやろか・・・?)

まあそれは後回しにすることにして・・・と

「・・・で。」

「「(ビクウ)・・・」」

「結局どうすんの？」

まだ震えてた。キンジとアリア。あ、アリアが立った。

「そ・・・それじゃ・・・その、あたしのどれ(ビクッ)・・・
ぱ・・・パートナーに・・・なってほしいかなあ・・・と」

またアリアが人のことを奴隷とかいいかけてたので軽くそっちを見て「ニコッ」ってしてみたらアリアが(ビクッ)ってなった・・・。
かわええ・・・。。はっ! いかんいかん・・・。

「そうだなあ・・・まあパートナーとまではいかんけど、手伝うくらいならいいぜ？」

「本当！？き・・・キンジは？」

「・・・・・・・・」

「キンジ？」

「俺は・・・・・・・・できない。」

「な・・・・・・・・なんでよ！？」

（そうやろなあ・・・キンジはもう武偵やめるつもりやし。でも、根がお人よしやから原作はああった・・・でもこれは原作に似ているだけ。俺がいる。俺というイレギュラーが。どうなることやら）

「俺はもう・・・武偵をやめるんだ！！！」

「ッ！！いいから手伝いなさい！」

「断る」

「ッ！！！！なら！！アンタが手伝うまでここに泊まる！！！！！！！！」

「な・・・・・・・・なにッ！？」

あつ、と・・・・・・・・たしかこの後キンジ追い出されるっけ？

「泊まりこむ準備はできてるのよ!!」

「何勝手に決めてやがるッ!!!ここは俺の家だ!!!!!!」

「うるさいうるさいうるさい!!!」

「・・・・・・3回」

「数えてないで何とか言ってやってくれ!ナオヤ!」

「ひ・・・・・・あ・・・・・・これは・・・・・・その・・・・」

「キンジ、転校するまでなら仕事手伝ってもいいんじゃないか?」

「な・・・・・・なに!?!お前もか!?!」

だって・・・・・・ねえ・・・・?

「俺は別に仕事手伝うのを断るつもりはないよ?ただ奴隷とかいう(ビクッ)日本の法律無視した呼び方があまりにも気に入らない!!(ビクッ)というだけだね」

「・・・・・・」

途中アリアが一部の単語を聞いたたびにビクビクするのがたまらない・・・・ハアハア・・・・。

おっと思考がヤバイほうに・・・・落ちつけ俺。

俺ならいつでも襲える!!!

（ああああああああああああああああああ！！！！なぜ
そういう思考になるッ！！！！）

とりあえず落ち着け．．．．深呼吸しなきゃ．．．．スウー．．．
・ハアー．．．．。

よし！これで大丈夫！！！

「．．．．わかった．．．．」

「本当！？キンジも手伝ってくれるの！？」

ヤバッ！かわええええええええ！あ、鼻血が．．．．ティッシュテ
ィッシュ．．．。

「ただし！！！」キンジティッシュどこー？．．．ただし、強襲^{アサ}
科^{ルト}には「ねーねーキンジーティッシュはー？」．．．強襲科^{アサルト}には
戻ら「キンジー」ああああああもう！
人が大事な話してるときに空気を読めッ！！！」

だって鼻血がでるんだもん。

「この辺血まみれにしていいいなら放置するけど？」

「こちらにあります」

「あんがとー」

軽く脅した？瞬間さっとティッシュの箱を差し出すキンジ。．．．

話ができるわー。

「……………はあ……………で、俺は強襲科アサルトには戻らない。それが条件だ。」

「え？でもアンタは強襲科アサルトではSランクでしょ？なんで探偵科インケスタでEランクなんかでやってんのよ。」

原作ではたしかにキンジが試験の時HSS化して抜き打ちで隠れていた教官含め生徒全員を数分で全員捕縛してSランクになってたはず。

「……………今の俺の実力はただのEランクだ。」

「……………今は（……………）ってことは何かあるのね？強くなるスイッチのようなものが？」

「……………さあな？」

（へえ……………さすが。推理力はないのに勘が半端じゃなく鋭いな。）

「……………まあいいわ。」

「……………ホツ……………」ただ、お願いがあるの……………なんだ？」

「一度だけ、一度だけでいいから強襲科アサルトに戻ってほしいの。」

「……………わかった。「本当!？」ただし、次起きた事件だけだ。」

「そのかわり、どんなに大きな事件でも1つよ。」

「ああ、どんな小さな事件でも一つだ。」

なんとかまとまったな……ってあれ？キング追い出されてない？

……原作がああ………どんどん遠くなっていくうう……。

第6話〈現実〉（前書き）

今回はちょっとシリアスで短めです。その場のノリで書きました W
まさかそのまま二話連続で書くとは思いませんでした・・・。

第6話〈現実〉

〈ナオヤ視点〉

あれから数か月の時が流れた……。

「アリア!!!! キンジ!!!! 無事か!？」

そこに広がっていた光景に俺の思考は停止した。

そこには……

「ククッ……おそかったなあ。ナオヤ君。今ちようど片づけたところだよ?」

「……おい……キンジ……アリア……うそだろ……?」

「クククッうそではないさ? 現実をみるんだ。ほら……そこに転がっているのは誰の頭だい? 言ってみなよ。クククッ。」

そこには、キンジとアリアの頭が転がっていた。瞳孔の開いた生氣のない目……。

俺はぼうぜんと立ち尽くした。

「ククッ……君のお友達はとても弱かったよ?」

そこにいた謎の男のその言葉を聞いた瞬間何かが俺の中ではじけた。

その瞬間、謎の男の首が中を舞った……。

さらに一瞬空中で停止し、粒子レベルで細切れになった。

「・・・ツうあああああああああああああああああああああ
あああああああああ！」

俺は……全力で泣いた……。

「……………ツハ！！ハア……………ハア……………ハア……………」

その瞬間目が覚めていた。

「ハアハア夢か」

なんていやな夢を見るんだろう……そう思った。

ボタンツ

「大丈夫かッ！？ ナオヤッ！？」

「どうしたのッ!？」

あわててドアを開けて入ってきたのはキンジとアリア。

ここはキンジの家の部屋の一つ。なぜ俺がそんなところにいるのか
というと、

「今日はここに泊まるわ。ナオヤも泊まりなさいね。」

「「はい？」」

「だから荷物をそのまま持って帰るのは面倒だから、せめて今日だけ止まってく。ついでだからナオヤも泊まりなさいということ。」

などと言っていた。俺は別にどうでもいいのだが、この家の主であるキンジの許可がないとどうしようもないのでキンジに聞くと「・・・もうどうにでもなれ」と、自暴自棄になっていた。

で、結局いいということになり、俺も泊まっていたわけだ。

「だ・・・大丈夫だ」

俺が軽くびっくりしていると

「よかった・・・ってすごい汗じゃない！？なにがあったの？」

「・・・寝付けなかったか？」

そんなことはなかった。キンジの余っていた部屋のベッドはあまりにも寝心地が良く、横になった瞬間には寝ていたのだから。

「そんなことはない、とても寝つけたんだ。けど・・・。」

夢のことを伝えるべきか迷った。あの夢が本当なら伝えるべきだろう。回避の対策になるだろうから。

でも・・・あんな夢、キンジ達には知ってほしくなかった。できるだけ・・・。

そんな葛藤を繰り返している

「・・・ふう・・・なんでもないならいいわ。さあ、起きて朝ごはんにでもしましょ。」

アリアがそう言うてくれた。いいやつだと・・・おもった。

いつもツンツンしていても、やっぱり鋭いやつで人のことを心配している。

そいつが本当に嫌だといったなら、そういうことはしない。

そんなタイプだと思った。

「・・・そうだな」

キンジもやっぱりお人よしだった。

俺はそんな二人に小さく「・・・ありがとう」と告げ、二人と一緒にリビングへ向かった。

（キンジ視点）

俺は、ナオヤのうめき声で少し早く起きていた。部屋が違って壁を挟んでいるだけで実は数センチ隣でナオヤが寝ていたりする。だからちよつと大きめのうめき声くらいなら壁越しでもわかるようになっていた。

そして数分するとだんだんとナオヤのうめき声が大きくなっていっ

た。

俺は心配になって、ナオヤの部屋へ行こうとベッドから降りたとき、

『・・・・・・・・あああああああああああああ!!!!!!!!!!!!!!』

という叫び声が聞こえた。

俺はあわてて部屋を飛び出した。アリアも同じく目が覚めたらしくあわてて飛び出してきた。

そしてナオヤの部屋に一気に入ると、そこでは全身汗まみれで息をあげているナオヤがいた。

どうしたと聞いてもナオヤは一向にこたえようとしなかった。

そしてアリアが無事ならいいと、朝ごはんにしようと、そういった。

そして俺とアリアがリビングへ向かおうとしたとき、かすかに背後から「・・・・・・・・ありがとう」、そう聞こえたのだった。

俺たちは朝食をとるとすぐ支度をしナオヤは自分の家（隣の部屋。）に戻った。

そして、いつも通りバスに乗って武偵校に向かった。

（ナオヤ視点）

「しまったあああああああ!!!!!!!!!!!!!!」

俺はキンジ達と別れた後、自分の部屋に戻り、学校へ行く支度をしていた。

が、途中で眠気に襲われつい軽く寝てしまった、時間はまだ6時ちよつとなので寝れると踏んだのだった

しっかりと目覚ましをしていたのだがどうやら電池が切れてしまっていたらしく、起きたのは・・・

「は・・・八時二十分！？遅刻ウウウウウウウウ！？」

そして猛スピードで家を出たのだった。

・・・・・・徒歩で。

〳町に住人〵

私は朝、9時に仕事に間に合うように八時半ちよつと前に家を出るんだけど・・・その日はいつもと違った。

支度を終えて外に出たら、突然バタンツと音がしてそっちを見ると、女の子？がものすごい勢いでドアをしめているところだった。（玄関から出て鍵をするまでの時間僅か0.4秒）

そしてそのまま通路から飛び降りて（マンションで二階に部屋があったはず）地面に足がついたと思ったら、すでに着地したところから100mくらい離れたところにいた。（人間なのかな？）

その瞬間目の前を恐ろしい突風が吹いて、その女の子？はいなくなっていた。

第6話〈現実〉（後書き）

最後のとこの女の子？はもちろん神野ナオヤ君です。

第7話くRランクく(前書き)

書き終わっておもった・・・・・・・・今回『も』おもしろくない・・・・・・・・と。

第7話くRランクく

くナオヤ視点く

「ハア・・・ハア・・・ま・・・間に合わねええええ!!」

現在、俺はこっちに転生してから一度も出したことのない本気と書いてマジと読むと言いたくなるくらいの全力で走っていた。

現時刻・・・8時28分。

武偵校まであと少しある。

「うう・・・転入そうそう遅刻とかいやだぜ・・・」

そうぶつぶつと愚痴を言いながら曲がり角を曲がった時、

「・・・ッ・・・おい! そのやつ! 隠れてないで出てこいよ!!」

曲がった角の近くからかなりうまく気配を消している奴を見つけた。多分かなり周りに気を配った状態のSランク武偵でも見つけるのは難しいだろう。

そういうレベル。

「・・・よくわかったね。これでもうまく気配は消せていたつもりなのだが・・・。」

「・・・うまいってか完璧だったよ。俺じゃなきゃ見つけるのは難しいだろうな。」

（俺の気配察知能力、神様が言うには最高のレベルまで達していたはず・・・。こいついったい何者だ？ってか）

「いつまで隠れてるんだ？」

「・・・そうだね。そろそろ自己紹介と行こうか。」

そいつは姿を現した。少し前から何となくわかってはいた。こいつが誰なのか。なぜあんなにも気配を消して俺を付けていたのか。

・・・だがこの予想は正直当たってほしくなかった。

「僕の名前は————」

その男はとてよく見憶えのある奴だった。そして————

「————シャーロック・ホームズ。君を迎えに来たよ。神野ナオヤ君？」

————アリアのもっとも尊敬する人物であり、敵だった。

（キンジ視点）

俺は強襲科^{アサルト}の死ね死ね団とあいさつを（おもに、「俺より早く死んでくれ！」みたいな死ねという挨拶だ。こっちではこれが当たり前の挨拶だ。）して

強襲科アサルトを抜けた。夕焼けのなか、門のところに背中をついて待っていたちびっこがいた。言うまでもなくアリアだ。

そして、不機嫌に歩き始めた俺の横をアリアが付いてきた。

「アンタ……人気者だったのね。」

「あんな奴らに好かれたくはないな」

本音である。

「あんたって人づきあいも悪いし……ネクラ？な感じもするけど、ここみんなはなんかあんたに一目置いてる感じがした。」

たぶん、それはきっと、入試のことを覚えているからだろう。ヒステリアモードの俺のことを。

俺たち強襲科アサルトの志願者たちは、全員14階建ての廃屋に散らばり、武装したうえで自分たち以外の受験生を捕縛し合うという実戦形式のものだった。

そして俺は自分以外の受験生を全員倒し、または縄で縛りあげた——抜き打ちで潜んでいた教官五人も。

「あのさキンジ。」

「なんだ。」

「ありがとね。」

「何をいまさら。」

そう俺にうれしそうに告げてくる。

（そりゃお前はうれしいだろうよ。俺はうれしくないがな。）

俺はもう、武偵を辞めるんだ。厄介事には首を突っ込みたくなんかない。

「勘違いはするなよ？俺は一度だけこっちに帰ってきただけだ。一軒だけ解決したらすぐ探偵科インクスタに戻る。」

「分かってる。でも強襲科アサルトのなかを歩いてる時のキンジ、皆に囲まれてかつこよかったよ。」

「・・・」

なんでそういうことを言う。

本人にそんなつもりはないだろうが、女子に——見た目だけはとにかく可愛い奴にそういうことを言われると言葉に詰まる。

「ここでは皆、私に近寄ってこないのよ。実力差がありすぎて・・・まあ、あたしは『独唱曲』アリアだからいいんだけど。」

「・・・？」

「アリアってね。オペラの独唱曲っていう意味もあるんだよ？一人のパート。一人ぼっち。」

「それで？俺と組んで『デュエット』にでもなるつもりか？」

アリアのほうを見ずにそういうと、アリアがクスクス笑っている。

横目で見るとほんとに楽しそうに。

「あんたもおもしろいこと言えるじゃない。」

「おもしろくないだろ？」

「おもしろいわよ。」

・・・どこがおもしろかったのだろう。

「お前のツボは分らん。」

「やっぱりキンジ強襲科（こ）に戻ってから活き活きしだした。ここに来るまではなんだか無理してるみたいで苦しそうだったよ？」

「そんなこと・・・ないッ」

また恥ずかしいことを言う。

俺はアリアの話を聞きたくなかった。

何か本当のことを言われている気がして――――

「俺はゲーセンに寄って帰る。お前はさっさと帰れ。」

「バス停までは一緒ですよーだ。」

アリアはベーと舌を出して笑う。

相変わらず憎まれ口をたたいてはいるが、俺を強襲科アサルトに連れ戻したことが本当にうれしいのだろう。顔に出ている。

「ねえ・・・ゲーセンって何？」

「ん？ゲーセンもしらねえのか。」

「仕方ないでしょ。まだこっち来たばかりなんだから。」

それもそうだ。

「ゲームセンターのことだ。」

「んーじゃああたしも一緒に行く。パーティー組んでくれるお礼。」

「来なくていい。それはお礼じゃなくて罰ゲームだ。」

俺は少し早足に歩いていく。

するとアリアはニヤーと笑って、俺の真横を付いてくる。

俺はさらに大股で歩く。

アリアもスカートひらめかせて付いてくる。

「ついてくんな！今はお前の面なんて見たくない！」

「あたしもあんたのアホ面なんて見たくない！」

「じゃあなおさらついてくんな!!!」

「ヤダ!!!」

そうしていつの間にか全力疾走でゲームセンターの前まで来ていた・
・・・。

「ハア・・・ハア・・・これ・・・なに？」

「ハア・・・ハア・・・UFOキャッチャーだ・・・。」

「UFOキャッチ？なんか子供っぽい名前。まあどうせアンタが行くようなところだからくだらないんでしょうけ・・・ど・・・。」

「・・・どうした？」

スタスタスタビタンツ

突然アリアが歩きだしてUFOキャッチャーのガラスにへばりついた。

身長の高さも相まって本物の小学生みたいだ。

こんな恰好でここにいたら警察に補導されるんじゃないだろうか。

「・・・おい。」

「・・・・・・・・」

「そんなに珍しいのか？」

「・・・・・・・・」

「おい。」

「・・・・・・・・かわいい・・・・・・・・」

ズルッ

ものすごい勢いでこけそうになった。

（あの双剣^{カドラ}双銃のARIA様がUFOキャッチャーのぬいぐるみ見て
かわいいーかよ・・・）

「ほしいのか？」

「とれるの!？」

「あ、ああ。幼稚園児でもできるようなもんだ。」

「すぐにできる？」

「ああ。やってみるか？」

「（コクコクコク）」

ARIAがこっちをみて首を縦に振っている。

（なんだこのアリアは……。調子が狂う。）

そうしてやり方を教えたが……

「い、今のは練習よ！」

カチャ ポチ ポチ

（狙いが悪い。あれじゃとれん。）

ウィーン………ぽと

「キィ————」

「お、落ち着け！壊れるなアリア！」

そしてアリアが3000円くらい浪費したところ……

（いかん……。アイツギャンブルとかにはまってたいへんな目にあうタイプだ……。はあ……。仕方ない）

「どけ……。俺がやる。」

カチャ ポチ ポチ

アームにはライオンらしきものが一匹、しっかり挟まれている。そして……

ウィーン………

アームにはさらに同じくライオンらしきもののタグが引っかかっている。

（二匹目は確実に取れる。二匹目は運が良ければいけるか・・・？）

ウーン・・・ポトポト

「よし!!」

二匹のライオンらしきものはうまく穴に落ちてくれた。

「やったー!」

パチン

俺たちは無意識のうちにハイタッチしていた。

「・・・あ」

「・・・ハッ!いまのは・・・そのう・・・」

・・・気まずッ!!!

「えっと・・・ほれ。」

「え?くれるの?」

「そのために取ったんだろが。」

そういつてアリアに二匹押しつけた。

「……………」

「……………」

「そうだ。これ一匹アンタにあげるわ。アンタの手柄だからね！」

アリアはさっきとったライオンのようなものを一匹俺に渡した。

「お、おう」

「かぁーわぁーいいー」

チクシヨウ……そんなうれしそうな顔しやがって……。

それにしても……アリア。

人形に抱きつくのはいいが……。レオポン（この人形の名前らしい。タグに書いてあった。）破裂しそうだぞ。

そして俺はこれが携帯ストラップになっていることに気がついた。

俺は携帯を取り出し、ストラップをつけようとしているのだが……

「……………」

「うーん……………」

どうやらアリアも気づいたようだが苦戦しているようだ。

「そうだ。キンジ、どっちが早くつけられるか競争よ！」

「なんだそりゃ。ガキかお前。」

「やったわ。入りそうよ」

「こっちも・・・お前なんかには負けねえ・・・。」

その時、

「よう！二人とも！楽しそうだな！」

ナオヤがやってきた。

くナオヤ視点く

「よう！二人とも！楽しそうだな！」

なんだなんだく？おそろいのストラップ・・・ああ、あれか。

アリアがうまく取りきらんでキンジがとってやったってやつか。

どうやらここまでちゃんと原作通り見たいだな。

「あ！ナオヤ！！あんた今までどこにいたのよ！？学校にも来てなかったらしいし！！」

「……なんかあったのか？」

「そうだなあ……」

あったっちゃあったな。なんせ伊・Ｕーのボスがお出ましになったんだから。

俺は朝、シャーロック・ホームズに会い、その後やつと少し話した。

やつは、

「君にお願いがあつてね。」

「……なんだ？」

「伊・Ｕーに来ないかい？」

「……なぜ俺なんだ？」

「君がこの世界の人間とは思えないくらい強いからさ。」

「率直に言おう。断る。」

「ふむ……なぜだい？」

「めんどい。」

「……なんだって？」

「いやだから、伊・Ｕーはめんどくさいからヤダ。」

だって無原罪のブラドとかいるじゃん？ キンジたち敵にまわっちゃ
うじゃん？ めんどくさくね？

「・・・プツ・・・ハハハハ。そうか・・・めんどくさいか。」

「ああ、それに今の生活もなかなか面白いんでね。」

「ならしかたない。・・・ここは引くでしょう。」

「・・・戦わないのか？」

「君には勝てないよ。君のほうが圧倒的に強い。」

「そうかい。過大評価だと思うがね。」

「君は自分を過小評価しすぎだよ。・・・それでは僕はそろそろ行く
よ？」

「・・・ああ。いずれまた会うだろうしな・・・。」

そういった瞬間、やつの気配は消えた。

その後は学校に行き授業を受けようと思ったのだが・・・

「おい神野。ちょっとこい。」

「はい？ なんですか？」

担任の先生に呼び止められた。理由は・・・

「神野。今日中に残りの試験をする。」

「はい？今日ですか。うーん・・・授業はいいんですか？」

「ああ、特別免除だ。」

「というわけだよ。キンジ、アリア。」

説明したのは後半の試験のそこだけだけどね！！

「ふーん・・・で？どうなったの？」

「ああー・・・えつとその・・・」

「？早く言いなさいよ。」

「・・・んぶ・・・ンク・・・」

「は？なに？」

「全部・・・Rランクだった・・・。」

「・・・・・・は？・・・・・・はあああああ

あああああああああああああああああ！？・・・

・・・」

「全部Rランクですって!?! あんたふざけてんの!?! ケンカ売ってんの!?! ありえる訳ないでしょうが!!!!!!!!!!」

いやだってほんとなんだもん!!

「なに!?! アンタ超偵なの!?! 使えるの超能力!?!」

「ああ……なんか使えたよ。えっと……^{グレード}G42……だっ
たっけ?」

「はあああああああああああ!?!? 42!?! 人間が出せる
数値じゃないわよ!?! アンタ本当に何者なのよ!!!!!!!!!!」

いや……そういわれても……ねえ?

でも確か……白雪がG17で世界に数人しかいないって……。

じゃあ42ってなんなの? っていう……。

神様ああああああ俺の能力どこまでチートなんですかああああ
ああ。

「ま、まあまあ落ち着いて!」

「これが落ち着いていられるわけないでしょおーーーーー!」

「ここゲームセンターだから!?!!」

「はっ!!!!!!!!!!」
「・・・・・・・・・・ツ・・・・う・・・・」

アリアはここがゲーセンだということを忘れていたらしい。

気づいたとたんに顔を真っ赤にして静かになった。

そしてとりあえず家に帰り、詳しく説明することになった。

「一通りランクの説明」

「つまり、アンタ一人で回復、武器などの整備、情報収集、近中遠距離戦闘、狙撃まで何でもこなせるわけね・・・・。」

「そういうこと。」

「はっきり言って信じられない。」

「ですよねぇ・・・・」

「だから私と勝負しなさい!」

「へ?」

「あんたがRランクであることを証明しなさい!」

「・・・・・・・・・・はぁ・・・・・・わかったよ・・・・。」

「じゃあ行くわよ。」

「はいはい……。キンジも来るか？」

「ああ……。Rランク、見てみたいからな。」

「そうか。」

そして俺たちは、武偵校のグラウンドを教師の許可をもらって、使わせてもらうことにした。

ちなみに、^{マスターズ}教務科も興味があるらしく、何人か立ち合うらしい。

「それでは模擬戦を始めるぞ！ 神埼！ 神野！ 用意はいいか？」

「「はい！」」

「始め！！！」

その声とともにアリアが突撃してきた。

武偵校の制服は防弾、防刃性になっていて銃は決定打にはならない。なので銃を打撃の武器として使う。

「はぁ！」

掛け声とともにアリアが右足でけりを放つ。が……

アリアのけりに合わせて左手で受け止め、そのまま足をつかみ、鉛筆削りのような感じで一回転。（わからなかったらアニメ、日○をみてくれ！○常のみ○ちゃんが使っているぞ！）

アリアはその回転にあわせ自分からジャンプして威力を落とし、その勢いで上から左足でかかと落としを放ってくる。

（さすがに・・・強いなあ。）

そのけりをアリアの足から両手を離して白刃取りの構えでつかむ。ふりをして、アリアが足を振り下ろした瞬間バックステップ。一度距離をとる。

アリアは体術だけでは無理があると判断したのかガバメントを抜いた。

ババンバンッ

三連射。距離が近く、俺が動かなかったので不意を突いて撃ったのだと思っているようだ。アリアは当たることを確信している。

俺は・・・

スッ・・・と体を少し動かし、弾を避けた（・・・）。

「・・・ッ！！！」

さすがに驚きを隠せないらしい。教師陣も啞然としている。

アリアは、

ババババババンッ

とかなりの連続射撃を開始する。狙いはすべて別。すごい精密射撃

だ。

一発目は左足。少し内側にずらして避ける。二発目と三発目は右足。今度は外がわの後ろへ少しずらす。

四発目は鳩尾、はさっき横に動いたので当たらない。五発目は右、六発目は左腕、腕を少し上にあげる。

すると、

ヒュン・・・・・・・・

すべての弾が俺に当たらずに反対側へ飛んでいく。

「なっ！！！！・・・」

アリアはびっくり、教師は啞然としている。まあそりゃあねえ・・・

・素で銃弾見極めて完璧に避けるとかWWW

よし！あれをやろう！そうおもって俺が右手を左にもってきて後ろに思いつき引き。

アリアがよくわからないけどチャンス！とでも思ったのか残っていた最後の一発を撃ってきた。ラッキー！

バンッ

そして俺は弾に合わせて全力？で腕を振る。その時銃弾に合わせて、指を動かし、挟む。そしてそのまま一回転し、方向をずらす。

そう、これは原作でHSSのキンジが使う技だ。そして……
ガキインガキイン

「キャツ……!!」

アリアが持っていたガバメントの片方にあてた。さらにその跳弾で
もう片方を弾く。

そしてアリアが銃を離れた瞬間に一気に詰めより、首にポケットか
ら出したナイフを添える。

「そこまで!」

それで決着はついた。

「うつ……たしかに強いわね……」

「そりゃどーも。」

にしても単調な技しか使わなかったなあ……アリア。まあいい
けどね。

「さて、神野。あとでもう少し聞きたいことがある。いいか？」

「?わかりました。あとで職員室に行きます。」

そうして勝負は俺の勝ちとなり、解散となった。

第8話く前触れく（前書き）

なんだか最近アイデアが出た後それを劣化して再現することが多いです……。

そんなわけで今回も面白くなりませんでした。はいすみせん……。

ですが次回からが一番盛り上がるツ!!!!はズツ!!!!というわけではない。

調子に乗ってすいませんでした……。

第8話、どうぞく

第8話〈前触れ〉

〈ナオヤ視点〉

「……で、神野。」

「はい。なんですか？」

「お前……アレ……どうやったんだ？」

「アレ？」

アレ……あれ？あれって何ですかねえ……心当たりがありすぎて困るぜ……！！

あ、もしかして

「あの鉛筆k……じゃなくて……ドラゴンスクリーですか？」

あれってつなぎの技なんだよな……まあ途中で反撃されたからつなぐも何もなかったけど……

「違うわぁ——！！！！あれは他の奴にもできる！！！！」

「そんな！？みんな頑張ってるんですよ!？」

「その答えはさっきの質問の答えにはなってない！！！！それやなくて！最後につかっていた「ああ……」……わかってくれたか？」

「はい！あれですね？」

「そうあれや！」

「うーん・・・あれかあ・・・」

「あれや！！」

「あれねえ・・・」

「いいから早く！！！」

「はいはい・・・」

ふーむ・・・

「あれってなんです？」

「なめとんのかおんどりやああああああああああ！！！！！！」

うお！？先生がキレたWWW他の先生がめっちゃ焦ってなだめてるWWW(爆)

「笑ってないで！！早く教えてください！！！」

「ああ、えつとですね。」

「ほら！先生落ち着いて！話してくれるみたいですよ？」

「う・う・う・う・う」

「わかりません！」

満目の笑みで宣言してやりました W

ブチッ
(何かの切れる音)

「うん．．．」

「うん．．．」

先生が壊れました
W
W
W

[illegible]

ガンツ

「落ち着け!!!」

あ、他の先生に殴られた

「
・
・
・
・
・
・
」

「ふう……おい神野!!!」

「はい？」

「はい？ じゃない！！教師に向かってその態度！ どうなるかわかっているのか！？」

「知りませんよ。そんな・・・こ・・・と・・・」

「お前・・・知りませんだど!?」「ドサッ・・・」・・・って
おい!どうした!?!」

(あ・・・れ・・・?意識・・・が・・・と・・・お・・・
・・・く・・・)

そこで俺は意識をなくした。

くアリア視点く

「はぁ・・・」

あたしは、キンジの家へ戻る途中、ずっと考えていた。

(あの時、私の銃を弾いた技・・・どうやったのかしら?)

あの時アイツは突然腕を後ろに引いて止まった。何がしたかったのか全然わからなかった。

でも何かされる前に撃つただけど・・・その瞬間、アイツの腕が見えなくなって、気づいたら元の位置に戻ってた。

その瞬間、私の銃は二丁とも弾かれてた・・・。

(腕を高速で振って風をおこして弾いた?でも風であんな衝撃は来ない・・・と思う。それにアイツ・・・弾を避けたようには見えなかった・・・ッ!?まさか!?)

アイツは腕をいっぱいに引いていた。そして銃を撃った瞬間、腕は元の位置にあった・・・つまり腕を振ったことになる。そして撃ったはずの弾が当たらない。相手は避けた様子もない。

つまり飛んできた弾に腕を振った時に何かした・・・ということになる。

そしてアイツには弾が当たらずあたしの銃が弾かれた・・・つまり、

(アイツは何らかの方法で弾を弾き返した！？素手で！？)

だけどそれしかあり得ない。

アイツほんとに何者なのよ・・・。

くナオヤ視点く

(う・・・ん・・・？)

暗い・・・とても暗い所にいる・・・。

(俺は・・・？)

『・・・聞こえるか？』

どこから声が聞こえる・・・誰の声・・・？

『聞こえるようじゃな・・・』

聞こえる・・・でも分からない・・・俺は誰なんだ・・・？
ここはどこなんだ・・・？

『ここはお主の意識のなかじゃ・・・。手ひどくやられたのう・・・』

俺は・・・俺の意識・・・？

『ふむ・・・まずは自分のことを思い出して貰わんといかんのう・・・それ。』

・・・ツ!?・・・あああああああああ痛い!!!
頭が・・・割れるように・・・!!!!

『少しじゃ・・・我慢してくれい』

ああああ・・・ああ・・・おさまった・・・。

『少し・・・休め・・・』

また・・・意識が・・・

『ふう・・・いかなのう・・・治療!!!』

あたたかい・・・なんだろう・・・?やさしい光が・・・
疲れが取れるようだ・・・

・・・

『やっと目が覚めたか……』

「……？神様？」

『おう、そうじゃ。』

「へ？ここどこ？なんで神様が目の前に……？……ああ……
また死んだのか……で？こんどはどこに転生すんの？」

『違うわ！お主はまだ死んどらん。』

「へ？じゃあなんでここに？っていうかなんで俺がこっちに？」

『いや、ここはお主の意識のなかじゃから、『こっち』よりも『ここ』のほうが合うと思うぞ？』

「あ、そうなの？」

『そうじゃ。でな？ちと問題が起きた。』

「？……どういうこと？」

『最近、お主全力で戦ったことあったか？』

「？……えーっと……戦ってはないけど全力で走った時はあったよ？」

『その時のせいじゃな……いやのう……その時の力が膨大
での？次元に歪ができてしまったのう……。地獄のやつらに介入
されたのじゃ。この世界に。』

「・・・・・・・・つまりどういうこと?」

『しばらくわしからそっちに干渉できん。つまり会話や願い事がダメになる。』

「マジ?」

『マジ。それでの・・・・今のうちに願い事を叶えておかねばならんのじゃ。』

「うーん・・・・・・・・ってかそのまえに!俺どうなったの!?たしかアリアと戦ったあと・・・・・・・・あれ?思い出せない・・・・・・・・」

『その時じゃ。地獄のやつらが介入したのは。その時にお前に干渉したらしくてのう・・・・・・・・。少しの間の記憶が消えとる。』

「・・・・・・・・俺何やった?」

『あのあと教師について行って、最後の技について聞かれたがのう。アホみたいなギャグ連発して教師の一人がキレて、そのときわしがこっちに連れてきて気絶したというわけじゃ。』

え?つまりあれですか?教師が俺がやった技が気になって聞いたところ、まじめに答えずギャグ連発して教師がキレた?

『ところどころ会話が成り立っておらんかったなあ・・・・・・・・』

・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・死にたい・・・・・・・・。」

『・・・・・・・・で、願い事はどうする?』

神様にスルーされた・・・・。まあいいや・・・・

「・・・・・・・・うーん・・・・・・・・今のところないんだよなあ・・・・・・・・。」

」

『・・・・・・・・はあ・・・・・・・・珍しいくらい欲がないのう・・・・』

「まあ十分生活できてますし」

『仕方ないのう・・・・わしが決める』

「え!?! ちょっとm『そうじゃのう・・・・見たことのある技や能力はすべて使える、デメリットのありなし切り替え可能、身体能力強化。限界突破はすでにあるからいいの?』

「マジ!?! もうチートキャラじゃん!」

『もとからじゃろ?』

「それもそうか」

『それから”王の財宝”ゲート・オブ・パピロンも付けとくかの。』

「え!?! いいの?」

『いいんじゃないよ。おまけじゃ・・・・・・・・ではそろそろ起きるぞい。が

んばるんじゃぞ』

「ありがとう!!」

そこで俺の意識が途切れた。

・
・
・
・
・
・
・

(う・・・ん・・・?)

「知らない天井・・・」

「ん? 起きたか。」

「あれ・・・? 先生、どうしたんですか?」

「いや・・・どっちかというとお前がどうした? っていう状況なんだが・・・。」

え?

「どういことでせう?」

「お前・・・覚えてないんか? 教師バカにして突然気絶したんだぞ?」

「へ?・・・先生・・・俺なんて言っていました?」

「えーっとたしか・・・」

（説明中）

・・・・・・・・・・・・・・・・

「先生」

「なんや？」

「俺の制服とってもらっていいですか？」

「ほれ・・・・・・・・なんや結構落ち着いも」「さようならみなさん。俺は次の世界へ逝く！」ってまたんかい！？」

俺は・・・・・・・・とりあえず先生に制服をとってもらってそこに仕込んであったバタフライナイフで死のうと首にあてたところ、先生に取り押さえられてしまった・・・・・・・・。

「H A ☆ N A ☆ S E ツ！！！！！」

「やめんか！こんくらいのことで死のうとするな！！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「たのむから！自殺に失敗したからってそんな悲しい顔せんといて！！マジで！」

「はぁ・・・・・・・・」

「ため息つきたいのはこっちや・・・・・・・・。まあとりあえず、記憶ないみたいやし、疲れがたまっておかしくなったとでも報告しとくか

らあんしんせい。」

この人は・・・なんてやさしいんだ!!!

「・・・ありがとう・・・ございます・・・(泣)」

「ちょ!?!その歳でなくなや!!はあ・・・で?結局あの技はどうやったんや?」

ああ・・・結局気になるんだ。

「あれはですね・・・」

〈説明〉

「・・・お前ほんとに人間か?」

「・・・はい。多分・・・」

最初はおもしろそうに聞いていた先生だったが、途中からなんか変な表情になって最後には人かどうか疑われました・・・。

まあ俺も自信ないけどね!!

「まあええわ・・・とりあえず少し安静にしとれ。しばらくしたら帰ってええぞ?」

「はい。わかりました。」

そして俺はもう少し寝てから武偵校を出て家に帰ったのだった。

――数日後――

（キンジ視点）

「おい理子。これでいいのか？」

俺は理子に頼まれたもの、

「そうそれぞれ!!」

エログもといギャルゲーを理子に渡しているところだった。

「はぁ・・・で？なんかわかったのか？」

「うん。いくつかあるよー？」

俺は理子に、ギャルゲーを買う代わりにアリアについて調べてほしいと依頼した。

「まず、アリアは貴族^{デーム}だよ。」

「アイツ・・・本物だったのか・・・」

確かに・・・何となくそんな感じはしたなあ・・・荷物から。

「Sランク武偵で強襲^{アサルト}科。いままで犯罪者をすべて一人で、一度で捕まえているんだって。99回連続だってさ」

さすが・・・ふつうは数人で組んで少しずつ追いつめてやっと捕ま

えるのにそれを一発、しかも一人でか。

「今はそのくらいだねー。うふふふふふさぁー帰ったら早くこれしなきゃ――！！！」

そういつて理子はテンションをめっちゃくちや上げて腕を振っていた。

バシィィ！！

が・・・その腕が運悪く、俺の腕時計にクリンヒットしてしまった。

「ああ！ご・・・ごめん！！！！ちよっとみせて！！！」

理子はあわてて腕時計を確認するが・・・

「あう・・・ごめん！こわれてるみたい！貸して！修理するから！！！」

「いや、いいよ。これ安物だったし。」

「だめ！！依頼者のもの壊したなんてあたしの信用にかかわる！！！」

そういつて理子はおれの腕から腕時計をむしり取った

「明日には直して返すから！」

「・・・わかった。たのむ。」

そして理子はすぐに時計をもって帰って行った。

が・・・

（アイツ・・・ギャルゲー忘れてやがる・・・・・・・・。）

理子は依頼の報酬^{ギャルゲー}を忘れて帰っていた。

（今度渡すか・・・はぁ・・・学校に持って行きたくねえ・・・）

俺はそのまま、袋に入ったギャルゲーをもって家に帰るのだった・・・。

第8話く前触れく（後書き）

なんだか最近他の話とコラボさせたいと考えています。

ネギまとかテイルズとか？？

ほかの人のかいた二次創作でもいいかなあ・・・誰かに頼もうかな？

第9話〜事件〜（前書き）

ああ・・・やってしまった・・・。
キャラ崩壊。レキのキャラ
が崩壊しました

第9話〈事件〉

「? ? ? ? 視点」

ここはとある部屋．．．そこにはただ一人の少女がいるだけ．．．。

「くふっ．．．これでアリアとキンジがくつつく．．．そうすればあたしは．．．」

少女は一台のパソコンを見つめる。そこには今、ある場所の監視カメラの映像が映っていた．．．。

「あの神野ナオヤには要注意してっ．．．さーて．．．これから忙しくなるぞお．．．」

少女はパソコンの電源を落とし、準備を「アイタッ」．．．準備を「もうっ！誰よこんなところに葉きよう置いたやつ！！！」．．．準備を「あ、あたしか」．．．。

「ナオヤ視点」

「べ、別にめんどくさかったわけじゃないんだからね! ?」

「「．．．．．」」

はっ！電波を受け取ってしまったようだ。

「．．．キンジ。」

「・・・分かってる。大丈夫だナオヤ。すぐ来るからな？」

そういつてキンジはおもむろにポケットから携帯を取り出し・・・

『ピ、ポ、パ・・・PRRRR・・・ガチャ・・・はい。
こちら○×□病院です。』

「つておい！？俺はまだ大丈夫だ！！！！まだアレな子じゃないッ
ッッッッ！！！！！！！！！！」

「・・・すいません。こちらの勘違いだったようです。」

『そうですか。では、お大事に。』

「はい。すいません。」

どうやら何とかしてもらえたようだ・・・。

「はぁ・・・お前のせいで余計な恥かいたじゃねえか・・・。」

「俺のせいかな！？・・・いや俺のせいかな・・・。」

「ったく・・・で？今のは何なんだ？」

「ん？あれはただ何となくそうしたほうがいいという意味を感じただけだ。」

『ピ、ポ、・・・』

「やめええい!!!!!!」

あ、あぶねえ・・・また電話されそうになった・・・。

『・・・パ・・・・・・・・prrr』

「ストオオオオオオオオオオオオッ！!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「チッ・・・・・・・・なんだよ？」

舌打ちッ!?

「一回やめろつつつたのになぜ続けるかツツツツツツツツッ!？」

「だってお前がやめねえから・・・」

『rrrガチャ・・・・・・・・はいこちら○×△総合病院です。』

「だからなぜ続けるツツ!!!?!?しかもさっきと違うところ!?!?さらに総合病院にLVUPしているツツツツ!!!?!?ツて言うか切れよ!!!!!!!!!!」

「・・・・・・・・すいません・・・・・・・・どうやらこちらの勘違いだったようです。」

『そうですか。ではお大事に』

ブツツ

「はぁ・・・お前のせいで余計な恥かいたじゃねえか・・・。」

「俺のせいかな!? っていうかデジャビュ!？」

「てか何の話してたっけ？」

「えっとたしか・・・。」

俺は倒れた後、少し休んでから武偵校を出ることにしていた。

けど、出る前にアリアがキンジを連れてあわてて戻ってきたのだ。どうやら俺と戦った時が原因になったと思っているらしい。

適当に理由をでっちあげている間に、日が暮れ始めたのでそろそろ帰ることにし、アリアたちと帰宅したというわけだ。

そして今後の話をしている最中に俺が突然叫び、キンジが電話、そして現在に至ると、いうわけだ」

「キンジ。」

『ピ、ポ「やらせるか!!!!」』

どうやら途中から口に出していたらしい。俺は、また電話しようとしているキンジの携帯を没収し、とりあえず話を続ける。

「で・・・結局どうすんだ？」

「とりあえずは事件が起こるのを待って、キンジといっしょに参加

する。その後はあとで話し合い。」

「一回だけだぞ？」

「分かってるわよ……。」

「じゃ……とりあえずそんなくらいで今日はお開きにしますか。」

そんなくらいというか、それ以外に話しあうことがないという事実……はあ……。

「それじゃ俺は戻るぜ？ また明日な―」

「「おやすみ―」」

そして俺は自分の家に（隣の部屋）にもどり銃の整備、明日の準備をすませ、晩御飯をくってすぐ寝た。

めざまし時計の電池が切れていることに気づかずに……。

～キンジ視点～

「さて……俺もそろそろ寝るぞ？」

「そう……あたしはもう少し整備しておくわ。」

「そうか」

ナオヤが帰った後、俺たちはとりあえず晩飯をすませ、明日の準備や銃の整備に取り掛かっていた。

俺は一足早く終わったので先に寝ることにした。が・・・

『ピンポーン』

「誰だ？こんな時間に・・・」

俺が玄関へ向かいドアを開けると・・・

「ヤッホーキーくうーん！時計返しに来たよー？」

「り、理子！？なんでこんな時間に、別に明日でよかったんだぞ？」

「いーのいーの！信用にかかわるんだからできるだけ早く！」

「そうか。まあいいか。ありがとよ。」

「いいのいいの！それじゃまったねえー」

そういうと理子は結構な勢いで走って帰って行った・・・。

「ねえーキンジ。今の誰？」

「ん？理子だ。あいつに頼んでた時計の修理が終わったんだと。で、今返しに来た。」

「ふーん・・・？ま、いつか。」

「じゃ、俺は寝る。おやすみ。」

「うん、おやすみ。」

俺は部屋に戻って明日に準備を軽く確認し、寝た。

ナ才や視点

「ふあゝあ・
・
・
・
・
・
・
ん？」

あれ・・？おかしいな・・・

「眼科に行くか」。

時計に表示してあった時刻は・・・7時57分・・・武偵校へのバスは7時58分。

軽く頬をつねってみる。

「いたたたた・・・あああああああちいいいいい
 いいこおおおおおううううう！！！！！！！！！！」

俺はあわててとび起き着替えて、銃を携帯、朝飯を食べ、荷物を持つ・・・ここまでにかかった時間計32秒。（ちなみに朝食は昨日のうちにパンを買っておいたんだよ？）

時間を確認するも・・・58分・・・

「遅かったアアアアアアアアアア！！！！！」

※実は頬をつねっている間に58分になってました（笑）

～キンジ視点～

俺は少し早めに起きて準備をすませていた。

アリアはどうやらどこかへ出かけていたらしい。起きたらすでにいなかった。

昨日理子から返してもらった時計を見るとまだ少し時間がある。

「お茶でも飲んで時間をつぶすか・・・。」

おかしい

別にのんびりしすぎて遅れたというわけじゃない

ちゃんと時計を確認して時間に合わせて家をでた

なのに・・・

「やった！乗れた！よっしゃああああ！おうキンジ！おはよう！」

7時58分のバスはすでに来ていて生徒たちが押しあいながらバスに乗り込んでいた。

「おい武藤！俺も乗せてくれ！」

「そうしたいとこだが無理だ。もう満員。お前チャリで来いよ！」

「無理だ！俺のチャリはぶっ壊れてんだよ！」

俺の自転車はチャリジャックのときに爆弾で吹っ飛ばされている。
このバスに乗れないと雨のなか徒歩で行かねばならない。この時間からだと確実に遅刻だ。

「無理なもんは無理だぜ？男だろ！一時限目フケちゃえよ！じゃあな！二時限目に会おう！」

二時限目に会おう！じゃねーだろ！

薄情者の武藤の声を最後にバスは無情にもドアを閉めてしまった。

バスの中から聞こえてきた笑い声やおしゃべりがうらや・・・うらめしい。

時刻は8時20分。

もう授業が始まっているだろう。

『p r r r r . . . 』

突然携帯が鳴ったのでレオポンのストラップをひっぱって携帯に出る。

『もしもしキンジ？今どこ？』

（おいおい・・・授業はどうした？）

「ん？強襲科アサルトの近くだが？」

『丁度いいわ。そこからC装備で女子寮の屋上に来なさい！』

「なんだ？強襲科アサルトの授業は5時限目からだろう？」

『授業じゃないわ！事件よ！！できるだけ急ぎなさい！！』

「！わかった。」

『ブツツ・・・』

（これが約束した最初の事件か・・・面倒なのじゃないことを祈ろう・・・。）

俺は携帯をしまおうと急いで女子寮へと向かった。

そして屋上に出ると俺と同じC装備のエリア達がいた。

くナオヤ視点く

「遅刻遅刻遅刻ツツツ！！！！！！」

俺があわてて家を飛び出し、（残念ながら雨なので自転車ではない）バスはもう行ったはずなのでそのまま武偵校へ向かった。

（クソツ・・・晴れていれば自転車で・・・あれ？雨・・・ツ！！？確かバスジャックってそろそろじゃなかったか？）

キンジがレオポンのストラップを持っていた。たしかそのあとすぐの雨の日にバスジャックだったはず。

（やっぱり・・・多分今日だな。）

『p r r r r r・・・』

電話？アリアだな

そう思ってすぐさま電話に出る。

「どうしたアリア？」

『事件よ！アンタ今どこ？』

「家から出たところ。」

『間に合わないわね・・・じゃあ「場所は？」え？』

「集合場所はどこだ？」

『間に合わないわ「いいから」・・・女子寮の屋上よ。C装備で来なさい。』

どうやら気休めに呼んでくれたようだ。こっちとしては授業に遅れた理由を作るチャンスでもある。

「分かった。間に合わなかったら先に行ってくれてかまわん。」

『分かってるわ。じゃ。……ブツ』

「さあて……行きますか。」

俺は全力で女子寮へ向かった。

（アリア視点）

「さて……と。」

今現在、集めることができたのはレキ、ナオヤ、キンジ。

ナオヤは遠すぎるから多分間に合わない。

レキはSランクで経験もかなりあるから大丈夫。問題はナオヤ。

いくらRランクといっても経験が少なすぎる。もともと一般校なんだから当然なんだけど。

キンジはきつとあの力を使ってくれる。

あたしの予想では多分二重人格だと思う。

突然口調が変わったと思ったら、強くなる。

何が原因でそうなるのかはわからないけど……

「なんとかなる。きつと何とかなるわ……。」

ガチャ……

突然ドアが開いた。キンジにしては早すぎる。ナオやは・・・論外。

(じゃあいったい・・・?)

「ようアリア! 来たぜ?」

ナオヤだった。

「は? アンタなんでもう来たの! ? ていうかどうやって! ?」

「いや普通に全力疾走してきた。」

「・・・・・・・・・・は? いやアンタ・・・あのマンションからここまでかなりあるわよ? 走ったとかそういう問題の前に間に合うはずがないんだけど・・・・・・・・」

「まあまあ気にすんな! 現に間に合ってるからいいだろう?」

「・・・・・・・・・・なんかもういいわ。」

ほんとになんなのかしらこいつ。

「で? どういう事件なんだ?」

「バスジャックよ。7時58分の武偵校行きのバスが乗っ取られたわ。」

「なるほど・・・・・・・・・・で? 何人呼んだ?」

「あたしとキンジ、ナオヤ、レキの四人よ。アンタはまだ素人だからレキといっしょに後方にいて。」

「わかった。」

「レキ。こいつ、腕だけは確かだからレキが指示して狙撃を二人でやって。」

「(コク)」

「ナオヤ、絶対半径何Mある？」
キリングレンジ

「?何それ、おいしいの?」

「・・・はあ・・・絶対半径っていうのは狙撃のできる範囲のこと。レキなら2051mよ」

「へ・・・よくわからん!!!!」

「はあ・・・じゃあちょっと調べるわ。レキ、確認よろしく。」

「(コク)」

「どうするんだ?」

「ここからあの発電機のプロペラを手前から順に狙って。」

「わかった。」

発電機の数に二十。一番近いのはここから800m。そこから順に

300m ずつ離れている。つまりレキが狙えるのは五個目まで。

最大で約6200m。6キロ離れたプロペラの羽根まで狙撃できるか。

（ふつうは出来ても3つ目くらいが限界ね。銃にもよるけど。）

「じゃあ行くぞー」

そういつてこいつは・・・突然何もない所に手をつ込んで!? やたらと表面積の大きい見たことのない銃を取り出した。

「つてあんた今どっから出した!? つていうかその銃なに!? 拳銃で狙撃する気!? ていうかそれ拳銃!?!」

「ん? 気にすんなww」

「気にするわよ!!!!!!... はあ... なんかもういいわ。」

「んー・・・ハーデイスの使い方まいちわかんね。今度練習しとこっと。」

そういつてこいつはまた何もない所に銃を戻してまた別の銃を取り出した。

今度は・・・メ、メタルイーター!? ああ2000m先の戦車を破壊したという伝説のある狙撃銃!

威力が強すぎて大人でも扱うのは難しくて、安物のヘルメットなら

撃った反動で碎け散るというのに……。

まあ……こいつだからだいじょうぶね……。

とうかさつきからあのロボットレキが目をまん丸に開いて啞然と
している……。

「……あ、あの……ナオヤ……さん？」

あのレキがびっくりしすぎてはつきりと喋れてない！？

「ん？なんだ？レキ。」

「今は……いったい？」

「気にすんな！体に悪いぜ？」

「は、はあ……。」

あのレキが……これはある意味おもしろいわねえ……

「じゃあ撃つよー」

そういうとあのメタルイーターを拳銃のように片手で構えて……
って！？

「ちよっm『ドンッ』！？」

ナオヤは拳銃のように鋼鉄破り（メタルイーター）を構えたと思っ

たらスコップものぞかず裸眼でしかも片手で撃った。

ふつうならそんなことすれば衝撃で体は吹っ飛ばし腕は確実に折れる。しかも弾をあてるのは無理なはず・・・なのに。

「・・・レキ。」

「・・・ちゃ、着弾しています。・・・」

あのレキが・・・あわてている・・・ていうか!?

「ナオヤ!? アンタ腕大丈夫なの!？」

「ん? いやなんともないが？」

・・・はあ・・・なんかもう・・・

「アンタ・・・狙撃銃の使い方しってる？」

「えっと・・・これ狙撃銃なのか？」

「・・・」

なんかもう・・・いいや・・・

「・・・じゃあ次、撃って。」

「ほいほーい。連続でいい？」

「いいわ。」

「じゃ、フルオートで〜♪」

『ドガガガガガガガガガガガガガッ』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・ねえナオヤ？アンタ・・・・今何発撃った？」

「ん？十九発。残りの弾全部撃ったぞ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

こいつは・・・・・・そういや全部Rランクだったわね・・・・整備も改造も一人でできたわね・・・・。

今この男は立ったまま片手でスコープものぞかずに肉眼でしかも20発も連射して最大で6200m先のプロペラまで狙撃したと言っているのだ。

鋼鉄破りは詳しくは知らないけれど・・・・たしか20発も入ってなかったはず。つまり改造銃。いや・・・・マガジンだけいじったのかもしれないが・・・・。

「・・・・・・・・レキ。」

「・・・・・・・・全弾着弾しています。しかもすべてプロペラのまったく同じところに・・・・。」

「・・・・・・・・誤差は？」

「・・・・・・・・・・スコープを使って確認できるもので誤差・・・・・・・・ツ!?・・・・すべて・・・・・・・・0です。」

「・・・・・・・・・・なんかもいいわ・・・・・・・・ほんと・・・・・・・・・・。」

なんかレキが・・・・・・・・目がうるうるしてきた・・・・・・・・。あの子も結構頑張ってきたものね・・・・・・・・それを目の前で素人があっさり撃ち破ったからね・・・・・・・・。

「・・・・・・・・ほら・・・・・・・・レキ・・・・・・・・今だけ・・・・・・・・私の胸貸してあげるから・・・・・・・・思いつき泣きなさい・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・（コク）・・・・・・・・う・・・・・・・・う・・・・・・・・。」

つらかったね・・・・・・・・レキ。泣いていいよ・・・・・・・・。・・・・・・・・あたしもいっしょに泣こうかしら・・・・・・・・。

「え!?!なに!?!どうしたの!?!なにかあった!?!」

「（キツ）・・・・・・・・。」

「え!?!なんで!?!なんで俺睨まれてるの!?!俺なんかしたあああああああああ!?!」

・・・・・・・・あのレキが・・・・・・・・泣いてさらには睨むなんて・・・・・・・・珍しいこともあるもんね。

ガチャ

「おいアリア！事件・・・って・・・ナオヤ・・・なにしたんだ？」

「え！？俺か！？やっぱ俺なのかあああああああ！？」

・・・キンジ到着・・・。

はあ・・・これからどうなるのかしら・・・。

第9話〈事件〉（後書き）

レキを泣かせてしまいました……。あだ名はロボットレキだったのに……。

今後レキの変化に注意です！

第10話 くバスジャックく (前書き)

あれ？アリアの態度が緩和している・・・

今回はちよつと短くなりましたー

では第十話、どうぞー

第10話 くバスジャックく

くキンジ視点く

「はぁ．．．はぁ．．．はぁ．．．」

息を切らしながら階段を開け上がり、屋上へつながるドアを開ける。
そこには．．．

「おいアリア！事件．．．って．．．」

「．．．．．ぐすつ．．．．．」

「お、おお！やっと来たかキンジ！！」

「．．．．．はぁ．．．」

なぜかアリアの（ない）胸を借りて泣いているレキ。妙におろおろしているナオヤ。ため息をつくアリア。

「．．．．．なにしたんだ？ナオヤ。」

「やっぱり俺か！？俺が何かしたのか！？」

．．．．．はぁ．．．細かいことはこれが終わってからきこう。
それよりも．．．

「おいアリア！事件だろ？早くしないと。」

「そ、そうだったわね。」

アリアがこのタイミングで事件のことを忘れるなんて……. いたい何があったんだろうか…….

「ん、ん。事件はバスジャック！7時58分発の武偵校行きのバスがジャックされたわ。」

「なに！？」

そのバスって俺が乗り損ねたやつか……クソッ…….

「それじゃ行くわよ！」「待ってくれ！」「なに？」

「情報が少なすぎる。もう少しないか？犯人とかの情報は……」

「それはヘリのなかで説明するわ！早く乗って！……ほら、レキも。事件だからいつまでも泣いてないで。」

「（コク）……」

「……」

あのレキが泣いている…….

レキは狙撃科スナイプのSランク武偵で、あまりにも感情と呼べるところを見たことがないので「ロボットレキ」というあだ名がついたほどだ。

そのレキが泣く程とはいったい……. 本当に何やったんだ、ナオヤ…….

くナオヤ視点く

「で？犯人に関しての情報は？」

「今のところほとんどないわ。ただ、相手は武偵殺し。そしてやることだから、あのバスには乗ってないわね……。」

「じゃあどうやってジャックしているんだ？」

キンジが言う。まあ俺は誰が犯人でどうやってるのかも全部わかるがな！キンジの疑問も最もだろう。普通、〇〇ジャックと言ったら、犯人が数人の仲間をひきつれて拳銃やらなにやらで脅して言う通りにさせるからジャックとなる。

その犯人が乗っていないなら……

「いつもの手口よ。爆弾を仕掛けて、機械音声でどこからか指示を出しておどす。武偵殺しはそういう方法でジャックする。」

やっぱりな。ここまでは原作とほとんど変わっていない。俺がいること以外は……。

「……アリア。お前、そこでこは好きか？」

「な、なによ、突然ね……。このでこはお気に入りよ！このよさがわからないならまだまだね！」

まだまだとは何がまだまだなのだろう。

だが、あのでこがお気に入りといいところも変わってなかった。しかしこのままいけばそれは……

「……そうか。俺個人としては前髪おろしてもかわいいと思うんだがなあ……。」

俺はどっちかという Aria の髪は下ろしたほうが好みではある。

「な、ななな、ななに言ってるのよ！こんな時に！！！」

「ん？お前の髪型の感想。」

「ふ、ふん！そこまで言うならおろしてやってもいいけどね！」

「へ？ああ、ありがとう？」

「ツ………／／／／／」

なんか Aria が真っ赤になった……。

「ジ—————……。」

な、なんだろう……レキがめっちゃこっち見てる……。あ、もしかして……。

「レキはその髪型で十分かわいいぞ？」

「ツ………／／／／／」

なんかレキまで Aria と同じ反応を……。もしかして雨にぬれて

風邪でも引いたのか？ いや・・・早すぎるだろ・・・。

「こ、この話はここまで！今は事件が優先よ！！」

あ、そうだった・・・武藤たちの命にかかってるの忘れてた・・・やべえ・・・

「とりあえず今からレキとナオやは一度現場の近くに下ろすわ。そこから狙撃ポイントへ向かって！」

「分かった」

「（コク）」

そして俺とレキは近くのマンションの屋上に降りた。

正確には止まる時間がもったいなかったたので俺がレキを抱えて飛び降りた。（といっても高さは50mくらいあった）

レキがめっちゃ嫌がってたなあ・・・首振ってかわいかったなあ・・・あ、まだちょっと震えてる。

「レキ。バスを探そう。」

「・・・（コク）」

それから俺たちは街中を眺めてバスを探した。

が、はたから見ると二人ともただ突っ立って町を眺めているだけなのでまじめに探しているようには見えない。

と、レキが……

「見つけました。」

というので俺もその方向をみると……

「おお……あったあった。」

『何も見えないぞ？レキ、ナオヤ。』

キンジの声が聞こえてきた。

「あれだろ？今ホテル日航の前右折したやつ。中に武偵校の生徒が見える」

「（コク）」

『……アンタ達視力いくつよ

「左右ともに6・0です」

「左右ともに測定不能。」

『『は？』』

「？」

「だから測定不能。どこまで行っても見えるから教師陣があきらめた。」

『・・・・・・・・』

「・・・・・・・・」

「な、なんだよ」

『レキ、キンジ。気にしたら負けよ。』

『ああ、俺もそう思う。』

「・・・・・・・・はい。」

「?」

まあいいや。

『じゃあ行くわよ、キンジ！ナオヤ、レキ、後方支援頼んだわよ？』

「分かってる」

「はい。」

くキンジ視点く

俺とアリアを乗せたヘリはさっき報告があつた通りのバスへ向かい、とりあえず、屋根の上に着地することができた。

「キンジ！乗客の確認！あたしは爆弾を探すわ！アンタも中で探して！あたしは外を探してみる！」

「わかった!!」

俺は窓から中に入った。

「き、キンジ!」

「よう、武藤。二時限目になる前に会っちゃったな。」

「くそう。こうなるんならお前に席ゆずるときゃよかったぜ。」

「……無事でよかった。」

「……へへ。お前らしくねえな。」

「お前は一応親友だぜ? 心配しないほうがおかしいんだよ。」

「ありがとよ。」

「アリア、乗ってるやつはとりあえず全員無事だ。」

『そう、わかった。じゃあそっちで爆弾を探して……いや、いいわ。こっちにあった。』

「本当か!? じゃあ俺は……ッ!!!!!! みんな伏せろおお!!!!!!」

そこまで言ったところで俺は叫んだ。

ズガガガガガガガガガガガガガガガガッ

ズガガガガガガガガガガガガガガガガッ

ズガガガガガガガガガガガガガガガガッ

外に三台のオープンカーがUZIを乗せて並走し、こちらに銃口を向けた。

「くっ……みんな大丈夫か！」

「キンジ！俺たちは一応全員無事だ！けど、運転手が肩をやられた！」

「くそ！！！！！」

運転してたため伏せることができなかったんだろう。

バスは左車線に大きくずれていく。

避けた対向車がガードレールにぶつかって火花を散らしていた。

（クソッ！わからない、今の俺にはどうすればいいのかが……！！！！）

「む、武藤！運転を変わってくれ！」

俺は防弾ヘルメットを脱いで武藤に投げ渡した。

武藤はヘルメットを受け取りざまにかぶると傷ついた運転手を他の生徒たちと協力して床に下ろし、運転席に座った。

「いいけどよ！俺こないだ改造車がバレてあと一点しか違反できないんだぞ！」

「そもそもこのバスは通行帯違反だ。よかつたな武藤。晴れて免許停だぞ？」

「落ちやがれ！轢いてやる！！」

ぐちぐち言いながらも運転してくれているところをみるとやはり武藤だ。肝心な時やってくれる。

俺は窓から外に出ていわゆるハコ乗りの状態で揺れに耐える。

急カーブの時一瞬間輪走行になったがどうやら中で武藤が生徒に指示を出して片方に寄ってもらったようだ。さすが車輜科優等生。

「アリア！大丈夫か！？」

「キンジ！」

アリアがワイヤーを伝って屋根に上ってきた。

「アリア！ヘルメットどうした！」

「さっきのUZIの弾にブチ割られたのよ！あんたこそどうしたのよ！」

「運転手が負傷した！今武藤に代わってもらっている！その時に渡した！」

「なんでそんな無防備な状態で出てきたのよ！早く隠れ——バカ
！！後ろ！！！！伏せなさいッ！！」

アリアが突然二丁拳銃を抜き、真っ青な顔で突進してきた。後ろを
振り向くと今度はバスの前に位置取ったルノー（さっきのオープン
カーの名前）がUZIをこっちに向けてぶっ放すのが見えた。

銃弾が俺の顔めがけて飛んでくる。

（死んだ——）

俺はそう思った。

第11話くきつと!まだばれていないさ!〜(前書き)

あれ〜?キャラが崩壊していますね。・・・はいすみせん、もともとですね。

シリ阿斯が書けない・・・。

では第11話どうぞ〜

第11話くきつと!まだばれていないさ!く

くナオヤ視点く

「おっ!どうやら着いたみたいだな。しかし……」

俺とレキは屋上でいつでもサポートできるように見張っていた。

「何だあのルノーは……なんでUZI積んでやがる。しかも無人で……」

武偵校のバスの後ろには三台のルノーが迫っていた。しかもUZI付きで……

「ちっ……おいアリア、キンジ!」

『ザッザ——ザッ……ザザッ』

「?どうした?アリア!キンジ!」

「どうやらジャミング(電波妨害)されているようですね。」

何!?いったい誰が……ってアイツしかいねえか……。でも原作ではその時ジャミングされたなんて言ってないし……。やっぱり原作と変わっているのか?

「……とりあえず様子見だ。危なくなったら援護するぞ。」

「わかりました。」

さあて……あちらさんはどう出るか……。

ズガガガガガガガガガッ

「あ」

UZIが撃ちやがった。

ババババンッ

俺は一瞬でメタルイーターを構え、狙撃で銃弾弾きを行おうとしたが……。

「ちっ……数が多かったか。」

銃弾を反らせたのは数百発程度。四分の一ぐらいしかない。

しかも次々撃つせいで弾が本体まで届かなかった。

「……………今、なにをしたのですか？」

ん？わかんなかったかな？

「んあ、えっと、今の五発で今UZIが撃ったうちの……えと500か600くらい？を撃ち落としただけさ。」

「……………。」

「まあ気にすんな。どっちにしろ、たった四分の一ぐらいしか落と

せなかったんだ。お前にもいつか・・・ッ!? しまった!」

俺はのんきにレキに言いながらバスのほうを見ると、バスの後方にさっきのルノー以外で同じ車が10台ほどついていた。

しかも半分はUZI、もう半分は・・・

「なんで車にRPG3本ずつ積んどんじやあああああ!!!!」
ロケットランチャー

そう、一台につき3本ずつRPGを積んでいたのだ!!!

「レキ! お前はあとから来た5台のUZIねらえ! 俺はRPG落とす!」

「わかりました。」

俺は今持っていたメタルイーターともう一つ、同じくメタルイーターを取り出した。もちろん王の財宝から。

またレキがびっくりしてる。まあそりゃそうだろうよ。一つですら大人が扱えないんだ。二つなんざありえんだろよ。

あ、深呼吸してる。あれか? 俺だからとかそういう感じで納得しちゃった感じですか?

「ま、いいや」

俺はメタルイーターを両方構え・・・

「いくぞ! レキ!」

「はい。」

ズドドドドドドドドドドドドド

メタルイーターを同時に連射した。

レキ視点

（私は風の指示に従って動く。）

「私は一発の銃弾」

（いつものようにただ指示に従うだけ。）

「銃弾は人の心を持たない」

（なのに・・・）

「故に何も考えない」

（なのに・・・）

「ただ目的に向かって――――」

（なぜ・・・）

「――――飛ぶだけ。」

（なぜこうも心が動くのだろう。）

タアーン・・・・・・・・タアーン・・・・・・・・タアーン・・・・・・・・

（気になる・・・・・・・・でも今は先に）

タアーン・・・・・・・・タアーン・・・・・・・・

一度弾倉を取り換える。

（こちらを片づけなければ）

タアーン・・・・・・・・タアーン・・・・・・・・タアーン・・・・・・・・タアーン・・・・・・
・・

（この疑問を片づけるためにも・・・・・・・・！！！！）

タアーン・・・・・・・・・・・・・・・・

一台につき二発の要領で発砲し、すべての銃を破壊しつつ、タイヤをつぶして動きを止める。

「ふう〜こっちは終わったぞー。レキーそっちはできたー？」

「目標、すべて無力化完了。こちらもすべて終了しました。」

私はこの人に会うまではなんの考えも持っていなかった。なんの感情も持っていなかった。心がなかった。

なのに、さっき会ったばかりなのに、ただ屋上で少し会話したただけなのに、私は変わった。

最初に会ってあのどこからともなくあの鋼鉄破りを取り出して、立ったまま、片手で、スコップをのぞかず、6 k mさきのプロペラに弾を当てた。

たしかに羽が大きいから当たりやすいかもしれない。偶然じゃないのかな？ そう思った。きっとそのとき疑問を持ったから、

心が生まれた。そう思った。そしてよく見ると弾の着弾地点に関連性があるように思えて、調べてみると着弾地点がすべて同じだった。

つまり羽を取り外して重ね合わせたらまったく同じ位置に穴があるということ。しかも聞いてみたら狙撃銃を知らなかったらしい。・
・ 本場にこの人は何者なんだろうと思った。突然一般校から転校してきて、行きなりRランクなんて言われて、しかもすべての科で。

私はこの人に興味を持った。それと同時に嫉妬した。今まで頑張ってきた。いろんな仕事を受けてきた。そして腕を磨いてきた。それなのに一般校から転校してきた素人に技術で負けた。悔しいと思った。すごいとも思った。

そのとき私はこれが感情だと知った。だんだんと目が熱くなって、何かがあふれそうになった。その時アリアさんが「泣いていい」と言った。泣くとは何なのかわからなかったけど。

アリアさんの胸を借りて、抱きしめられて、目から何かがあふれた時、（ああ・・・これが涙なんだ。泣くということなんだ）とわかった。

ヘリのなかで髪型をかわいいと言ってもらった時、なんだか心がふ

わっとなった。これがうれしいってことなんだ。そうおもった。

私は心を手に入れた。まだまだ小さな心だけど……。きっとこの人といればもっとわかる気がする。そう思った。

風の命令には従う。けれども、私の”意思”でこの人について行ってみよう。そう決心した。

きっと私は……。人になる。

くナオヤ視点く

「ただ目的に向かって——飛ぶだけ」

レキがそう言って引き金を引いた。

レキは標的を弾く時、詩のようなものを歌うらしい。というか原作で狙撃する前に言っていたやつだな。

まさか生で聴ける時が来るとは……。

タアーン……

どうやらすべて撃ち終わったようだ。ん？俺？とっくに終わったさwww。

なんせ二つともフルオートだからな！！

「ふうくこっちは終わったぞー。レキーそっちはできたー？」

「目標、すべて無力化完了。こちらもすべて終了しました。」

よし！あとは観察だ！っとそのまえに、たしかここでアリアは額に傷を負う。そして俺はそれを阻止できる。

なら当然、

「アリアに怪我、させたくねえよな！！！」

「？」

まあレキにはわからんだろうな。このあとどうなるかなんて。っとそろそろか・・・

「お？」

バスの上にキンジが出てきた。どうやらアリアの返事がなくて見に来たらしい。

アリアはバスにへばりついて・・・いや今上がってきた。

（来るか・・・）

アリアが何か叫びながらキンジに突っ込んでいく。

キンジが振り向くと、バスの前方のルノーに乗っているUZIが発砲する瞬間だった。

俺はそれに合わせて引き金を引く。

ドンッ

キンッ

どうやらうまくはじけたようだ。

UZIはアリアがかばいながら撃って倒したようだ。

「さあてキンジ・・・あとはお前ががんばりな。レキ、爆弾を頼む。」

「わかりました。」

『ザッ・・・オヤ・・・ナオヤ!』

「落ちつけキンジ!」

『アリアが撃たれた!!!』

「証拠は?」

『へ?』

「アリアは撃たれてないぞ。俺が狙撃で弾を弾いたからな。多分、気絶しているだけだろう。」

タァーン・・・

ドカーン・・・

レキが爆弾を狙撃ではずして、離れたところで爆発した。うまくいったようだ。

「ほれ。爆弾もどうにかなったぜ？」

『ま・・・マジか。』

「大マジだ。」

『た・・・助かった・・・。サンキューな。』

「気にすんな？俺達は後方支援だからな。」

『・・・ああ。それじゃ、武藤たちに知らせてくる。』

「おう！」

そういつてキンジは窓からまたバスの中へと戻って行った。

「さてと・・・俺たちも戻るぞ。」

「はい」

くきつとまだ正体がばれていない・・・と思う人視点く

「くふっ・・・これでは・・・くふっ・・・くふふっ」

少女は笑う。

「あはッ！あはははははッ！！！！これで・・・これで理・・・

あぶないあぶない。つい癖で言っちゃうところだった・・・。」

少女はドジる。

「これであたしはあたしになる・・・！あたしは4世じゃない・
・・・あたしはあたしだ・・・！！！！あはッ！あはははははは
はッ！！」

少女は笑う。自分が自分になるために。自分であることを証明する
ために。笑い続ける。「アイテッ！」・・・ドジも続く。

第12話〜後始末〜（前書き）

今回ちょっと短くなっちゃいました。
では第12話どうぞ〜

第12話（後始末）

（ナオヤ視点）

爆弾の解除？が終わった後、キンジは武藤たちにこのことを告げ、バスは停車。負傷した運転手はすぐに病院へ行き、生徒は全員無事だったのでそのまま武偵校へ向かった。

が、アリアは気絶していたので一応病院へ行った。といっても検査をするだけなので特に何もないだろうが・・・。

どうやら結構衝撃が強かったらしく、なかなか目を覚まさなかった。検査の結果は問題なし。しばらくすれば目が覚めるだろうということだった。

俺とキンジとレキはそのまま武偵校へもどりマスターズ教務科へ報告をすませてきた。その後、普段通り授業を受けていたのだが・・・。

「・・・キンジ。いい加減元気出せ。アリアには外傷もなかったし大丈夫だろ。」

「・・・ああ・・・わかってはいるんだが・・・。」

キンジが授業中・・・いや、戻ってきてからずっとこの調子で・・・
・・・ああああ鬱陶しい！！！！

「確かにあの時、お前が無防備に出てきたせいでアリアは気絶した。最悪死んでいたかもしれない。」

「うつ……」

「でもなあ、今の（……）お前じゃ仕方ねえだろ？」

「ッ！？お前！？いったいどこまで……」

「まあまあ……人間失敗ぐらいいつでもすんだよ。それで誰かが傷つくかもしれない。自分が傷つくかもしれない。でもなあ、一回経験しないとわからねえだろ？どうして失敗したのか、どうやって失敗しないのか、今回はそれがわかったろ。」

「……」

「なら努力しろよ。いつまでもへこたれてんな。へこたれてたから時間がなくて努力できませんでしたーはねえだろ？俺も手伝ってやる。今回みたいにサポートもしてやる。」

「……」

「一回経験しないとわからない、でもその一回の経験が危険、なら危険じゃなくなるようなサポートができるやつ連れてこいや。じゃなきゃお前自身が何とかしろ。」

「……そうだな。」

「ふう……あれ？俺ってこんな説教系の説得キャラだったっけ？」

なんか最初はもっと違ったような……

「知らん。……まあ、サンキュー。とりあえず俺は俺なりにやつ

てみるわ。」

「ん、そうかい」

「ところで」

いやーよかったよかった。丸く収ま——

「俺のことどこまで知ってるんだ？」

ってなかったですねはい。

「ええ、なんのことかなあ？」

「とぼけるなよ……さっき今の（・・）俺って言ってただろうが。」

「……………ん……………」

はてさて、ここで俺のことにに関してネタばれするべきかどうか。

きつとキンジのことだ。本気で嫌がれば多分引いてくれるだろう。

ただ……なんか隠し事って俺あんまり好きじゃないんだよねえ……
・疲れるし。

でもこれいってもなあ……信じるかなあ……

「……………言いたくないなら無理には聞かないんだが……」

「ちよつと待ってねえ……むう……」

悩む……悩みどころ過ぎる……

……よし！めんどくさい！言っちゃおう！！

「あーそうだな。実は――」

『ブツツ……あー……神野ナオヤ。ちよつと職員室に來い……ブツツ』

「……」

……この先生は礼儀とか知らんのかね。

まあいいや……

「じゃあこの話はまた今度」

「あ、ああ……急がないとしばかれるぞ？」

「大丈夫大丈夫！そんな、またあとでね」

「おう。」

そういつて俺たちは別れた。

にしても……

「はてさて……用件は何でしょうなあ……」

とりあえず俺は職員室へ向かった。

（キンジ視点）

ナオヤと別れてから俺は教室に戻り、普通に授業を受けた。放課後、特にやることもなく、考え事をしながら校内をうろろしていた。

「はぁ・・・」

俺はナオヤに助けられてばかりな気がする。

最近はいろいろと物を借りたりとか、武器の改造とか。

というか・・・

「アイツ本当に何者なんだ・・・」

一般校から来たかと思ったらすべての科でRランク。超偵であり武偵でもある。身体能力や空間把握能力も尋常じゃないらしい（本人談）。

どこからともなく銃を取り出したり、大人ですら扱いに困る鋼鉄破り（メタルイーター）を片手で、立ったまま、しかも二丁も両手に持って、スコープものぞかず、6キロ先の羽根に命中させて、あまつさえ他の羽根の着弾地点と比べても全く一緒の位置を撃つとか・・・
・・・あいついつから人間やめたのかなぁ・・・

・・・なんかほんと何者なんだ。俺のHSSのことも知ってるみたいだったし。

………なんかもう……いや。アイツだから
ってことで納得しよう。

今は放課後で、人の気配などほとんど残っていない。

「そろそろ、見舞いにでも行くか……。」

アリア……もう起きているだろうか。

くナオヤ視点く

「はてさてく俺になんの用があるのやら」

俺は職員室に呼び出された後、キンジと別れてそのまま真っすぐに職員室に向かっていた。

休み時間なのでそこそこひとが廊下にいる。

「おうナオヤ！」

今声をかけてきたのは髪の毛が重力に逆らっているであろうツンツン頭の武藤剛気。

「よう、にしてもよく生きてたなあ、お前。俺バスがジャックされ
たって聞いた瞬間、線香と花を用意しようとしてたのに。」

「ヒドッ！なんで助けるとか無事を確認するとかじゃなくてまず葬
式の準備しようとしてんだよ！」

「まあそんなことよりさあ。」

「そんなことあつかいかよ!？」

「・・・なにやってんだ? 峰・理子・リュパン・4世?」

「ッ!?!?・・・いつ気づいた?」

おー怖い怖いW突然武藤の声から理子の（・・・）声になって低く話しかけてきた。

「いつって・・・最初から?」

「ふん・・・お前、何者だ? お前の過去の経歴については何も出てこなかった。存在自体が。」

まあそりやそうでしょう。こっちでの過去なんて何もないもの。

「さあ? なんだろうね。」

そういった瞬間、理子がワルサーP99を抜いてこっちに向けた。
が・・・

「遅いよ?」

向けた時にはすでに理子の後ろで銃を当てている。

「ッ!?!?!?・・・いつのまに!?!?」

「無理無理。この距離で撃たれても俺にはかすりもしないよ?」

「クッ．．．何が望みだ？」

「．．．望み、ねえ．．．？俺はみんなを助ける。お前も含めて（．．．．．）な。」

「ッ！？どこまで知っている？」

「全部！」

「．．．．．」

そろそろ行かんとしばかれるかなあ．．．．しかたない。

「じゃあこの話はここでお終い！俺呼び出し食らってるから。」

「え！？あ、ちょ」

「じゃ、次は飛行機で会おうか。理子。」

「．．．プッ．．．あはははははは！そっか！そうだね！
じゃあまたね！ナオヤ（．．．）！」

そして理子は最後に大笑いして帰って行った。

「さて、急ぐかな」

俺が急いで職員室へ向かうと．．．

「おそいわ！！いつまで待たせる気や！！」

先生がキレていた。

「すみません。いろいろとあったもんで。」

「まあいいわ・・・」

「それで？ 用件はなんですか？」

多分、今回の事件に関してじゃないかと思うんだけどなあ・・・

「そうそう、お前、退学。」

「・・・・・・・・・・は？」

「だから、退学。」

第13話〈チート万歳〉（前書き）

更新が遅れてすいません。

学校が始まったのでまた遅くなるのかと思います。

不定期更新ですが。

さてさて、ちょっと短いかな？と思ってしまった第13話、どうぞ

1

第13話〈チート万歳〉

〈ナオヤ視点〉

「お前退学。」

「……………は？」

「だから、お前退学。」

……………ふむ……………

『ピ、ポ、パ……………prrrr』

「ん？どこにかけてんだ？」

「いえ。ちょっと先生の頭がアレになったみたいなんで精神科に「やめんか！！！！」あ……………」

先生に携帯を取られてしまった……………これでは先生が助からない！！！！！！

「まだ大丈夫や！！！！アレな子やない！！！」

「先生……………やつらはみんなそう言うんです……………」

そういつて肩にポンっと手を置く。

「だからまだアレな子にはなっていない！！！！私はまだ大丈夫なんや

ああああああああ!!!!!!」

先生・・・・・・・・

「認めたくないのはわかります・・・・。でもッ!!ここで認めないと助からないんですッ!!!!」

「だああああああああああああああ違うっていつとろうがッ!!!!!!」

そんな・・・・・・・・

「もう・・・・・・・・手遅れだったのか・・・・。」

「キシヤアアアアアアアアアアアアアアアア」

「イヤーーーーー本格的に頭が逝っちゃってるよう!!!!」

「こらこら・・・・・・・・そこまでにせんか。」

他の先生が見かねて入ってきた。・・・・よし。

「で、先生?退学と言うのはどういことですか?」

「なんで私の時と態度が全然違うんだあアアアアアアアアアアアアアアアア」

そりゃあ・・・・・・・・ねえ?おもしろいしW

「お前いつか絶対殺す!!!!!!」

「……………で？　どういふことでせう？」

「……………ああ。それは」

「それはお前を試そうとしたんだよ！！！！」

……………つまり

「一般校から突如として入ってきた、実力が人間離れしすぎていてここ（・・・）を一人で落とせそうなくらいの強さを持つ俺が、この学校をどういふ風に思っているのか、敵対したりしないか、それを確かめるために退学の話を持ち出してどういふ反応をするか確かめたかった、ってとこですかね？」

「そ、その通りだ……………」

おお　ww　おもしろいくらいに啞然としている。

まあそれもそうだろう。突然退学といって混乱させ、どう思っているのかを聞き出そうとしたのに調子を崩され、たった一言「お前を試す」の一言だけでここまで当てられたなら信じられるまい　ww　ww　くっくっく　ww　ww

やべえ……………おもしろい！

「……………そこまでわかっているなら率直に聞こう……………。お前はここと敵対する気はあるのか？」

？

「なぜに敵対せねばいけないんですか？こんなに楽しい学校で、キングジたちみたいな友達もいるのに敵対する必要がどこにあります？」

「……お前がイ・ウーのボス、シャーロック・ホームズと接触したのはわかっている。」

「……シャーロックがそこらへんの人間にばれるようなへまはしないだろうから大かた、わざと見つかるように仕組んだな。」

「お前はイ・ウーに入ったのか？」

「いいえ。入ってません。速攻で断らせていただきました。」

「？なぜだ？あそこにいればもっと強くなるかもしれんに……」

「いったでしょう？俺はこの学校が楽しいんです。ここの友達が好きなんです。わざわざ敵対なんかして失いたくないものがたくさんあるんです。」

それにやろうと思えばイ・ウーの技全部使えるしね？

「だから俺はここではつきりと言っておきます。俺はキングジたちやこの学校に敵対する気はありません。」

「……そうか……よかった。」

なんだか先生たちが心底安堵したような、うれしそうな顔をしている。やっぱり教師は教師だ。嫌な奴だっているときはいるけれど……

・ここはいい学校だ。こんなにも生徒のことを考えてくれるいい教師がたくさん集まっている。

「それじゃ！俺はそろそろ行きますね？」

「ああ。」

ガラガラ

職員室のドアを開け外に出る。

「さあて・・・本格的におもしろくなってきた・・・」

誰にも聞こえないように・・・小さく小さく呟いた。

く教師く

「ふう・・・よかった。あんなのが敵じゃなくて。」

「おいおい・・・敵じゃないんだから、あんなの呼ばわりはないだろう。生徒だぞ？」

「嫌です！！！！あんなに弄ばれて・・・私のほうが年上なのに・・・。」

「素のしゃべり方が出るくらいだもんなww」

「うるせえです！！！！」

それにしてもあの子は本当に何者なんだろうか・・・

Sランク武偵を軽くあしらい、人間離れた運動能力、たった一言漏らただけで目的を見抜く鋭さ。

あのイ・ウーのボス直々のお迎えを断れる意思の強さ。あの時の盗聴では断った理由がめんどくさいだった・・・あの超人にめんどくさいって・・・はあ・・・。

「本当に味方でよかった。」

きっとあの子が本気でここを落とそうとすれば数分で制圧できるだろう。一日あれば日本が落とせるはずだ。

「ですが、イ・ウーの行動には、今後、もっと気をつけねば・・・。あの子はとても優しい。きっとこちらの誰かが人質になればあちらにつくだろう。」

「そう、ですね・・・。それだけは何としても避けないと。あの子たちのためにも。」

今のところ、イ・ウーがどんな組織なのか、どのくらいの人数いるのかなどはわかっていない。どんな手段で来るかわからない以上、用心に越したことはない。

「私たちは今やれることを頑張しましょう」

「そうですね・・・。」

そうして私たちは自分たちの仕事に戻って行った。

くアリア視点く

「・・・・・・・・う・・・・・・・・ん・・・・・・・・？」

あたしが目を覚ますとそこは知らない天井だった。

「・・・・・・・・ここは？」

あたしは確かバスジャックで・・・・・・・・

「ッ！？そうだ！？キンジ！？キンジはどうなったの！？？」

たしかバスの上でキンジが無防備に出てきて・・・・・・・・そしたらバスの前方・・・・・・・・キンジの後ろにルノーが居て・・・・・・・・UZIの銃口をこっちに向けてて・・・・・・・・キンジが気づいてなくて・・・・・・・・キンジに向けて・・・・・・・・発砲を・・・・・・・・

「ッ！？・・・・・・・・ヤダ・・・・・・・・ヤダよう・・・・・・・・キンジい・・・・・・・・どこお・・・・・・・・？」

キンジがUZIに撃たれてもし・・・・・・・・もし・・・・・・・・死んじゃった
ら・・・・・・・・

「あたしのせいだ・・・・・・・・無理やり連れ出したあたしのせいだあ・・・・・・・・ヤダよう・・・・・・・・キンジい・・・・・・・・」

そのときだった

すーっと音もなくドアが開いてそこから

「・・・アリア？よかった・・・もうおきて「キンジい！！！！」
うお！？」

キンジが出てきた。ぱっと見どこにも怪我はなく、いつも通りのキンジが出てきた。

「ど、どうし「よかった！生きてたあ・・・キンジが生きてたあ・・・」心配掛けて悪かった。」

ほんとによかったあ・・・

「よかったあ・・・これであたしが罪悪感感じずに生きていけるわあ・・・」

「え！？そっち！？おい！ひどくねえか！？」

「ひどいのはそっちよ！！！！あんな無防備な状態でバスの上に出てきてッ！！！！死んだらどうするつもりだったの！？」

「・・・それは悪かった・・・でもッ！お前もそうだ！あんな状態で飛び込んできて！！弾が当たったら死ぬぞ！？」

「何よ！？助けたのにその言いかたは！？」

「・・・そう・・・だな。悪かった。助けてくれてありがとう。」

「ッ！？・・・なによ。素直ね・・・。」

いつもならさらに怒ってひどいこと言うくせに。

「でも、それでもだ。俺は無名の探偵科、インケスタお前は有名なSランク武偵だ。期待のされ方が違う。それにお前にはあんな危険なまねはしてほしくない。」

「・・・はあ・・・そうね、期待のされ方がちがうわね。正直、期待ならあたしよりもアンタのほうがされてるのよ？元Sランクの強襲科さん？」

「そんなわけないだろう・・・」

「・・・自覚なしなのね・・・まあいいわ

「まあそんなことより・・・痛むところはないか？」

「ん、特にはないわ。・・・っていうかあの後どうなったの？」

「ああ・・・それはなあ」

――説明中――

「・・・はあ・・・つまりあの時の弾はナオヤが弾いてくれたのね？それでレキが爆弾をドラグノフで落としたと・・・」

「まあそういうことだ」

「はあ・・・ほんと、いよいよ人間じゃなくなってきたわねえ・・・ナオヤ。やけにUZIの撃った数と当たった数に差があると思ったら・・・数百発を撃ち落としたですって？・・・なんなのよ、アイツ・・・」

「まあ．．．ナオヤだからな。」

「そうね。ナオヤだしね」

もう他の人が何やっても驚かない気がするわ．．．。

「他の人が何やっても、もう驚かない気がするぞ．．．。」

おんなじこと考えてたみたいね．．。

「「はあ．．．」」

ほんとにどうなるのかしら？

第14話くお見舞い?く(前書き)

前回からかなり更新さぼってました。すみませんOTZ
それでは遅れに遅れた14話、どうぞく

第14話〈お見舞い?〉

〈キンジ視点〉

「さて・・・そろそろ帰るか。」

俺は放課後にアリアの見舞いに来ていたがだんだんと日が落ちてきたのでそろそろ帰ることにした。

「・・・じゃあアリア俺はそろそろ・・・」

「ちょっと待って。」

ん? まだ何か用事があったのか?

「・・・結局ナオヤはこなかったんだけど・・・なにかあったの?」

「あー・・・なんか先生に呼び出されてたぜ?」

「え?・・・あいつなんかやらかしたのかしら・・・」

「さあ・・・?」

〈ナオヤ視点〉

「ふう・・・」

結局先生の退学発言はただ俺を試したただけか・・・あ、キン

ジにメールしとこつと・・・

にしても・・・

「イ・ウー・・・ねえ・・・？・・・めんどくせー・・・」

何であんな人外集団に入らなきゃいけないんだよ・・・

「さて・・・次は確か・・・飛行機のジャックだったけか？うーん・・・止めるべきか・・・」

でも止めるとなあ・・・原作の進行の妨げになるしなあ・・・

「でも・・・飛行機の中でアリアは死にける訳だし・・・出来ればあんなめにはあってほしくないしなあ・・・」

俺なら止めれるけど原作とは違う方向に進んじやうし、そうになると俺の原作知識が当てにならなくなるかもしれないし。

「・・・仕方ない。流れに任せよう！！！」

俺は知らなかった。この選択が悲劇を生むことになるなんて・・・。

（キンジ視点）

『p r r r r r・・・』

「ん？・・・おいアリア。ナオヤからメールだ。」

「なんて？」

えーっと・・・

「『俺、なんか退学になるところだったらしい。』・・・は？」

「へ？」

「「はあああああああ！？」」

「ちょ！？なんだ！？どういうことだ！？やっぱあいつなんかしたのか！！！？？？」

「え！？ナオヤが退学！？ちょっとキンジ！！！他に何か書いてないの！？」

「他には『p r r r r r r』またきた！？」

詳しいこと書いてなかったら直接会いに行かねえと！！！！

「えっと・・・『なんか試されたらしい。』・・・分かるかッ！！！！」

「一体何があったのよおおおお！！！！」

「くそッ！！こうなったら直接『p r r r r r r』またきた！！！！」

「で！？なんて書いてあるの！？」

「えっと・・・『合格したみたい。退学せずにすむ』・・・早く

「言えよ!!!!!!」

「はぁ・・・結局大丈夫だったのね・・・なんかもう良いわ・・・めんどくさい。」

何で先に言わねえんだよ・・・あいついろいろと特別なんだからホントに退学になるのかと思ったじゃねえか・・・。

「まあとにかく・・・退学にならなくて良かった・・・。」

「はぁ・・・何でこんなに疲れてんだろう・・・俺見舞いに来ただけなんだが・・・。」

「あたしも・・・たしか病院で休んでただけなんだけど・・・はぁ・・・。」

「「はぁ・・・。」」

なんかあいつがきてからため息が増えた気がする・・・。

「とりあえず・・・帰るか」

「そうね・・・あたしももうすぐ帰れるみたいだし」

くナオヤ視点く

「へつくしよんッ!!!!・・・誰か噂してんのかな?」

うーん・・・風邪でも引いたかな?

「ていうかくしゃみの原因として先に噂が出るのはおかしいんじゃない？俺、自意識過剰？結構傷つくぜ……」

用事も終わったしそろそろ・・・

「アリアのお見舞いに行くか!!!!」

ん？ までよ？

「たしか原作ではこのお見舞いの時にキンジとアリアがけんかしてたよな……?」

そのせいで一回離れるけどキンジがアリアの傷を思い出してなんか悩んで、そして飛行機の時にまたくつつくんだったよな？

「俺が、アリアの額に弾が当たる前にはじいたから……ここ
でけんかしてるともしかして絆復活イベントなし？アレ？俺フラグ
クラッシュ？もしかしてこれゲームオーバー？」

ふむ。

「やべええええええええええ！？これでけんかしてたら絆復活なし！！飛行機でエリアが死ぬ！？俺が何とかしなくちゃ！！！」とその前に確認だああああ！！」

俺は病院へ全力で、そう全力で向かった。

つまり・・・

「着いた・・・はあ・・・はあ・・・」

約30秒くらいで着いた。

「ふ．．．ふはは．．．さすがチートだぜ．．．．．」

「あ、あんたなにやってんの？」

「．．．？．．．おお．．．アリアか．．．はあ．．．いや、今学校から全速力で来たからな．．．」

「ってあれ？あんたさっきまで学校にいたんじゃないの？学校からメールしたんでしょ？」

「そうだぞ？で、いろいろあつて今急いで来たわけだ。」

「．．．．．はあ．．．そうね。ナオヤだもんね．．．．」

「．．．？？まあいいや。キンジはどこ？」

「えーっと．．．そろそろ来るんじゃない？さっき飲み物買ってくるって言ってたし」

「そっか．．．アリア。おまえキンジとなんかあった？」

「．．．？特には何もなかったわよ？」

「．．．．．そっか」

どうやら俺の存在が結構影響してるみたいだな．．．。バスジャックの時もそんなに言い争ってなかったし、奴隷呼ばわりもしてない

し。

「……？なにかあったの？」

「……いや、なにも。」

「……あんたって一体何者なの？なにを隠しているの？」

「……どういう意味？」

「いや……なんだかこう……特別な……そう、先の事を知っているような雰囲気があるのよ。」

「ッ！？……気のせいだろ？」

「うーん……気のせいじゃないような気がするのよねえ……
今の反応とか？」

「……おまえなら……いいのかな……？」

「ん？なにか言った？」

「いや、なにも。それよりも戻ってきたみたいだぜ？」

どうやら話している間に戻ってきたようだ。向こうからキンジが走ってきた。

「ん？ナオヤも来たのか。もうちょっと早かったらおまえの分も買ってきたんだがな。」

そういつてアリアに買ってきたジュースを一本投げ渡す。

「えー今から買ってこいよー。」

「自分で行ってこいよ!」

「えー……めんどくさい」

「俺もだよ! つうか俺二度手間じゃねえか! 俺はパシリか!？」

「おう!」

「おまえ奴隷扱いすなって言ってたじゃねえか!！」

「奴隷とパシリは別物だツツ!!！」

「ぐっ……に、似たようなもんだろ!!」

な……なに……?

「おまえ……誰かをパシるとき……奴隷のつもりだったのか……」

「え? ……キンジ……そんな風に考えてたの……?」

「ちょ!?! ちがッ!! アリアも信じるなよ!？」

「キンジ……大丈夫よ?」

「よ、よか「あたしがちゃんと教育ちやうきやうしてあげるから!!」 いや!？」

だから違うって言ってんだろ！？なんで信じてんだよ！？」

「キンジ……今ならまだ間に合う。ちようぎよう教育してもらうんだ！！」

「なんでだよ！？俺が何をした！！！！」

「さてアリア……今後のことなんだが……」

「無視か！？無視なのか！？」

「そうねえ……とりあえずこの外見を……」

「俺の意見は反映されないのか！？てか外見は変える必要があるのか！？」

「そうだな……整形して……性格も改変して……性別も変えるか」

「もはやそれは俺と言えるのか！？いやだああ！！女にはなりたくないッ！！根暗で昼行灯な女なんていやだああああああ」

「大丈夫だ！！性格もちようぎよう教育し直すから根暗も昼行灯も消えるんだ！！！！」

「そういう意味じゃねえええええええ！！！！」

ふう……

「あーおもしろかった。」

「そうね。でももう飽きたわ。」

「そうだな」

[illegible]

今日一番の心からの叫び声でしたとき。

「でもおもしろかったよな？」

「そうね。おもしろかったわ。もう飽きたけどね、玩具キンジで遊ぶのも」

「玩具と書いてキンジと読むなあああ！！！！」

「おお……小説にでもしないと分からない表現を確実に読み切るには……おぬしやるな!？」

「何で俺こんなにいじられなきゃいけないんだよおおおおおお
おおおお!!!」

あ、今日一番を更新した。

「やっぱりこれおもしろいな」

「そうね。これおもしろいわね」

「これとか言うなよおおおおおおおおおおお！！！！」

うーん・・・2番目・・・いや、3番目かな？

「なんの順番だ!？」

「おお!?! つっこみキャラの特技、心を読む、が発動したようだな?」

「なんの能力だよ!?!」

「うーん……なんかそろそろ飽きた。」

「そうね。そろそろホントに飽きてきたわね。」

「勝手に遊んで勝手に飽きたとか言うなよ!?!」

「うーん……なんか上手くオチがつけられ「ダメだ!?! それ以上はいけない!?!」……そうだな。なんかかなりメタな発言した気がする。」

「ねえ?」

「「?」なんだ?」

「そろそろ帰らない? だいぶ暗くなってきたんだけど。」

「「……………」」

どうやら玩具^{キンジ}で遊んでいる間に「だから玩具って書いてキンジって読むな!?!」……キンジで遊んでいる間に日が落ちてしまったようだ。

「キンジェ・・・心の中で話している間につっこみを入れるのはやめてくれないか・・・」

「誰がキンジェだ!! なんとなくどう使いたかったかは分かるけどな!!!!」

「わかるならそこにつっこまんでくれ!!」

「・・・そうだな。」

「いや、あのね? 帰ろうっていう話なんだけど・・・」

「・・・・・・・・すいません・・・・・・・・」

「いや・・・いいから帰ろう」

「そうだな。じゃ、帰るか。」

「ん、そうすっかな。」

そうして俺たちはやっと帰ること（オチをつけること）が出来たのだった・・・。

オチが遅くなったのもぐだぐだなのをつけたのも作者だけどね!!!

作（ごめんなさい!!! orz）

・・・・あれ? 今なんか変な電波を受信した気がする・・・・。

第15話〈冤罪〉（前書き）

キャラ崩壊が進みました・・・
さて、それでは第15話、どうぞ

第15話〈冤罪〉

〈ナオヤ視点〉

「ふぁゝあ．．．よく寝た。」

今は朝7時。今日は日曜なので学校もない。そして．．．

「することも無いと．．．」

暇なのでこっちに来てからのことを思い出して整理することにした。

「たしか初めてこっちに来た時は朝の8時過ぎだったっけ？キンジがUZIに襲われる時間だったよなあ．．．」

最初は焦ったがアリアが助けることを思い出し、そのままスルー．．．
．．．するつもりだったのだが。

何をどう間違えたのか神様が転生した時の設定に『今日から武偵校の転校生』というのが入っていたらしく．．．いや、それはよかったのだが時間がなかったという．．．。

そしてあわてて学校へ向かった方がいいが、道端でUZI25台の一斉射撃の対象にされるというまあなんとも恐ろしい目に遭い、その瞬間神様が来て願いをかなえてくれたため、何とか生き残ることに成功．．．したのはいいが願いのおかげで無駄にハイスペックになった．．．。

そして何気にアリアに目を付けられた。キンジといっしょに奴隷扱

いもされた。・・・まあちよつとアリアとO☆H A☆N A☆S H I
したら治ったけどね！！

そのせいでさらなる原作ブレイクだ・・・多分これのおかげでキ
ンジたちの仲が過剰に悪くなることはなかったのだろう。

そしてバスジャック事件。バスを追うルノーは1台のはずなのに3
台まで増えていた。そしてアリアの額を掠るはずだった銃弾は俺が
弾いた。よってアリアの額には傷がなく。どうやらそれによるケン
カもなかったようだ。つまり仲違いすることがなく原作が進む。普
通ならこれでいいんだがなあ・・・。

「とまあ・・・こんなところかな？」

うん・・・もう終わっちゃった。

「神様からもらっちゃったからなあ・・・H S Sモードと同等か
それ以上の頭脳・・・」

ちなみにこの思考、全部で約0・02秒である。会話文除く。

「・・・よし。外をぶらぶらしてこよう！！！」

普通は今後の対策とか練るんだろうけど・・・俺はそんなことは
しない！！！！なぜならめんどくさいからだ！！！！

ということでもとりあえずぶらぶらすることにした。

—————そして現在俺はかなえさんと面会していた。

え？なんでお前が面会できるのかって？それはちょっと前にさかのぼる。

俺はとりあえず外に出てなんとなくで行く方向を決めてぶらぶらしていた。するとある曲がりかどを曲がったところでなんと・・・！！

「・・・なにやってんのキンジ？」

「（ビクウ）・・・な、なんだ・・・ナオヤか」

キンジがストーカーをしていたんだ！！！！

「・・・キンジ、交番はこの先にあるから・・・俺も付いて行くから・・・な？」

「待て！？とりあえず話を聞け！！！！お前絶対勘違いしている！！！！そんな論すような口調で言うなあああああ！！！！」

「本当に俺が勘違いしているのか・・・？もし俺の予想があつてたらお前今度なんかおこれよ？」

「ああ・・・！！」

「じゃあ俺の予想な、ふむ・・・休日、曲がり角でこそそしているキンジ、その先にはアリア、・・・大方、お前がぶらぶらしているときにどつかでアリアでも見かけたんだろ。で、その後、だいぶ前にアリアに言われた『武偵なら自分で調べる』という言葉にでも影響されたかなんかでストーカーまがいの行動をとり、今に至る・・・とかじゃねえの？」

「な．．．なんでそこまでわかるんだ？お前心を読む力でもあるのか？」

「ふっふっふ．．．．．企業秘密だ」

というか実際は原作知識である。せこい？H A H A H A何を言っているんだ。知っているから知っているんだ。第一、すでに原作がかなり壊れている以上、どこまで．．．．．と言うかどのくらいキンジたちが原作と同じ心境なのか調べておきたかったしな！！

「っていうか当たってるんだな？よし！約束だぞ？おごれよ？ちゃんとおごれよ？」

「クッ．．．わかったよ。」

「————っていうかお前普通にストーカーじゃねえか。」

「．．．．．ハッ！！！！」

「今気づいたのかよ！！！！．．．．．とりあえず俺いい医者知ってるから、な？大丈夫だ．．．．．絶対助かる．．．．．クッ．．．．．」

「やめろ！そんな変なフラグを立てるんじゃないやねえ！！！！俺が手遅れになるじゃねえかああああああ！！！！！！！！！！」

いやね？キンジ君？きみ、もうすでに現在進行形で手遅れだからね？

「嘘だ！！！！！！」

「勝手に心を読まんでくれるかな？そしてそのひぐ○しネタは男が使うんじゃないツツツ！！！！」

はあ・・・なんでこんな残念な奴になってるんだろう？いや・・・
・まだ大丈夫だ！まだ教育ちやうきようすれば助かるはずだ！！！！

「っていうかアリアを見失っちゃまうぞ？」

「ああ！？しまった・・・！！！」

はあ・・・なんでこんな残念なやつ（ry

「しゃあないなあ・・・ついてこい案内してやる」

「へ？お前どこに行ったか知ってんの？」

「ああ・・・何の目的かも知ってるよ」

そういえば・・・今日がかなえさんとの面会日だったのか・・・

くアリア視点く

「ん？・・・」

おかしい・・・さっきまであたしの後をつけていたキンジの気配がなくなった・・・。

いくらEランクとはいえ、尾行くらいはできるはず。あたしが本気でキンジを撒く気だったのならいざ知らず・・・あたしはキンジを案内するくらいの気持ちで尾行を許していたはず。

「……まさか事件にでも巻き込まれたんじゃないか?」

「……最近かなり物騒になってきているためか、すぐ考えを事件に結び付けようとしてしまう……とはいえ本当にその可能性も捨てきれない。」

まだ武偵殺しもつかまってないし。

「はあ……仕方がないわねえ……ちよつと戻ろうかしら?」

あたしはちよつとだけ来た道に戻って行った。

〈ナオヤ視点〉

「さて……と、本命も来たみたいだし俺はここまででいいかな?」

俺は先に進んでいくうちに近づいてきたアリアの気配に気づき、道案内もここまでにすることにした。もともと、アリアたちといっしょにかなえさんと面会する気もなかったのだし。

「じゃあキンジ。俺はここまでだ。」

「は?」

「ほれ前を見らんか!」

そういつて前を指差した。キンジがそれにつられて前を向いた瞬間、俺はキンジの前から姿を消した。

「?前ってどういうことだ?っておい?ナオヤ?どこに行っただ
」」

お前の後ろにいるんだけどね!!そう、前からは消えたのだ!!前
からはね!

つまり極限まで気配を消して、後ろに回り込んだのだ!!皆はやっ
たことがないか?友達の後ろに回り込んでこっちを振り向こうとす
るたびにその動きに合わせて反対方向へ回り、常に相手からは見え
ない位置に動き続けるという遊び!!!それを俺は今、現在進行形
でかつ、俺の持てる力をすべて使ってやっているわけだ。ぷぷぷ・
・俺を見失って不安になってるキンジ(笑)・・・ぷくく・・
・。

っとそろそろアリアが来るな。俺は退散するとしま「・・・キンジ、
なにやってんの?」・・・やべ引くのが遅かった。

「いや・・・さっきまでナオヤがいたんだがなあ・・・突然消
えたんだ」

「何言って(シー・・・・!!!!!)・・・はあ・・・いい
わ」

俺はキンジにはばれないように、しかしアリアには気づいてもらえ
る位置からみなさんよく使う人差し指を立てて唇にあてる『黙って
て』のジェスチャーを全力で行う。

その甲斐あってかなんとか黙ってもらえたらしい。

「ん?どうしたんだアリア、そんなに後ろばかり見て」

そういつてキンジが後ろを振り向くとそれに合わせて俺が前へ移動する。

「・・・・・・・・あ・・・・・・・・よくわかったわ。」

「??:??:?」

ぶくく・・・・・・・・キンジ（爆）おもしれえ・・・・・・・・ぶぶぶ・・・・・・・・

「っていうか何やってんのよこんなところで？」

「へ!?:? いや!?:? 何となくぶらぶらしていてな！」

「・・・・・・・・あ・・・・・・・・どうせあたしの後をつけてきたんでしょ？」

「げ!?:?」

「・・・・・・・・いいわ、見せてあげるからついてきなさい。」

「・・・・・・・・わかった。」

「あとそのナオヤも」

「は??:?」

げ!?:? なぜにばらした!?:?!?!

「さっき言わなかったじゃん!?! なんで今になってばらすんだよ!?!」

「さっきのはきまぐれよ。．．．それにアンタにも知っておいてほしかったしね？」

「俺は知ってるぞ？」

「は？なにをよ」

「かなえさんとの面会だろ？」

「ッ！なんであんたが．．．！！．．．．．はあ．．．．．そうね．．．．．そうだったわね．．．．．ナオヤだもんね。」

「．．．．．なんかすつごく不愉快な納得のし方してないか？」

そして俺たちはかなえさんのいる刑務所へ向かった．．．．．。

そして着くや否や面会が始まり、原作通りかなえさんを乱暴に扱った警察官にアリアがキレて、かなえさんがなだめ、アリアは泣きながら走って行き、キンジはそれを追いかけた。

俺はと言えば．．．．．

「．．．．．そういえば俺、見たことのある能力が使えるんだったよな。遊○王のカードも効果があるのかな？『洗脳ブレインコントロール』発動。」

すると突然、目の前の警察官二人が止まった。

「え？．え？．え？」

かなえさんはびっくりしてうろたえてばかりである。・・・やべえ・・・かわいい。

「おお効いてる効いてる。・・・そのままやさしくこっちに連れてこい。」

警察官二人はさっきの扱いとは打って変わってやさしく丁寧にかなえさんを連れてきた。

「かなえさん・・・でいいですかね？」

「え？ええ・・・いいですけど・・・あなたは一体何を？」

「ちょっとだけ、この人たちを洗脳しただけです。」

「へ？え、ええ？・・・」

「それですね？あなた、イ・ウーのメンバーに冤罪着せられてますよね？」

「え？ええ・・・ってなんであなたがそのことを！？」

うーんやっぱ怪しまれるよなあ・・・そうだ！

「まあ俺ですから。」

「意味がわかりません！！」

あれ？おかしいな・・・

「アリアたちはいつもそれで納得しているんですけどねえ……」

「あ、ああ……あなたが……ナオヤさんですか……なるほど……そうですね。はい、納得しました」

「へ?……そうっすか」

「なんだかまたすっごく納得のいかない納得の仕方された気がする……俺がいいだしといて何だけど」

「……まあいいや、それであなたはどうしたいですか?」

「え? どう、とは?」

「だから、このまま刑が執行されているのか、それとも無実を証明したいのか。」

「……今は、まだ……」

「ですよねえ……」

大体この返答が来ることはわかっていた。なぜなら彼女は、アリアのためにも今、冤罪がなくなるのはよくないからだ。

アリアはSランク武偵で、勘も鋭く戦いのセンスも素晴らしい。だが、まだ弱いのだ。一人では戦えない。イ・ウーのメンバーとやり合うなんてできないのだ。

アリアは体内にヒイロカネがある。だからこそ、イ・ウーのメンバーに狙われやすい。今はまだ、シャーロックがいるから大丈夫だろうが、時間がたてばアイツはイ・ウーからいなくなるだろう。したら今度はアリアが狙われ放題になる。だからこそ、今アリアを鍛えなければいけないのだ。だからここで、イ・ウーを利用する。かなえさんに冤罪を着せたのはイ・ウーのメンバーだ。当然アリアはかなえさんの無実を証明するためにイ・ウーを捕まえようとするだろう。だが一人では厳しい。そこで面会する時に言うのだ。『パートナーを見つけれ』とな。パートナーが見つければ、アリアは今よりももっと力を引き出せるだろう。そしてそのパートナーがキンジなのだ。かなえさんは知らないだろうがイ・ウーにはカナがいる。カナはキンジの兄、詳しいことはここでは割愛しよう。そしてシャーロックのほうはかなえさんの考えも知っているだろう。だからカナを引きこんだ。すべてあの原作の通りに収めるためにな。

「・・・あなたはどこまで知っているのですか？」

突然の質問、考え事をしていた思考は現実に戻される。

「どこまで、ねえ・・・さあ？それはわかりません。けど、とてもたくさんを知っています。」

「そう・・・ですか。」

「はい。」

「アリアを・・・あのキンジと言う人といっしょに守ってはくれないませんか？」

「？なにをいってるんです？」

「・・・・・・？」

そんなこと・・・・・・

「言われなくても守るにきまつてるじゃないですか！」

「ッ！／＼／＼・・・・・・ハッ！！！！・・・わ、私は何を・・・
・相手は女の子いくらボーイッシュでも女の子・・・・・・ぶつぶつ
ぶつ・・・・・・」

ふむ・・・・・・最後のところが途中まで聞こえてしまった・・・・・・
・

「あの一・・・・・・」

「ひゃ、ひゃい！！あう・・・・・・な、なんですか？」

ブハアアアアアアアアア！？

ヤバイ・・・・・・これはヤバイ・・・・・・可愛い・・・・・・マジで可愛い・・・・・・
は、鼻から・・・・・・愛が・・・・・・溢れる・・・・・・

「だ、だいじょうぶですか？」

「は、はい・・・・・・なんとか。グフ・・・・・・そ、それですね？」

「はい」

「俺、男です。」

「・・・・・・・・はい？」

「だから、女の子ではなく男の子です。」

「One more please?」

「なぜ英語なのですか？しかもOne more time please?のほうがいいと思いますよ？そして俺は男です。」

「・・・・・・・・そ」

「そ？」

「そうだったんですか！？よかった！わたしそっち系の趣味に芽生えたのかと思ったじゃないですか・・・・・・・・もう！！でもよかった！わたしノーマル！！！」

「????? なんの話です？」

「い、いえ！なんでもないんです」

「・・・・・・・・まあいつか。※主人公は鈍感と呼ばれる部類に所属しています。」

「それじゃ、俺はそろそろ」

「わかりました」

「最初の位置に最初のポーズで戻れ。」

そういうと警察官二人がやさしくかなえさんを連れて、俺が洗脳するまでの位置に、元の態勢で戻った。

「それでは、あ、そうだ。時間はさっき止めてあったので怪しまれることはないですよ？」

「え？・・・そう、ですか」

そう、実は最初にテイ○ズのミ○トの技である『タイムストップ』を使っておいたので時間については問題ないのだ。しかもデメリツトの対象を選べないというのもなくしたのでかなえさんにだけ、効かないようにしていたのだ！！

「それでは戻しますね。ではまた。『オフ』」

俺がそういうとかなえさんはまた引きずられていった。

さっきのオフと言うのは俺が使っていた能力をすべて無効化、つまりそのままのとおりのオフにしているわけだ。

ただしこれはオフにする効果が選べない。といってもまあ選んでオフにしたけりゃそういう風に操つりゃいいのだがめんどくさいときに有効である。・・・やべえ俺最強（笑）。

そして時間も洗脳もオフにし、俺は帰って行くのだった。

外伝くテイルズオブファンタジアく(前書き)

いやあゝ．．．なんとなく書きたくなってしまうittyやっ
てしま

それでは初！外伝、どうぞく

外伝くテイルズオブファンタジアく

くナオヤ視点く

「ふぁく．．．ん？．．．．．あれ？」

俺が起きたのは知らない場所だった。

「．．．．．あれ？俺．．．確か昨日．．．かなえさんに会って、家に帰ってそれで．．．」

寝たはず、という言葉は続かなかった。なぜなら．．．

「うわあああああああああ！！！！！」

ドスンッ！！

「ぐえっ．．．．．」

ペシヨツ．．．

上から何か？が降ってきて俺は潰されてしまったからだ．．．

「あいたたたた．．．．．もう．．．また飛ばされちゃった．．．．．」

「．．．．．あの」

「へ？．．．．．あ、ご、ごめん！！！」

「え？あ、俺は神野ナオヤといいます。」

「ジンノ・ナオヤ？変わった名前ね。」

「あ、こっちだとナオヤ神野になるんですかね？多分。」

「ってことはナオヤって呼べばいいかしら？」

「はい。・・・それで？なぜに空から？」

「あー・・・えっとねえ・・・。」

そして俺はあらかたの事情を聴いたのだが・・・

「つまりそのダオスに会いたいけど会う前に飛ばされてしまうと。」

「うん。」

「ふむ・・・。」

といって悩むふりはしているけど正直、原作をプレイしたこともあるし、ほとんど知っている。

「・・・じゃあ俺も一緒に旅してもいいですか？」

「え？・・・うーん。」

「だめ・・・ですかね？」

「えっとね、ずっとは無理かなー・・・あたしはダオスのところに

行くわけだし。かなり危ないからね。」

「あ、それなら大丈夫です。俺、相当強いですから。」

「へー……」

「む、信じてないでしょ。」

「まあ……そりゃねえ。その見た目じゃ……ねえ？」

ですよねー……思いつきり女っぽい見た目に会ったばかりで信じるに値する情報も足りず、しかもここはそう強い魔物もでないからどのくらいの強さかもわからない……うーん逆の立場だったら俺も信じねえだろうなあ……

「んー……じゃあ、とりあえず様子見ってことでどうですか？」

「……いいけどなんでそんなにあたしとの旅にこだわるの？」

「えー……それはですねえ……あまり人にはお話しできない諸事情が……」

「ふーん……まあいつか。わかったわ。じゃあこれからよろしくね、ナオヤ？」

「はい、ロンドリーネさん」

「あたしのことはロディでいいよ。あと敬語も。」

「わかり……わかったよ、じゃあ改めてよろしく。ロディ。」

「はいはい♪」

こうして俺は帰り道を探すべく、ロディと旅を共にすることにしたのだった。

実際問題、俺一人では通貨もわからず、土地勘もない（ゲームを眺めるのと実際に中で生活するのはかなり違うのだから）。そこでラツキーなことにロディに出会った。

「うん！ラツキーラツキー♪」

「ん？何が？」

「いや、こっちの話だよ」

うん、ロディにかなり怪しまれてる。

「ねえロディ。」

「ん？なに？」

「ここからどこに行くの？ていうかここどこ？」

「え？ナオヤは場所知っててここにいたんじゃないの？」

「あーそれがね、なんかロディと似た状況。」

「え？」

「いろいろあって俺も飛ばされたんだ。しかも全然知らないところだよ？ここ。」

「ふーん・・・じゃあこの辺でいちばん近い町にでも行く？」

「・・・そうする。」

「多分ここはあたしの知り合いが住んでる町の近くの森じゃないかなあと思うのよ。」

「へえ・・・そりゃまた運がいいな。」

「そうね。とりあえずそこで宿を確保して、あなたの實力でも見せてもらおうかしら。」

「へいへい。」

そういうと俺たちは森の出口？へ向かって歩いて行った。

くクレス視点く

「チェスター！！！！そっちに行った！！！」

「任せろ！！！！食らえ！！”紅蓮”！！！」

チェスターが特技の紅蓮を放ち、近くに迫っていた、チャイルドボアの一匹を仕留めた。

「クレス！！そっちにでかいのが行ったぞ！！！！」

「はああ!!!!” 魔神剣”!!!!」

僕のほうに向かってきた、チャイルドボアの親と思われるボアに特技の魔神剣を放ち、一気に突っ込む。

「はあ!!!!てや!!!!せい!!!!” 飛燕連脚”!!!!」

そのまま三連撃をたたきこみ、とどめの飛燕連脚。

ドスンッ……

ボアをなんとか仕留めることができた。

「ふう……大物だな。」

「そうだな。これだけあれば、きっとみんな喜ぶ。」

「ああ、それじゃそろそろ——」

『カーンカーンカーン……』

「ッ!!!!これは!!!!」

「俺たちの村のほうからだ……!!!!」

「急いで戻ろう!!!!」

「ああ!!!!……無事でいてくれよ……!!!!アミィ……
!!!!」

（ナオヤ視点）

『カーンカーンカーンカーン・・・』

「ッ！！！！これは！！！！」

「・・・村のほうで何かあったみたいだね・・・どうする？」

この鐘の音は・・・まさか！！！！

「ちょっと・・・？」

「ロディ・・・今、何年かわかるか？」

「え？え、えっと・・・多分アセリア暦4304年だとおもうよ？」

「・・・しまった・・・。」

この年代にクレスの村の人たちはすべて殺されるんだった・・・！！！！

「させるか・・・！！！！！！」

「え？何？」

「ロディ・・・俺は行く。どうする？ついてくるとかなり危ないぞ？」

「・・・行くよ。クレス達の故郷だもん。助けなきゃ。」

「わかった。」

「じゃあ急いで「いや、待って。」どうしたの？」

「ロディ、手をつないでくれ。」

「へ？何を言ってるの？」

「いいから早く！！時間がない！！！！」

「わ、わかった」

俺の能力のなかにある一度見たことがある力を使えるという能力。
これなら・・・！！！！

「いくよ。『テレポート』————」

「え？————」

ヒュン！！！！

その音とともに俺たちはその場から消えた。

くクレス視点く

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

僕たちはひたすらに森のなかを走っていた。

さっきの鐘は何か非常事態が村に起きた時になるように準備していたはず、つまり今、村で何かたいへんなことが起こってる!!!!

(無事でいて……父さん……母さん……!!!!)

「……はあ……アミィ……無事でいてくれ……!!」

アミィっていうのはチェスターの唯一の肉親である妹さんで、チェスターにもよくなついている。だからこそ、本当に無事であってほしい……!!!!

「はあ……はあ……見えてき……ッ!!!!」

そこで見たのは……

「なんだ……こりゃ……ツツツ!!!!アミィ!!!!」

村が……燃えていた。

チェスターは一目散に駆け出した。

「父さん!!!!母さん!!!!」

そういう僕も父さんと母さんが心配で仕方なくて、走り出していた。

そして村の近くまで行くと

「誰かまだいる!!!」

「行くぞ!!! クレス!!!」

急いで村のなかに入ると道場のところにたくさんの人が集まっていた。それを取り囲むようにさらにたくさん黒い鎧を着た騎士のような人たちがいた。そして武器を構えてものすごい形相でその黒い騎士たちを見据える父さんと、その隣にはこの村では見かけない格好の二人の剣士がいた。

（ナオヤ視点）

ヒュン!!

「着いたか!!!」

「え? な、何今の・・・!?!」

「後で説明するから・・・今は一刻も早く・・・!!!!」

俺達は村の中、道場の前に出ていた。

『クッ・・・卑怯な・・・』

『クックック・・・これならお前も手が出せないだろう? なあ、ミゲール・・・。』

『クソッ・・・マリアを放せ!!!!』

『クツクツク……無理だな……行け!!!!!!』

やばい．．．！！！！もうクレスの母さんが人質に取られているらしい！！このままだと抵抗出来ずに殺される．．．！！！！

「さあああああせえええええるうううううかあああああああ
あああああああああ! ! ! ! !」

俺は全力で叫びながら道場のなかに突撃した。

「誰だ!？」

「くそが ああああ ああああ ああああ ああああ ああああ ああああ ああああ !!!!!!!!!!!!!!!」

俺は即座に王の財宝を開き、
ゲート・オブ・バビロン
 中からエクスカリバーを取り出す。

「チツ……邪魔をするなあああ！」

敵が一人飛びかかってくるが……遅い。

相手が剣を振り上げた時にはすでに俺はエクスカリバーを振りぬいており、切られたほうは血しぶきを上げ絶命する。

「なっ……!! くッ引けえ!! 村の人間を人質にしろ!!」

「させるか！！」 オーバーリミッツ！！！！」

やはり見たことがあるものは使えるらしく、無事にオーバリーミックスもできた。

その瞬間、騎士の全員が切りかかってくるが・・・無駄。

「閃け！鮮烈なる刃！！」

俺は一人に切りかかり、振りぬいた瞬間その場から消え、また別のところから現れる。

「無辺の闇を鋭く切り裂き！！仇為すものを微塵に砕く！！」

また消え、他のやつを切り裂き、さらに別のものを切り裂く。

「決まったあ！！！！漸毅狼影陣！！！！」

そのセリフと共にその場にいた騎士をすべて切り裂く。

ちなみにこれはテイルズオブヴェスペリアの主人公の技だ。

「・・・・・・・・な、何が起こった・・・・・・・・？」

「大丈夫ですか！！！！」

「あ、ああ・・・・・・・・なんとか。助かった、礼を言わせてもらう。」

「いえ、それよりもさっきのがボスですか？」

「ああ・・・・・・・・しまった！！奴め・・・・・・・・村の人を人質にするつもりか・・・・・・・・！！！！」

「ッ！！クソが・・・・・・・・！！」

どうする・・・・・・・・・・そうだ!! とあるシリーズの超能力なら・・・!!!!

「人質は何とかできます。それよりも避難を・・・!!」

「いや、マリアは避難させるが私は戦う!! これでも剣の腕には覚えがある!!」

うーん・・・原作のミゲールさん確かに強いし・・・心強いな!

「わかりました。それではまずそちらの方を奥に連れて行っておいてください。俺は外へ向かいます。」

「わかった・・・! 頼んだぞ・・・旅の方よ!!」

そう言ってミゲールさんはマリアさんを連れて奥へ行った。

「クソが・・・覚悟しろよ・・・!!!!」

俺はとてつもない怒りを覚えながら急いで外へと向かった・・・。

外伝くテイルズオブファンタジアく(後書き)

気が向いたら・・・というか結構な確率で続きます。

外伝？〜テイルズオブファンタジア〜(前書き)

前回の続きです。
では、どうぞ〜

外伝？〜テイルズオブファンタジア〜

〜マルス・ウルドール視点〜

「クソッ・・・なんなんだやつは！！！」

突然、私たちの前に現れ、あと少しで仕留めることができたミゲールを助け、人間とは思えない速度で私が連れてきていた半数の騎士をすべて倒した。

「あと少しだったのに・・・！！！」

私は急いで道場を出て残りの騎士の元へ向かった。こちらへ来る前に先に建物を破壊させ、村人を一か所へ集めるように指示していたのだ。

「おい！村人はどこだ！？」

「こちらに集めています！」

「早く案内しろ！」

「はっ！」

騎士のひとりに指示し、急いで村人を集めていた場所へ案内させる。そして広場のようなところへ着いた。

そこには数十人の村人が集まっていた。

「これで全員か？」

「はっ！村のなかにいるのはこれだけと思われます！」

「わかった。持ち場へ戻れ。」

「はっ！」

騎士は駆け足で元来た場所へ戻って行った。

「おい！貴様ら！村の人間はこれだけか？」

『・・・・・・・・・・』

「答えろ！！！」

「・・・・・・・・こ、これだけだ」

「他はアンタが向かったところにいるはずのミゲールさんとマリアさんだけだ！！！」

「・・・・・・・・そうか。」

そういうと私はおもむろに近くにいた子供を一人捕まえ、首筋に剣を当てた。

「・・・今のは聞かなかったことにしてやる。村人はここにいるやつだけか？」

そんなはずはないのだ。さっき戦ったやつがいるはずなのだから。

『・・・・・・・・・・』

「ここに黒髪の剣士はいないかと聞いてる！！」

『・・・・・・・・・・は？』

「は？」

「・・・・・・・・いや、黒髪の剣士はいないが？」

「そ、そんなはずはないだろう！黒髪の凄腕女剣士がいるはずだ！」

「いや・・・・・・・・え？でも・・・・・・・・やっぱいないなあ・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・どういうことだ？今の反応は明らかに本当に知らないやつ
の反応だ。」

「ならやつはどこから現れた？私の騎士団の監視の目をくぐってあの
道場の中にまで到達できるようなやつがそうそういるはずがないの
だが？」

「ならやつは別の村から来たということか？それとも旅のものか？い
や、このあたりに他の村はない。あったとしても遠すぎてあんなに
早くこれるはずがない。」

「旅人だとしてもあんなにも強ければ噂になるはずだ。」

「・・・・・・・・・・どういうことだ？」

私は思いもしなかった。空間も時間も超えてこの時代のこの近くに
来る輩がいるなどとは。

（ナオヤ視点）

「ロディ！！」

「ナオヤ！？大丈夫だったの！？」

俺は道場の入り口で突入の機会をうかがっていたロディに声をかけた。

「ああ！！さっきそこから黒いよろいのやつが出なかったか？」

「うん。さっき一人出たよ？追って後ろから襲おうかとおもったけど、村の人が人質になってるみたいで手が出せないんだ・・・。」

「ちっ・・・やっぱりか。ロディは中にミゲールさんとマリアさんがいるから守ってて！そしてここから離れないで！！」

「わかった。」

「俺はこのまま人質を救出してくる。その時にこっちに来るときに使ったアレをやって皆をここに飛ばすから事情を話して置いて！！」

「わかった。・・・気をつけて。」

「わぁってる！」

俺はそこまで用事を伝えたと全力で村のなかを走りまわって人を探し始めた。何度か黒騎士に見つかったけど、声を上げられる前に気絶させた。

ちなみにさつき相手を斬ったけど誰も殺してないよ？

そしてある広場に出るとそこには・・・

「・・・・・・・・・・どういことだ？」

小さな女の子を人質に取ったまんま、首をかしげているマルス・ウルドールがいた。

「・・・・・・・・・・なにやってんだ？」

わざわざ人質を取って首を傾げ続けるマルス。

だが突如、マルスは剣を振り上げた。どうやら、他にもいろいろと聞きたかったが嘘をついている・・・・・・と思ったらしい。

「・・・・・・・・・・」

俺は無言で鋼鉄破り（メタルイーター）を”王の財宝”ゲート・オブ・バビロンのなかから取り出し、マルスの持っている剣に照準を合わせる。

マルスが剣を振り下ろそうとした瞬間、10Mあるかないかぐらいの近距離から撃ちだされた弾丸が正確にマルスの剣を弾き飛ばし、マルスは衝撃でしびれた手をさすっている。

そしてその瞬間、小さな女の子はマルスの股間を落ちていた石で殴

った。普通なら鎧を付けているので問題ないのだがどうやら女の子は股を鎧がカバーしていない下から殴ったらしい。

マルスが股間を抑えて悶えている。かなりのクリンヒットらしい。俺も無意識のうちに内股になっていた……。

そしてマルスが立ち直り、女の子に掴みかかった。

俺はそのタイミングで座標移動ムーブポイントを使い、村人全員を道場の前にテレポートさせた。

そして……

「な、何が起こった!？」

「はっはっは……いい様だな!!」

「お、お前はさっきの!!」

俺は軽く罵倒しながらマルスの前に登場する。

「き、貴様……!!何をした!!」

「教える訳ねえじゃん?そいじゃな!」

俺は元来た道を少し戻り、隠れて転移、道場の前に戻った。

どうやらちゃんと全員移動できたらしく、さっきと変り映えのない人たちがそこでロディの説明を受けていた。

!?
「
「
「
「
「
「
「
「
「

皆哑然としていた。

外伝？〜テイルズオブファンタジア〜（後書き）

・・・あれ？なんかおかしくなった。

第16話〈転生者〉（前書き）

初めて？少し？卑猥な表現が出てしまいました。
こういう表現が好きではない方はすいません。

では久しぶりの本編、第16話、どうぞ

第16話〈転生者〉

「???視点」

「・・・・ここは?」

俺が目を覚ますとそこは見たことのない天井だった。

「・・・・生きているのか?」

ちょうど数分前に俺は車にひかれて死んだはずなのだ。

「・・・・夢か?」

だとすると今のこの状況は何なのか。死んだのが夢だとするとここは一体どこなのだ。

それともこれも夢なのか?

「いや、違うぜ? ケケケ・・・・」

考えているといかにも悪魔ですとでも言いたげな笑い方をする男が出てきた。

「ここは生と死の狭間・・・・つまりアンタは一度死んでいるわけだ。」

・・・・ってことは?

「テンプレのごとく俺がミスして死んだとかそういうのじゃねえぜ」

ええー・・・

「俺が故意にやったんだ」

「何してくれる……!!!!!!……? ? ? ? ?」

まだ！ミスしたとかならまだ！！！！妥協できる！！！！でも

「故意にやったとかこの野郎！！！！」

「ケケケケ……細かいことに気にすんなよ」

「氣にするわ!!!! てか細かくねエよ!!!!」

俺はまだやりたいことがたくさんあったんだよ
おとおお おとおお おとおお おとおお

おとおお!!!

「たとえば？」

「まだ小説やアニメを最後まで見てない！！ゲームをクリアしてない！！！！付き合ったこともない！！！！×××したこともない！！！！せめて！！！！せめて俺の息子を一度でいいから使ってみたかったッ
ッッッッ！！！！！！」

俺はまだ24だ!!!童貞なんだ!!!せめて30まで生きて魔法使いになってみたかった!!!

「ふーん……じゃあ転生してみる？」

「ふーんて……ってえ？」

「だから転生してみる？」

WHAT???

「転生したくないの？」

「するーーーーー!!!!!!」

「はいはいじゃあどこがいいの？」

「緋弾のアリア!!!!!!」

「ほいほい、能力もいいよ？チートがいいんでしょ？」

さすが!!!よくわかってらっしゃる!!!

「しんた「あ、ごめん身体能力とかは少し上げるとかが限界なんだから。特殊能力もあんまりなのは難しいかな。」……先に言ってくれ」

となると……そうだ!!!!俺はまだこの息子を使ってないんだ!!!!!!

「精力強化!!!!!!」

「ぶっ!!!!!!」

あ、悪魔が吹いた。

「な、なんてことを願うんだい……まあいいか」

なんかよかったらしい

「じゃあ催眠術!」

「うーん……あんまり強いのは期待しないでね？」

さすがにきついのか……

「じゃあそれに加えて俺の意思で相手を欲情させる能力!!」

「……まあいいけどさ。できるのは触っている相手のみね。」

「そして快樂の虜にする能力!!」

「……もう最低だね」

何とでもいえ!俺はアリアやレキたんとむふふなことをするんだッ
ツッ!!!

「……もういつそ悪魔にでもなってみるかい?」

「いろいろとめんどくさそうなんでいいです。」

「そうかい。で、他にはいいのかい?」

「オツケーさ!……これでアリアたんとレキたんを……む
ふ……むふふふふ……」

「……ノクターンに乗せたほうがいいかな?」

「ん?なんかいったか?」

「いや。それじゃ送るよ。」

「おkww」

「それ」

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

「ここはテンプレ通りなんかい
いいいいいいいいいいい！
！！」

穴から落ちました。

[illegible]

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

目が覚めると白い天井だった。

「う・ ・ ・ ほん？」

「お、目が覚めた？」

「……は？」

「病院さ。あんたが道端に倒れてたから運んできたんだ。」

「^?」

話を聞く限りどうやら人気の少ない道に俺は倒れていたらしい。そこを偶然通りかかったこの人が助けてくれたとのこと。

「すいません、助かりました。」

「いいって、気にしなさんな！　ところでなんであんなところに倒れてたんだい？」

「それは・・・」

俺は少し氣の毒に感じたが本当のことは話さず、適当な嘘をでっちあげておいた。

「なるほど……で？これから行くあてはあるの？」

「ええ、まあ一応。」

「そう。」

他の人のところで厄介になるとあまり自由が利かなくなりそうだからなあ……

「わかつたわ。それじゃ、あたしはこれで帰るわね。あ、お金はもう払ってあるから気にしないで。」

「すいません、ではお言葉に甘えさせていただきます。」

そして特に体に異常が見られなかった俺はそのまま退院し、武偵校へと向かった。

（ぐへへ………礼儀正しくするのは社会の常識）

そう、礼儀正しく見えたがこの男、実は話している間じゅうずっと卑猥なことばかり考えていたのである。

ようはさっきのはうわべだけで感謝など一切していなかったのだ。

（ぐへへ・・・アリアたんレキたんまってねー・・・すぐに俺が墮としてあげるからねー・・・）

俺は結構あっさり武偵校を見つけるとまず、

「かわいい女の子を探そう！」

（そして本当に性奴隷にできるのか試さないと・・・でへへへ・・・）

屑な思考を始めた。

そして目の前には早速かわいい女の子が！！！！

（結構かわいい子見つけ・・・）

原作では見たことがない子なのできつとモブキャラだろう。

（早速一人目だ・・・えへへ・・・）

「あの一・・・ちょっといいかな？」

俺はその女の子に話しかけた。

「はい。なんですか？」

「ここらへんでちょっとコンビニ探してるんだけど・・・迷っちゃって。」

「ああ、それでしたら・・・」

彼女と眼が合う、その瞬間催眠術をかける。

「あ．．．．う．．．」

「ちょっとついてきてくれる？」

「．．．．はい．．．．」

どうやらうまくいったらしい。

（げへへ．．．このままおいしくいただくか。どうせ小説のなかのキャラだし、モブだし、一人や二人どうでもいいよなあ）

俺は裏路地に行き、調教を始めることにした。

くナオヤ視点く

「ん．．．．あれ？ここは．．．」

俺は確かなえさんとの面会の後、家に戻って飯食って寝たはず。寝ているということは夢か．．．．もしくは

「ひさしぶりじゃのう．．．」

「やっぱりか。久しぶりですね。神様。」

やっぱり神様と会う時の特別な空間だった。

「でも、たしかこっちに干渉できないんじゃない？」

「いや、それは何とか直したんじゃが・・・ちよつとな」

「・・・なにかあったんですか？」

「いままでの干渉できなかった間に、どうやら悪魔の一匹がこっちに干渉したらしくての。」

え？最高神と呼ばれる人が干渉できないところに悪魔が干渉できちゃうの？

「いや、今回は特別な例でな。まあ詳しいことは話せんのじゃが・・・。」

「いえ、いいです。それで？なにがあったんです？」

「それがの・・・」

神様の話によると、神様陣営が干渉できなくなっている間に悪魔が干渉してしまい、別世界で人を一人殺してこちらに連れてきたらしい。

しかも・・・

「そいつはの・・・特に犯罪は犯してないんじゃが・・・心と考え方が腐っておっての・・・最悪、人を人とも考えないやり方を平気でやるようなやつなんじゃ。」

「でも、まだ手を出してないんじゃ？」

「元の世界ではまだ良心があつたようじゃがの・・・こっちに来た時に、小説だからいいや、とかいう作りものとしてとらえる考え方になってしまつての。」

・・・

「しかももらった能力は・・・精力強化と催淫効果、催眠術じゃ・・・」

「!!!!!!」

「どうやらそいつはこの世界に生きているものを性奴隷にでもするつもりらしい。しかも二次元だから、作りものだからと思つているからの・・・最悪なんじゃよ」

「・・・それで？」

「そいつが何かしたら捕まえるか・・・最悪殺してもらいたい。」

「・・・」

「大丈夫じゃ・・・殺したのであればそいつがこっちに来たことからなかったことにする。」

「・・・」

「・・・頼めるか？」

「・・・ああ。アリアたちに手を出したら・・・ただじゃおかねえ・・・!!!!!!」

「そうか．．．捕まえた場合は心のなかでわしに呼び掛けてくれ。対処する。」

「わかった。」

「．．．気をつけるんじゃないぞ．．．」

「ああ．．．」

そこで俺の意識は途絶えた．．．。

くズ野郎視点く

（本当にうまくいった．．．．．）

今俺の目の前には生まれたままの姿で部屋に突っ伏しているかわいい女の子が一人。

目はうつろでかなり興奮しているようだ。

俺は催眠術をかけた後、路地裏に連れ込み、強姦。その後、何かに取りつかれたように俺を求め始め、さすがに不味いのでこのこの部屋に来たというわけだ。

「もっとお．．．もっとほしいよお．．．」

（ぐへへ．．．本当に人形みたいだな。）

今日はここに泊まり、一晩中しっかりと調教してやった。

（次は．．．．．アリアさんとレキたんを．．．あんなふうに俺のものに．．．．．げへへ）

朝になり卑猥な妄想にふける。

そして女の子に朝食を作らせ、それをたべて外に出る。

すると．．．．．アリアさんと遭遇した！！！！

（何たるキセキ．．．このまま調教するか．．．げへへ）

「あのー．．．．．すいません、ちょっといいですか？」

昨日と同じ手口で話しかける。

「え？あ、はい。何かご用ですか？」

（こっちを見た．．．いまだ）

「実はですね．．．」

そのタイミングで催眠術を使う。

「．．．？．．．．．う．．．．．え．．．．．？」

かかった。

「ちょっとついてきてもらっていいかな？」

「はいい．．．．」

そうとうとアリアたんがうつろな目で付いてくる．．．．やばい．．．興奮する！！！！

俺はアリアたんをそのまま家に案内しようとしていた。

くナオヤ視点く

「ん．．．．朝か．．．．」

俺は起きてすぐに支度をすませ、外に出る。まだ7時にもなっていないので軽く見周りのようなものだ。

「他の転生者ねえ．．．．」

俺のように基本的に原作を見守る気はないんだろうなあ．．．あんな能力もらってるわけだし。

「さて．．．．」

俺は軽くランニングをしながら住宅街を走っていた。そして約40分後、アリアを見つけた。正確には．．．どこかうつろな目をして見慣れない男の後をついていくアリアを。

「．．．．まさか！！」

俺はすぐに気付いた。あれが転生してきた男だと。そしてアリアは催眠術をかけられている。かなりマズイ．．．！！！！

俺はあとをつけた。そして男は家についたのかカギを取り出し、ドアを開けてアリアを連れ込んだ。

「くそ・・・!!!! やっぱりか!!!!」

俺はすぐさまその男に飛びかかった。

「まて!!!! アリアをどうするつもりだ!!!!」

↳転生したクズ野郎視点↳

俺はアリアたんを家の前に連れてきて、鍵を開け、中に入れようと思っていた。その時、

「まて!!!! アリアをどうするつもりだ!!!!」

邪魔ものが現れた。俺はすぐさま飛びのき、相手を確認する。

「・・・知らない顔だな。モブか？」

いや、モブにしてはなんだか親しい呼び方だったな。

「アリア!! こっちに!!!!」

その男が呼びかけるが反応がない

「無駄だ。聞こえやしない。」

「やっぱりそうか・・・一応聞く。アリアをどうするつもりだ？」

「調教して俺の性奴隷にするにきまっているだろう？」

「……ッ!!!! てめえ……」

「……どうやらお前も転生者のようだな。なんで好きなようにこいつらを使わない？」

「……使う？」

「お前ほどの力があれば犯すも奴隷にするも簡単だろう？」

「……ギリッ」

「けっ……偽善者かよ。こんな作り物の命。いくらでも壊せばいいじゃねえか。どうせ二次元なんだしよう。」

「……屑が……」

「あん？」

「屑がつつてんだよ。作り物の命？何言ってやがる……こいつらは正真正銘生きてんぞ……!!!!!! 今を必死に生きてんぞ!!!!!! 作り物なんかじゃねえ!!!!!! 確かに小説で作られた物語かもしれないねえ……けどなあ……こいつらはしっかり生きてんだよ!!!!!! 自分でちゃんと考えて……必死に生きてんだよ!!!!!! 作り物なんかじゃねえ!!!!!! こいつらは本物だ!!!!!!」

「はっ……さすが偽善者。そういう言葉を並べるだけならいちよまえか……」

俺はそのタイミングで催眠術をかける。

「・・・?」

「気かねえよ。」

「・・・なに・・・!?」

ちっ・・・いくら女顔とはいえ男をやりたくはねえな・・・

「しかたねえ・・・死ね」

俺は一瞬で駆け出す。どうやらやつもチートと呼べる能力をもらっているようだがかんげえねえ・・・俺の世界ではこいつらがチートと呼ぶ部類の強さは普通だからな。

「・・・」

俺は連続でパンチや蹴りを繰り出す・・・

男は無言で、避ける避ける避ける・・・

「ほう・・・やるじゃねえか。」

「・・・俺を本気で怒らせたことを後悔しな・・・!!!!」

そういうと男は突然、NARUTOが使う印のようなものを両手で結んだ。

くナオヤ視点く

・・・今回は本当に頭に来了。

人を人とも思わない行動、考え方。

ゆるせない・・・・・・・・！！！！

「ほう・・・・・・・・やるじゃねえか。」

この男、どうやらもともと身体能力がチート並みのようだ・・・・・・・・

なら・・・・・・・・！！！！

「・・・・・・・・俺を本気で怒らせたことを後悔しな・・・・・・・・！！！！」

俺はアニメNARUTOで使う忍術、多重影分身の術を使った。

するとあたり一面に俺俺俺・・・・・・・・

こりやまずいな・・・

”封絶”」

と、突然周りの時間が止まった。

「うまくいったか・・・」

そして俺は・・・・・・・・

「多重影分身の術。」

分身した状態でさらに分身した。

原作のほうではやっているところは知らないがどうやら俺はできるらしい。

しかもMPやチャクラ、魔力と言ったエネルギー的なものを俺は無尽蔵に生み出せるらしく、限界がない。

先に1000人ほど呼び出していた分身がさらに分身。つまり……
・1000×1000〓……………1000000人である。

そして俺が編み出したオリジナルの技。

「フルショット・パーティー」

これはアサルトライフルや拳銃、サブマシンガンや狙撃銃をすべて呼び出し（ひと種類につき100丁はある）、一斉射撃を行うというものである。そしてそれは一人当たりの人数で、今は……100000人はいる。つまり……

「……………うそだろ？」

1000000×1000×約50〓……………5000000000丁
の銃がすべて一人に向いているのだ。

しかもご丁寧にすべてかさなる位置には配置されていない。

そして放たれる弾の合計は……………めんどくさいからもういいや。

「……アリアたちを作りもの扱いした罪……払え。」

そして一斉射撃が始まる。

「あ、ちなみに非殺傷設定って知ってる？ 死なないけど痛みだけがある奴。この銃ぜーんぶ・・・非殺傷だからね？ 楽しんでね♪」

「ぎやあああああああああああああああああああああああああああああああ」

うわ．．．俺が考えといてなんだけどこの技．．．鬼畜すぎるわ．．．もう弾が多すぎてあの男がどこにいるか全然わかんない♪黒いカーテンだね♪あはは

「 やめ」

俺がそう声をかけると真ん中で男が倒れていた。

俺は王の財宝のなかに手を突っ込み、鋼鉄破りを引っ張りだした。

「最後にしんで償え。」

俺は引き金を引こうと……して引けなかった。

「やっぱり・・・殺したくはねえなあ・・・」

俺は銃を下ろし、神様に呼び掛ける。

（おい、捕まえたよ）

『おー、よくやってくれた』

そう聞こえた瞬間、男は消え去った。

『これでやつは地獄に落ちたぞ。・・・それとすでにひとり被害にあっておったが、なかったことにした。』

(そうか・・・ありがとう)

『気にするな。じゃが・・・今回は地獄に落としたせいでもなかったことにはできんぞ?』

(いいさ・・・そんなに時間がたったわけでもない。)

『そうか。ではわしは戻る』

(はいはい・・・)

そこで神様の気配は消え去った。

「さて・・・」

俺は分身をすべて消し、封絶を解く。

「アリア・・・おーい。」

「ん・・・? あれ? あたしなんでこんなところに?」

「いや、知らんけど・・・遅刻するぞ?」

「へ？・・・ああ！！じゃ、あたしは先に行くわね？」

そういうとアリアは走り去って行った。

「・・・俺も行きますか。」

こうして日常は無事に守られていく。

第17話くルパンルパーン……あれ？ザ・サードだっけ？く（前書き）

更新遅れました……。すいません。試験があるので時間がとれませんでした。

というか風邪ひいた……。はい、どうでもいいですね。

では17話、どうぞく

第17話　ルパンルパン・・・あれ？ザ・サードだっけ？

「???視点」

「お宝はいただいていくぜ！じゃあな」とつつあくん！

「くそう！！まてえ！！！」

「次元！たのむぜえ！」

「任せろ！」

次元が帽子を押さえて車の窓から上半身を出し、後ろから追いかけてくる車のタイヤを狙って発砲する。

「のわああああ！おのれ次元！逮捕してやる！」

「俺だけかよ！」

するとさらに周りには大量のトラックが囲んできた。

「くう・・・この数は無理だ！」

「五エ門！」

「招致！」

五エ門が車から飛び出し（走行中なんだけどね）トラックに切りかかる。

「てえええええやあああああああああ！……！！！！！！」

一瞬でトラックはばらばらになり、後ろへと転がって行った。

「また……つまらぬ物を切ってしまった。」

「いいから戻ってこーい！」

そして数分したころには追いかけてくるのは銭型のとつつあんの運転する車だけになった。

[illegible]

「しつこいぜ！ とつつあん！」

その時、

「お、おいルパン!!!前・・・前見ろ!!!」

「ん・・？なんだあ？」

数十メートル先の地面が光っていた。

「なんか……やばくね？」

「ああ……俺もそう思う。」

今走っているのはトンネルで、しかも一方通行で道が狭く、車が一
台通るのがぎりぎりなんというトンネル。

その一本の道を端から端まで埋め尽くすように丸く光る地面。

「しかたねえ!!!!このまま突っ込むぜ!」

「っておい!!」

そしてその光る地面の上を通ろうとした時、

「……ってあれ?なんで止まってらっしゃるの?」

車が光っている部分の真上で停止したのだ。

ブレーキを踏んだ訳でもないし、そもそもブレーキを踏んだ瞬間完全に停止するようにはなっていない。

「……どゆこと?」

「……さあ?」

その瞬間、突然の浮遊感。

さっきまで光っていた地面がなくなっていた。つまり……

「……落とし穴?」

「……マジで?」

「「あああああああああ!?!?!?!」」

ちなみに五エ門は無言で落ちて行った。

くナオヤ視点く

今日の授業も終わり、すでに放課後。

「さあてと……なにをするかなあ……」

暇なのだ。こっちに来てから結構暇なのだ。面倒事が何もないのはいいんだが……

「なにもないのもなんだかなあ……」

「じゃあなにか事件でも起こそうか？」

「……やめてくれ……お前が起こすとめんどそうだ。
理子」

理子が現れた。

「ふう〜ひどいよ〜」

「ていうかお前、まだやることあるんじゃないのか？」

「……やっぱりお前は危険だ」

驚いた顔をしたかと思ったら突然裏の顔になる理子。

「……いったいどこまで知っているんだ？」

「んゝ・・・・・・・・だいたい？」

「・・・・・・・・お前はいつたい・・・・・・・・」

「まあ・・・・・・・・俺だからな。」

「ナオヤだから・・・・・・・・ねえ・・・・・・・・」

そして理子はまた表の顔に戻ると

「くふふ・・・・・・・・そうだね。ナオヤだもんね」

アリアたちがよく使っているなんだか不愉快な納得の仕方をしているときに使う言葉を言った。

「ブルータス・・・・・・・・お前もか」

「だれがブルータスよ。」

「お前だ理子。」

「なんでよ」

そんなたわいのない会話をしながら歩くこと数分。

「な、なにあれ？」

突然目の前の空間が丸く光りだした。

そして・・・・・・・・

「うわあああああ」

「ぎゃああああ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

車に乗った変な三人組が出てきた・・・・・・・・って!!!!!!

「・・・・・・・・アンタらがなんでこっちに!!!!!!」

「あいてて・・・・・・・・ん？なんだ坊主。」

「いてて・・・・・・・・どうした次元・・・・・・・・ってあれ？ここどこだ？」

「無事か？」

「おう五エ門。俺の車以外は何とも・・・・・・・・ああ・・・・・・・・また壊れちまった」

「な、なに？なんなの？今の・・・・・・・・ねえ、ナオヤ？」

「・・・・・・・・なんで理子といっしょにいるタイミングで・・・・・・・・狙ってやってんのか？」

「ねえったら!!」

「お、おあ？なんだ？」

「おい、アンタら、ここがどこかしらねえか？」

「理子、ちょっと待っててくれ。……えーっと……アンタは次元大介さんだったかな？」

「なんで俺の名前知ってんだ？」

次元さんが身構える。

「そう警戒せんでくれ……。で、そっちが石川五門さんで……。最後が……。ルパン三世さんであってやるよな？」

「なっ！！！」

理子がめっちゃ驚いた顔してる……。お前の祖先ではあるんだがな……。ちょっと違うんだよなあ……。

「なんで俺たちの名前知ってるかわ知らんけど……。とりあえずここどこ？」

「ここは、日本の東京だ……。っていつてわかるか？」

「なっなに！！それは本当か！？」

「俺たちはさっきまでロサンゼルスにいたはずだぞ！？」

「ふむ……」

この驚きようから多分嘘はついてない。そして名前に間違いがなかった。こっちのルパン三世はルパンじゃないリュパンなんだ。つまり……。俺のもといいた世界にあった、一ルパン三世という物語か

ら《・・・・・・・・・・》来たということになる。あいにく
そっちは原作知識がないから詳しくはわからんが多分あってるだろ
う。そしてさっきロサンゼルスにいたという。そしてここは東京。
でもこの世界では一瞬で長距離を移動することはできんだろう。と
なると別世界から飛ばされたという考え方のほうがいいだろう。俺
という実例がいるんだから。つまり何らかの方法でルパン三世の世
界から緋弾のアリアの世界に飛んだということだろう。・・・・に
しても・・・・・・・・

「なぜにこの三人なんだ・・・」

「なんかいったか？」

「いや、こっちの話です」

「それより坊主。今の話本当なんだろうな？ここは本当に日本なん
だな？」

「ええ・・・・・・・・でもあなた方の知る日本ではないです。」

「？どういうことだ？」

「えっと・・・・・・・・すまん理子。ちょっと待っててくれ。」

「わ、わかった」

「えっとですね・・・・・・・・まず、あなたの名前はルパン三世で間違
い
ないですか？」

「ああ・・・・・・・・あってるが？」

「この世界はたぶんあなた方のいた世界よりもかなり後の世界になります。」

「は？なんだ？ってことはここは未来か？」

「いえ、ちょっと違います。あなたはルパン三世です。でもこっちはリュパン三世なんですよ。」

「「・・・・・・・・・・は？」」「」

「つまり・・・・・・・・あなた方のいた世界とは別世界です。」

「ちょっとまで・・・・・・・・なんだ？・・・・・・・・つまりここは異世界で、俺たちがいた世界からすると未来に当たるということか？」

「はい。すごい理解力ですね。」

「信じられるか！！！」

「ですよねぇ・・・・・・・・でも実際この世界にはもう銭型警部も峰不二子さんもいませんよ？」

「なんだって？」

「それどころかあなたたちは・・・・というかこの世界であなただちに当たる人物はすでに死んでいます。」

「・・・・・・・・」

「あ、それともう一つ、この世界で泥棒は止めたほうがいいです。」

「……どういう意味だ？」

「あなた方のいた世界とはレベルが違います。この世界では武偵と
いって武装した警察のような人がごろごろいます。かくいう俺もそ
うですし。しかも一部の人間は人間と言っていいか不安になるほど
人間離れしたやつもいます。五エ門さんの斬鉄剣も全く通用しない
人物もいます。次元さんと同等かそれ以上の射撃技術を持っている
人もごろごろいますよ？」

「なんだと！？五エ門でも歯が立たんのか」

「信用できないなら俺とやってみますか？」

「随分と舐められたもんだなあ……どうする五エ門。」

「いいだろう。相手してやる」

「わかりました。」

俺はすぐ普通の刀を取り出すと構える。

「……って今どっから出した！？」

「まあまあ気にしなさんな」

「気にするだろう！！」

「それよりかかってきてください。」

「無視か！」

五エ門さんが斬鉄剣を構える。そして

[illegible]

奇声を上げながら斬りかかってきた。

それを俺は・
・
・
・

「ツ！！！！！！」

すべて目で見て避けた。

五エ門さんが下がる。

「そんなもんですか？」

「・・・本気で行くぞ。」

そしてまた五エ門さんが一瞬で抜刀し斬りかかってくる。

右、下、上、右、斬り払い、袈裟切り……すべての的確に避ける。

そしてまた五門さんが一気に下がる。

「……貴様、人間か？」

「はい。一応そうなるんじゃないですかね？」

その頃ルパンたちは・・・

「・・・うわぁ・・・」

「・・・ありえねえ・・・」

口をあんぐり開けて眺めていた。

「俺なんかも何やってんのか全然見えねえんだけど・・・」

「俺もだ・・・なんでアイツ避けれるんだ？」

「さぁ・・・？」

「ここはあんなのがごろいんのか・・・」

※いえ、ナオヤが人間やめてるだけです。

「盗みは無理だな・・・」

「・・・帰りてえ・・・」

そしてまた戻る。

「はぁ・・・はぁ・・・」

「もう終わりですか？では今度は俺から行きます。」

そういつて俺は一瞬で五エ門さんの後ろに回り込み斬りかかる。

「ッ！！！・・・」

キンッ

「おお、その状態でまだ反応できるんですか・・・あなたも十分人間やめてるでしょ。」

そしてさらに斬りかかる。

だがすでに疲れきっているのか、かろうじてはじいているようだ。

「ふう・・・もう終わりですね。」

「はあ・・・はあ・・・一太刀も当てられない・・・だど？・・・はあ・・・」

「というわけで信じてもらえました？」

「ああ・・・」

「さて・・・」

これからどうするかなあ・・・

第17話くルパンルパン・・・あれ？ザ・サードだっけ？く（後書き）

はい！というわけでルパン三世を混ぜてみました！

やっぱりナオヤがチートすぎる気がしなくもない・・・

第18話く帰還く（前書き）

か、風邪が・・・治らない・・・やっとな更新。
遅れてすいません・・・。

では第18話・・・どうぞく

第18話〈帰還〉

〈理子視点〉

「・・・・・・・・え・・・・・・・・」

今、目の前ではありえないような戦いが繰り広げられていた・・・。

片方は目に見えない速度で刀を振るい、相手を斬りつけようとしている。

肉眼で追い切れないような速度でふるうとなるともう弾丸の領域である。

その人が人間なのか疑いたくなるような光景だった。

もう片方は・・・

「なんでその見えない太刀を目で見てかわせるの・・・？」

そう・・・なぜか人の目で見えないような剣筋をそのまんま見てかわしていた。

というか見えたとしてもその弾丸のような速度で迫る剣をなぜかわすことができるのかという・・・。

「・・・・・・・・ナオやって人間？」

「む、失礼な。体の構造上分類は人間だぞ？」

「わ、びっくりした……終わったの？」

「おう、どうやら納得してくれたみたいだ。」

いつの間にか終わっていたらしいナオヤが（ていうか見てたはずなんだけど……）私の眩きに気づいて言ってきた。

というか体の構造上で……まるで構造以外は人間じゃないみたいなの……いや、もう人間やめてたんだった。

ほんと構造だけだ。

「……なんかすごく失礼なこと考えてないか？」

「……ソンナコトアリマセンヨー」

「……まあいいか……じゃああつちで今後のこと話してくるけど……理子はどうする？」

「うーん……ちょっと用事あるから先に帰ってる。」

「そうか。じゃあまた明日ー」

「じゃあねー」

そういつて手を振りながら寮に向かって歩きながら考える。

（……ナオヤ敵にしたらこの作戦全部つぶれそう……ていうかいっそナオヤに——あいつを倒して《……》もらおう

うかなゝ・・・？)

今後の作戦の修正案を。ていうかぶっちゃけナオヤを敵に回すと修正どころじゃないという・・・。

くナオヤ視点く

「さて・・・これで盗みの危険性はわかってもらえたかな？」

「・・・ああ・・・たしかにオメエみてえのがごろごろいるんじゃないか・・・無理だしな」

「・・・拙者もまだまだ未熟か・・・いつそこっちで旅にでも・・・」

「・・・あー・・・とりあえず、坊主。オメエなんかいろいろ知ってるみてえだが・・・俺たちが元の世界に帰る方法とか・・・しらねえか？」

「うーん・・・ちょっと待ってください」

元の世界、ルパン三世の世界か・・・というかなんでこっちにきてしまったのか・・・。

(・・・考えても知識があるわけでもないから分かるわけないか・・・となると・・・)

神様。俺を転生させてくれた最上位の神様。

(おーい。神様ー。最高神様ーー。)

『・・・・・・・・おぉー久しぶりじゃのう。なんかあったんか？』

・・・・・・・・あれ？もしかして気づいてないみたいな？たぶん世界に干渉したーとか言っただけに話が来ると思ってたんだが・・・・・・・・？

（あのさ、なんかこっちの世界に通常いてはいけない人たちが入り込んだんだが・・・・・・・・）

『・・・・・・・・ちょっと待っておれ。・・・・・・・・あぁ・・・・・・・・どうやらこの前の転生者騒動のときの影響じゃな。まだ少し歪んだら別世界につながってしまったんじゃろう。』

（どうすりゃ元の世界に戻せるんだ？）

『ああ、放置しとってかまわんよ。少ししたらかってに世界が引き張り込んでくれるじゃろう。』

（なるほど。で、少して具体的にどのくらい？）

『えーっと・・・・・・・・だいたい一時間かそこらじゃな。っと・・・・・・・・もうすでに15分たつとるみたいじゃからあと45分程度かの。』

（わかった。ありがとなー）

『気にするな。もともとこっちが完全に調整できなかったのが悪いんじゃない』

（ん。それじゃ）

『それじゃあの』

そこで念話は途切れた。（ここまでの会話、思考、計3秒）

とりあえず・・・

「・・・たぶんあと一時間くらいで戻れます。」

「本当か!？」

「はい。こっちも原因が分かったので。」

「で、何が原因なんだ？」

「・・・それは詳しくは話せません。というかめんどいです。長いので」

「めんどっ!？ってお前・・・はあ。まあいい、戻れるんだな？」

「はい。」

「ならいい。で？俺たちはどうすればいいんだ？」

「そうですねえ・・・」

特にやらなければいけないこともなし。やりたいこともなし。話す
も何も原作知ってるから興味なし。うむ、困った。

「特にやらなければいけないことはないですが何かやりたいことは

ありますか？」

「俺は特にねえな」

「俺も」

「・・・拙者は修業がしたい。手合わせ願えるか？」

なんと！？剣の達人から手合わせを頼まれた！！（※お前が人間やめてるからだよ）

「・・・わかりました！お二人は何かしたいことはないのです？」

「んー・・・あっ！！ルパン！！車！！車修理しねえと！」

「ああ・・・そうだったな。ということで俺たちはあっちで車の修理やってるよ。」

「わかりました、直りそうになかったら俺に言ってください。手はあるんで。」

「わかった。んじゃあ五エ門のあいてよろしくな！」

「はい。それじゃあ、五エ門さん、さっそく行きますか！」

「招致。・・・いくぞ！！」

そしてそこから一時間は早かった。

五エ門さんの剣をかわし続け、パーツが足りないと言われれば財宝

で取り出し（その間も斬りかかってくる）、配線がわからないと言われれば手伝い（この時も斬りかかってくる）、一時間そんな感じで時間をつぶした。

ほんと、すぐに時間は過ぎて行った。

そしてルパン一味がこっちに来てからちょうど一時間……。

「……ふう……なんとか終わったな。車の修理。」

「ああ……それにしても……お前いったいどこから……
つてうお!？」

突然、足元が光りだし、

「あ!!!五エ門さん、時間です!!」

「なぬ!?!結局一太刀も当たらなかった……」

五エ門さんもその光っているところに行き、

「あっ!!!そうだ!お前名前は!?!」

「あ、自己紹介してませんでしたね。俺の名前は……」

ルパン一味が光っているところに集結。

「俺は神野ナオヤ!短かったけど楽しかったですよ!!!」

「ああ、俺たちもだ。五エ門との戦い、なかなかの迫力だったぜ?」

「次は負けんぞ。」

「車、修理手伝ってくれてあんがとよ。助かったぜ。」

「はい!! それで・・・これは三人へのお土産で・・・す!!!!!!」

俺は財宝でなから特別な改造を施したワルサーP38、スミス&ウェッソンM19コンバットマグナムそれぞれ特殊マガジン付きと、懐に隠しやすい形の小太刀、メモを光る地面に投げ入れた。

「これは・・・？」

「それぞれ俺が作り上げたものです! かなり特殊な改造が施してありますけど・・・整備なんかは元のやつと同じようにできるし、細かいところはそのメモに書いてあります!! 小太刀は俺が鍛えたやつです! 切れ味は斬鉄剣にも劣らないはずなので試してください!!!」

「いいのか・・・? こんなかなりレアそうなやつもらっちゃまって。」

「はい! さっき改造したやつなんで問題ないです! あ、小太刀はもともとあったやつですけど・・・」

「な・・・! ? おま、五エ門に付きっきりだったろ! ? いつこんな作ってた! ?」

「禁則事項です♪」

・・・うえ・・・自分でやってて気持ち悪くなった・・・も

うやめよう。

「・・・・・・・・・・なんかお前は次元が違うな。」

「・・・・そう、かもしれませんね。他の人とは違うんでしょうね」

「まあ、なにはともあれありがとよ！ありがたく使わせてもらうぜ
！」

「それでは、また！！！！・・・・・・といってももう会うことはない
んでしょうけど。」

「ああ・・・・・・・・・・じゃあな！！」

「それじゃあな！」

「・・・・・・・・さらば」

そうして三人は光に包まれて消えていった。

・・・・・・・・車を残して。

（ルパン視点）

「うつ・・・・・・・・まぶしいな・・・・・・・・」

「・・・・・・・・戻ってこれたのか？」

「・・・・・・・・」

俺たちは来た時のトンネルにいた。

「どうやらちゃんと戻ってこれたみたいだな……。」

「というか夢だったんじゃないだろうな？」

「……いや、これがあるではないか」

そういつて五エ門が出したのは小太刀。スッと抜いて近くの壁を切ってみると……

「………??…ツ!!!!!!………なんだこれは!」

「ど、どうした五エ門………って………うわぁ………あいつとんでもねえもの渡していきやがったな………」

壁には――ミリにも満たない隙間《………》ができていた。

「うわぁ………傷にすらなってねぇよ。なんだこれ？」

それはまるで最初からそういう形だったかのようなあとだった。

「……五エ門。ちょっと貸してくれ」

「う、うむ………」

俺はその小太刀を持ち、軽く壁に当ててみる。すると……

「・・・・うわぁ・・・・やべえ・・・・」

「なんだ・・・・これ？」

「・・・・・・」

コンクリートできている壁がまるでプリンにスプーンを刺すかのような柔らかさで切れていく。

「・・・・もうおかしいだろ・・・・これ。」

「・・・・俺たちの銃はどうなってんだ？」

そう言われて初めて思い出し、早速試し撃ちしてみる。

「・・・・そうだな。あの缶でも狙ってみるか」

次元はそう言って30mほど離れたところに落ちている缶を狙って引き金を引いた。

ポスッ

「「・・・・・・は？」」「」

なぜか銃撃音はなかった。・・・・いや、それはまだサイレンサーが付いているということで納得できる。・・・・サイレンサーにしてもかなり小さかったが。

問題は・・・・・・

「・・・缶が微動だにしてねえんだが・・・？」

「でも弾は出たよな・・・？五エ門見えたか？」

「・・・一瞬何か通ったということしかわからなかった・・・。」

「「なっ・・・！？」」

五エ門は今まで幾度も銃弾を斬ってきた。

その五エ門ですら見えないとなると・・・

「・・・ちよつと缶見てくる。」

「・・・俺も」

「・・・・・・」

結局俺たち三人で缶の様子を見に行き、チェックすると・・・。

「・・・んなあほな・・・。」

「・・・これ、やばくないか？かなり・・・」

「・・・・・・」

そこにはたしかに穴のあいた缶があった・・・うしろの地面
にもかなり深く小指サイズの穴が開いていたが・・・。

「弾は出た……。だが缶は微動だにしていない……。そして一直線にあいた穴……。」

「…………五エ門にすら見えず、音も聞こえない、穴はなぜ通ったところが虫食いのように穴が開く……。」

「…………暗殺にはもってこいの道具だな」

……………。

「よ、よし！最後は俺だな！！」

そしてまた同じく30mくらいから缶を撃ってみる……。

ポスッ

「「……………」」」

やっぱり次元の銃と同じような結果になった……が。

「…………ツ！！？？…………おいルパン…………ここ読んでみろ」

そういつて次元と一緒に渡されたメモの一か所を指差しながら見せてきた。

「なにに…………？『ちなみに銃には改造マガジンが付いていて、最高で30発まで入ります♪』……………」

俺たちは無言でマガジンを確認し、弾を入れてみる。

第18話〈帰還〉（後書き）

・・・五エ門ってこんな口調だったっけ・・・？

さてそんなことより、アンケートやりたいと思います！

チートもらって転生の主人公神野ナオヤ。

現在、外伝編はテイルズのファンタジアのみです。

いつか本編として書きますけど。

ここで質問！

ナオヤを別の世界に行かせるならどこがいい？

1 Angel Beats！

2 ネギま！

3 テイルズシリーズ（どれか）

4 その他（タイトルを書いてください！）

どれがいいです？

といっても感想くれる人がそんなにいるわけじゃないので一人二票まで！

期限は・・・今は特になしです！でも突然終わるかもしれません！！

というわけで・・・次回も多分遅くなります。すいません。

第19話くフラグが立ちましたく（前書き）

な、なんとか書けた・・・

すいません、遅くなりました。親の目をかいくぐって投稿する19話。

なぜこうなったかわかりません！

どうぞ！！

第19話〈フラグが立ちました〉

〈キンジ視点〉

「はぁ・・・」

結局あのあと、アリアは外へ行き、少しすると泣きだしてしまった。

そしてナオヤも中から出てくることはなかった。

一度は何をしてるのかと思い、中に行こうとも思ったがこの状態のアリアを一人にしておくこともできずにただ、ただずっと泣きやむまで、俺はアリアのそばで立ち尽くしていた。

しばらくして泣きやみ、アリアはゆっくりと歩き出した。俺はアリアの後について歩くだけだった。

そしていつしか寮の近くまで来ており、アリアは「ここで別れましょう」といってそのまま寮に帰って行った。

・・・今まで女性を避けてきたためか、ああいう時にどうすればいいのか、俺には全くわからなかった。

どうしてやることもできなかった。

その後、結局俺も自分のマンションに戻り、明日の準備をした。

そして今、武偵校で授業を受けていた。隣にいるはずのアリアは今、ここにはいなかった。

・・・ただアリアを見つけたからという理由で後をつけていたら
いろんなことを知ってしまった。

アリアの母親が『武偵殺し』に冤罪を着せられているということ。

そして早くも二審まで有罪判決を受けているということ。

たぶん下級裁隔意制度——証拠が十分に残っている事件について、
高裁までを迅速に執り行い、裁判が遅滞しないようにする新制度——
——を適用されたのだろう。

その高裁での量刑、なんと懲役864年、事実上終身刑だ。

面会室の時の会話からするとどうやら他にも冤罪を着せられている
らしい。

どうやらアリアはその冤罪を最高裁までに、すべての真犯人を捕ま
えるという荒っぽいやり方で覆そうとしているようだ。

アリアの実家こと、『H』家はどうか警察か何かの名門らしく、
みんな自分にあった相棒を見つけたことで自らの能力を飛躍的に
伸ばし、たくさん功績を残してきたらしい。

だが、アリアはその相棒、パートナーを見つけれずにいる。

そりゃそうだろう。

あんな天才児に合わせられる相棒なんてそうそういない。

アリアが始め、俺たちのことを奴隷と呼ぼうとしたのも（ナオヤに
O☆H A☆N A☆S H Iされて言えなくなっているが・・・）パー
トナーからドレイに格下げすることで心理的負担を下げようとした
からかもしれない。（となると現在は心理的負担大・・・？）

・・・・・・・・・・・・・・・・

そんなことをぼんやり考えながら全然授業に集中していなかった時、

理子からメールが来た。

（ナオヤ視点）

「さてっと・・・どうするかな」

現在、原作はちょうど理子が正体を現す前だ。

だが、今回は・・・

「ちょっとまずつたかなあ」

原作では病院でのケンカのちアリアがロンドンに帰るために飛行
機に乗り込み、理子の情報から推理したキンジが助けに出る。

だが、この喧嘩をしなかったためアリアたちは仲違していない。

その少しの違いからどんなふうになるのか予想ができない。

もしかしたらアリアが帰らないかもしれない。

理子がメールを送らずに情報が足りなくてキンジが助けにいかないかもしれない。

理子の計画が変わっているかもしれない。

挙げればきりが無い。

ただ、一つ言えるのは理子はアリアが本領発揮できる状態でなければ殺しはしないだろうということ。

つまり・・・

「キンジを見張ってよう！！！」

という結論になった。

※ここまでの思考（会話文除く）約0、21秒。

つまりはたから見ると、

「さてっと・・・どうするかなちよっとまずつたかなあキンジを見張ってよう！！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・

次の日、学校ではナオヤの変人疑惑が上がっているのだが・・・・・・それはまた別の話。

「というわけでキンジ、いまからお前を監視する!!!!」

「どういうわけだ!？」

放課後、キンジのところへ行き、いっさい状況を説明することなく監視宣言。

そしてキンジの後を少し離れた所からあからさまに眺めて監視。

その後、学校ではキンジ×ナオヤ×??? というBLの構造が出来上がっているという噂がたつのだが・・・・それはまた（ry

そしてキンジが男と女のハーレムを作り上げるという噂が（ry

さらにアリアが振られたという（ry

さらに（ry

・・・・というような感じで無限に噂がたち続けてたいへんなことになるのだがそれは（ry

（アリア視点）

「バカッ！キンジのバカー!!!!」

なんであたしがこんなに怒っているかと言うと、なぜかキンジとナオヤの間に恋愛感情が生まれているという噂が立っていて、あ、ああたしがき、キンジにふ、ふふふられたなんていうわけのわからない噂が立っているからだった。

「あ、ああたしはれれ、恋愛なんてきよ、興味ないんだからああああああ!!!」

た、たしかにキンジは結構やさしいし・・・と、時々心配してくれてるし・・・突然へ、変な口調になってあ、ああ、あああたしのことをひ、姫様とか言ったりして・・・／／／／

「（ああああああああ／／／／）」

———／／／／／／／／

※アリアが完全に惚気てしまってはなしにならないので元の視点に戻します。

くナオヤ視点く

ん？なんか今アリアが落ちたような音が・・・まいつか。

「で、キンジ。アリアは？」

「ん？・・・今日は学校には来てなかったぞ。」

「そうか、じゃあ理子は？」

「・・・なんかしらんが呼びだされた。多分その辺にいるんじゃないか？」

・・・あ？

「マジ？」

「ああ。授業が終わったら台場のクラブ・エステーレってどこに來いだってさ。」

「ほう・・・」

ほうほう・・・

「つまりフラグがたったわけですね」

「何のことだ」

「まあまあまあ・・・それで？行くのか？」

「・・・ああ。なんかこう、胸騒ぎがする」

「・・・そうか」

この辺はそこそこ原作と同じだな。・・・世界の修正力とかあるんかな？

「まあいいや。じゃあ俺はちよいと用事があるんで逝かせてもらわ。」

「（・・・なんか今字が違ったような気がしたが・・・まあいいか。）そうか、わかった」

そして俺は空港に行き、椅子に座って待つ！！

（一時間後）

俺はP○Pでティーズ オ○ ○ ワール○ レディア○トマイソ
ロジー3をやっていた。

ていうかおもしろいよねアレ。マジはまるわぁ・・・。

じゃなくて、キンジが来た。

キャビンさん脅してった。

そして俺は席を立ち、ゲームをしながらキャビンアテンダントに話しかけた。

「よう！準備はどうだい？」

「・・・あのーお客様？初対面だと思うのですが・・・」

「はっはっは・・・気にすんなよ理子」

するとさっきまでの声とは全く違う声になり、

「・・・毎回思うんだが・・・なぜわかる？」

「俺がお前を見分けられないわけがないだろう。」

「っ！！！／／／／／」

・・・あれ？なんか今変なフラグ立てた気がしなくもない・・・。

「……お、お前はなんなんだ？ 邪魔するのかなと思ったら……
その……突然……口説き文句みたいなのを……ボソボ
ソ……」

「ん？ なんだ？ なんかいったか？」

「い、いや、何でもない」

「そうか？」

「……それより……邪魔するのか？」

「いや？ 面倒だし」

「……ふふ。」

「どった？」

「なーんでもないですよーだ！ ふっふっふ……理子りんにな
うとおもうなよー？」

理子は突然表に戻って話し始めた。

「……やっぱりその突然の切り替えは違和感があるなあ」

「えっへん！ そこがポイントなのだー！ ツンデレだってー突然デレ
るからいいんじゃないかあー！！」

「「「「「そうだそうだー！！！！」」」」」

「うわっ！お前ら誰だ！？」

突然、近くにいた大きなお友達と思われる人たちが大きな声で叫んだ。

・・・周りの人めっちゃ引いてる。

「・・・もういいや。おなかいっぱい。と言うわけで俺は逝く！！」

「いってらっしゃーい！！」

「」「」「逝ってらっしゃーい！！」「」「」「」

「うわっ！」

・・・まだいたのか。ていうかそんな野太い声でいってらっしゃいの合唱せんでくれ・・・。しかも今字が違ったろ。

とりあえず高速で退散。

さて、そうしよっかなあ・・・

（理子視点）

「ふう・・・」

・・・何しにきたんだろう・・・。

「といひかなんでわたしの変装見抜けるのかなあ・・・？」

自分で言うのもなんだけど、わたしはかなり変装に自信があった。そうそうばれることはないと思ってたんだけど……。

なぜかあいつはいつも会うたびにかならず見抜いてくる。

なんでわかるんだろう。

気になって聞いてみたらあのセリフ。

回答になってないけど……その……正直うれしかった。

なんでうれしかったのかわからないけど……なんだかアイツとは敵対したくない。

そう思った。

「……次も見抜いてくれるかな？ ナオヤ……」

第19話くフラグが立ちましたく（後書き）

はい、短いです。すいません。

そして今後も遅くなると思いますが。ごめんなさい。

第20話〈原作完全破壊〉（前書き）

どうも、ゴマです。頑張って更新しました。

・・・でもなんでこうなったんでしょうね。

第20話 原作完全破壊

キンジ視点

「・・・どうしてこうなった？」

～～～回想～～～

俺は理子から情報を得てアリアが殺されるという結論に達し、急いで空港まで追いかけた。

そして近くにいたキャビンさんに話しかけ、武偵手帳を見せながら飛行機を止められないかと言った。

だが案の定、ダメだったらしく戻ってきた。俺は仕方なく飛行機に乗り込みアリアのいる部屋に行った。

入ってから近くにいた（さっきとは違う）キャビンさんに案内してもらった。

そしてアリアの部屋に入り込み事情を話した。

アリアは驚いていたがすぐに「なぜそれに気づけたか」と聞いてきた。

俺はまだ話すことができないから心のなかで謝りながら「偶然だ」と答えた。

そして少ししてだんだんと雷の音が大きくなり、アリアがビクつい

てきた頃。

突如として銃声が聞こえた。

あわてて外に出ると操縦士の二人が最初にあったキャビンさんに引きずられて出てきた。

そして謎の気体を噴出する弾を転がされ、乗客に指示を出しながら俺たちも非難。（後から気付いたがあれはただの煙幕だった。）

そして・・・椅子についているランプが不規則に点滅した。

信号だった。内容は、一階のロビーにいるから来いとのこと。

俺とアリアは注意しながら、呼びだされた一階のロビーに行った。そこには先ほどのキャビンさん。

そしてそのキャビンさんは実は変装していた理子だった。

そして理子が襲い掛かってきた。

その時、

『・・・・・・・・ああああ・・・・・・・・』

「・・・・・・・・アリア、今何か聞こえなかったか？」

「・・・・・・・・？いえ・・・特には聞こえなかったけど・・・・・・・・」

気のせいか？と思った時

ドカアアアアアン

「ぐはっ！」

「なっ・・・」

「は・・・？」

「・・・ええ・・・」

・・・飛行機の装甲をぶち破ってナオヤが入ってきた。

最初は皆びっくりしていたが・・・ここは空の上。そんなところで装甲をぶち破ったら・・・

ヒュゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

「「「うわああああああああああああああ」」」

当然皆穴に吸い込まれるわけで・・・。

そして外に放り出される寸前で

「ぬううおおおおおおおおおおお！！！！」

ガガガガガン！！！！

ナオヤが目にもとまらぬ速さで穴を修復した・・・。

「「「.....」」」

「.....はい、すいませんでした。」

「「「よろしい。」」」

.....なんでさっきまで戦おうとしていたやつらがこんな
んになったんだ？

くナオヤ視点く

うわっ！このタイミングで俺！？

ゴマ『いや、そろそろかなあと』

「だれ！？」

「「「うわっ.....」」」

「.....あ.....いや.....その.....」

「「「.....」」」

ゴマ『うわぁ.....またこの空気にしてやんの』

「てめえのせいだが！！.....あっ」

「「「(ビクッ).....」」」

「い、いや、その、なんか今声が聞こえて!」

「「「(ヒソヒソヒソヒソヒソヒソ……)」」」

……うわぁ……なんか話してる……。

「「……よし。とりあえず病院だ」」

「ちよ、まったアアアアアアアアアア!……!」

「うわっ!壊れた!!」

「逃げろ!」

「きゃーナオヤにおそろわれr「お前は何を言っている!!!」イタッ!」

……カオス。

〈第三者視点〉

※カオスな状況になったため他の人の視点からお送りいたします。

その後、なんとか騒ぎは収まったが結局やり直しになり、アリアとキンジが理子との戦闘を開始した。

ナオヤは戦闘には参加せず、そのまま見ていた。

そして理子が何かの能力なのか自分の髪の毛を操ることでナイフを持たせ、アリアに斬りかかり、アリアの側頭部が斬られる……

というタイミングでナオヤが参戦。

二本指の白刃取りでナイフをキャッチ。キンジたちに一度部屋に隠れるように指示した。

（ナオヤ視点）

ふう……。いくらできるだけ原作通りに進めたいからと言っても友達の頭を斬られるっていうのは見過ごせないなあ。

「……………なんで邪魔する？」

「……………悪いな。さすがに致命傷は見逃せねえや。」

「……………」

理子は無言で距離を取った。

「……………うそつき」

「……………ああ……………ごめんな」

「……………バカ……………」

「……………ああ……………考えなしにあんなこと言って悪かったな」

「……………変態」

「……………ああ……………俺はへんた……………ってまて！？なぜに変態！？」

「・・・・・・・・このクス野郎」

「グハア・・・・・・・・そ、そこまでいうか」

いつもとは違った様子の理子に罵倒される。・・・・・・・・まあ俺が悪いんだしな・・・・・・・・。

「・・・・・・・・はあ・・・・・・・・なんだかやる気なくなっちゃったなあ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・悪いな。」

「もう・・・・・・・・なんか責任取ってよね？」

責任・・・・・・・・ねえ・・・・・・・・

「・・・・・・・・じゃあ・・・・・・・・」

「なに？」

「俺がブラドとヒルダからお前を守ってやるよ」

「!!!!!!」

「いったよなあ俺。お前も含めて全部助けるって。」

「・・・・・・・・」

「だから助けてやる」

「……………これを果たしたらもう助けられないの？」

「何言ってるの？」

え？なに？

「全部助けるって言ったろ。ちゃんと最後まで付き合ってやんよ。」

「……………助け終わったら……………もう終わり？」

「ん？そりゃ終わりだろ」

「ビクッ……………そう……………なんだ……………終わったら……………それだけなんだ」

……………そういつて理子は俯いてしまった。

「……………どうした？別に終わったからと言ってそれで関係なくなるわけでもないのに」

「……………え？……………だって助けることがなくなったらそれで終わりなんでしょ？」

「ん？別に助けることがなくなってもう会わないわけでもないだろう。俺たち友達だろう？」

「……………友達……………」

「え？違ったの？……………俺だけが勝手に友達だと思ってたの？」

「いや・・・そうじゃなくて」

「・・・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・／／／／も、もういい」

「・・・・・・・・・・・・・？？？？」

・・・・・・・・・・なに？俺なんかした？

「・・・・・・・・なら俺がブラドどもから守るってことでいいか？」

「・・・・・・・・・・できるの？」

「余裕余裕く♪」

「わかった」

結局アリアたちにも話して和解した。

理子には初めから用意してあったパラシュートで脱出してもらい、犯人はパラシュートで逃げたということになった。

だが、その後ミサイルが飛んでくるイベントは残っていたようで巨大なのが二発、飛行機のエンジンを破壊していった。

さて、あとは原作通り。いつの間にかヒスっていたキングがアドバイスしながらアリアが操縦。

クラスのみんなの助けも借りてなんとか着地に成功。

その後、司法取引などのいろいろな書類が来てしばらくはその書類の処理に困ったとき。

さて・・・

「どうしよう・・・」

原作ブチ壊しちまった。

理子との戦闘ルート×

俺が倒すつもりだからブラドとの戦闘ルート（多分）×

きつとその後出てくるブラドの娘の戦闘対象俺

理子との絆が深くなるイベント×

結果・・・原作何それ？オイシイノ？

・・・

「マジでどうしよう・・・」

第21話く氷の魔女く（前書き）

どうも！ゴマです！

また更新できました！

でもいろいろとおかしくなってしまった！！！
では21話、どうぞく

第21話　氷の魔女

　ナオヤ視点

「……今回の事件で武偵殺しが冤罪だって証明できたからママの公判が伸びたわ。年単位で最高裁が延期になるんだって。」

「よかったじゃないか」

そう。あの事件のおかげで武偵殺しの分が冤罪だということが証明できたため、何とかかなえさんの最高裁が伸びたのだ。

「……ええ」

「どうした？　なんか浮かないみたいだが。」

「……なんでアンタは理子の味方をしたの？」

「それは俺も気になってたんだ。理子が武偵殺しなんだろう？」

「……」

さて……聞かれるとは思ったがどうしようか。

やっぱりここは……

「強いて言うなら……」

「……」

「俺があんまりの空気ブチ壊したからな！」

「.....?」

「いやー理子もかなり凝った作戦立ててたみたいだったのに俺が邪魔しちゃったからなく・・・」

かなりいい雰囲気だったのね？俺マジで何やってんだか。

「・・・・・・・・まあいいいわ・・・・・・・・ナオヤだし。」

「
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
だな。」

む、悪しき気配。

「セイヤアアアアアアアアアアアアアア」

「ぎやあああああああああああああ」

キンジへのダイレクトアタアアアアアアアツク！！（テイ○ズの獅子戦吼）

「ちょ、キンジ！？え！？ていうか今のなに！？」

「てめえ……いきなり何しやがる!!!!」

「うおっ! ? もう立ち直ったのか? 手加減したとはいえ全力でやる

と建物が簡単に壊せるような代物なんだがなあ・・・」

「そんなもん人に向けて使うんじゃないっ!!」

まあまあまあまあ・・・

「6回・・・」

「なにが!？」

「・・・まあいいわ。このままだと話が進みそうにないし。」

「・・・そうだな」

「それよりもアンタどうしてあんなところから来たの？」

「あんなところ？」

「いや、飛行機の装甲ぶち抜いてきたじゃない」

「ああ・・・」

あれか・・・

「あれは語ると長い・・・」「ならいいわ」・・・

「どうせナオヤだしな」

む、悪しき（ry

「セイヤアアアアアアアアアア」

「デジャビュ!? ぐほああああああ」

「・・・・・・・・・・はあ・・・・・・・・じゃあキンジ、アンタはなんであたしのところに来たの?」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「返事がない ただの屍のようだ」

「・・・・・・・・・・はあ・・・・・・・・・・」

ん? アリアさんよう

「あんましため息ばっかついてると幸せが逃げるぜ?」

「・・・・・・・・・・はあ

ああああああ・・・・・・・・・・」

なげエ・・・・・・・・

そしてしばらくしてキンジが復活できた頃・・・

「・・・・・・・・それじゃキンジも起きたことだし、ちよつと話があるわ・・・・・・・・」

「それは大切なことかい?」

「・・・・・・・・ええ、とっても。」

「・・・・・・・・そうか」

今ので判断出来てしまった。

このタイミング。この場面。

アリアの・・・・別れを告げるイベント。

「キンジ・・・・ナオヤ・・・・アンタ達とは約束してたわね・・・・」

「・・・・・・・・・・・・」

「アンタ達とパートナーを組むのは最初の一回だけって・・・・」

・・・・・・・・アリア。

「何勘違いしてんだ？」

「・・・・・・・・へ？」

「俺は別に期限なんて付けてねえぞ？」

「・・・・俺は強襲科アサルトに戻るの一回だけだと言ったはずだぞ？」

「・・・・・・・・じゃ、じゃあ・・・・」

「俺はお前のパートナーを辞めるつもりはない。……来年には武偵を辞めるけどな」

「俺の場合は、アリアだけのパートナーって訳にはいかないけどな。」

「……ありが……と」

うんうん……なかなか……流れが読めんかった!!!

まさかこうなるとは……キンジも、俺がいたせいかあんまり嫌悪感を感じてないみたいだし。

まあ……これはこれで

「一件落着……てな」

ところで……一件落着っていうと二件目三件目がありそうだと思うわなにかい？

……やべ。キンジのセリフ取っちゃった。

そしてその後、キンジの家で白雪たちとひと悶着あったことは……
・いいよね？別に

（???視点）

「ふむ．．．．．やはり狙うなら星伽か．．．．」

暗い部屋。そこにはただ一人、銀色の髪をした女がいるだけだった。

女は獲物を品定めする。狙われた獲物は．．．．

「星伽白雪．．．．お前にしよう．．．．」

くナオヤ視点く

「ふああああ．．．．ん．．．．」

おはよう！皆！

今日は日曜日さ！というわけでおやすみ！！！！

ゴマ『寝るな！！！！』

ゴンッ

「ぐはあ．．．．．」

．．．．どこからかタライが俺の頭に降ってきた。

「．．．．なぜにタライ？そして毎回思うがお前は誰だあああああ
ああああああああ！！！！！！」

．．．．ちっ。もういないのか。

「さて……目が覚めてしまった。……なにしよう。」

さて！ またまた状況の整理だ。

現在は第二巻のイベントが終了し、ちょうど二巻に入ったところか。

ということとはジャン『まだばらすなよ?』
 ．．．ちつ。さつき
 帰ったんじゃないのか．．．

まあいいや。あいつが白雪を襲うんだったか？

めんどくせえ

あ、そういえば俺も超能力があつたんだつた。

G42だっけか？・・・あれ？俺人間だっけ？※身体構造上は人間に分類されます

まあいいや。とりあえず暇だ。というわけで・・・

「今回はジャンヌさんに教えてもらいましょう！ イエイエイエイエ
イエイエイエイエ！……！」

「うわっ・・・・・・・・貴様・・・・・・・・どうやってここに来た!？」

「はいはいどもー。わたくし神野ナオヤと申します。」

「な、き、貴様があの化物か？」

「へ？俺もう化物扱いになってるの？」

「・・・・・・・・全科でRランクとか言う意味のわからない者を貴様は人間と言うのか？」

「うわひでえ・・・・・・・・」

「ふん！そんなことは関係ない！」

「いやお前が言ったんじゃない」

「・・・・・・・・・・・・・・・・貴様は何をしに来たんだ？」

「遊びに来た」

「死ね」

ブンッ

「うわっ」

いきなりジャンヌさんが聖剣デュランダルを抜いて襲い掛かって来た・・・・・・・・ので

「よっと」

素手でつかんでみた。

「なッ！？さすが化物・・・・・・・・だがこれなら！！」

パキパキパキ・・・・・・・・

「ん？うわつつめた！……ふん！」

パリンッ

「はっ！？いや待て貴様！！どうやって私の氷を！？」

「どうやってって……こう、手に力を入れて……フン！って
感じで」

はいそうです！割りましたね！聖剣をつかんだら掴んだところから
凍ったからね！俺冷たいのあんまり好きじゃないんだ！

「ば、バカな！あの氷がついた時点ですでに動かないはずだ！！」

「いや知らんがな」

知ってるけど

「クッ……」

「ふむ……あのさ」

「……なんだ」

「そろそろ剣退けてくんない？」

「……」

そうなんですよ。この子もうすでに万策尽きてるのに力を抜かない

んですよ。策士とか言ってたのにねえ・・・なんかこう無駄に時間稼ぎをしてるような・・・ん？

「そこらへんにあったトラップなら作動しねえよ？」

「な、なに！？いつの間に・・・クッ・・・」

スッ・・・

「やっと退いてくれたよ・・・」

「・・・・・・・・で？何の用だ？」

「いやだから遊びに「真面目に答えろ」・・・・・・・・白雪狙ってんだろ？」

「なぜそのことを！？」

「ふはははは俺最強！！」

「・・・・・・・・・・で？」

「・・・・・・・・いや、せめてなんか突っ込んでよ」

シュンッ

「いやいやいや！？デュランダルを突っ込まないでくれ！？」

「貴様が何か突っ込めと言ったからだろう」

「そういう意味じゃないよ!？」

「なら貴様のうしろの穴に……」

「待てッッッ!!! この小説をノクターンに乗せるつもりか!？」

「……貴様、案外かわいい顔をしているな……はっ! まさか女か!？ なら前の穴に……」

「だからやめええい!!!! そして俺は男だ!!!!!!」

あれ!？ ジャンヌってこんな変態だったっけ!？

「スキあり!！」

ボンッ

「あ、なるほど……下ネタで俺に突っ込みをさせてその間に逃げると……」

……なぜに下？

「ジャアアアンヌウウウウウウ!! お前変態だったんだなあああああああ!！」

『違うわああああああああああああ!!!!!』

いやだってねえ? 自分で言うっておきながら違うはないだろう。

そして結局ジャンヌさんには逃げられてしまった。

暇なので家に戻った。電話したらみんな今日は用事があって忙しいって……

その日は一日中ずっと一人じゃんけんやってた。

右手が103247428384726499873勝。左手が2勝

右手TUEEEEEEEEEEEEE!!!!!!

……その日のご飯はなんだかちょっとしょっぱかった。

第21話く氷の魔女く（後書き）

・ ・ ・ ・ ・ なにがどうしてこうなった！
誰かシャーロック・ホームズを呼んでください！！助けて！

第22話く人外バンザイく(前書き)

俺頑張った!! どうもゴマです。

特にいうことなし!
では22話どうぞく

第22話〈人外バンザイ〉

〈キンジ視点〉

「よう、ナオヤ」

「お、キンジ！おはようさん！」

月曜日の朝。いつも通りに学校に来た俺が一番最初に見かけたのはナオヤだった。

・・・すぐくテンションの高い。

「・・・なんでお前そんなにテンションが高いんだ？昨日何かあったのか？」

「いや！特に何もなかったぜ！！ほんとのほんとになんにもなかったぜ！！！！なんにも・・・なかったぜ・・・」

「え！？いやどうした！？」

まっ・・・まさか・・・

「・・・昨日、俺に電話してから何したか・・・順番に教えてくれないか？」

「・・・昨日、お前に電話した後・・・武藤に電話したら・・・『新しい車が来るから無理！わりいな！』ってすぐくうれしそうに言ってた」

「・・・そうか」

武藤・・・お前のところにも言ってたのか

「・・・それで？」

「・・・そのあと不知火に電話したら・・・『ごめん、はずせない用事があるんだ』ってすごくさわやかに言われた」

・・・お前もか不知火

「・・・それから？」

「・・・アリアは『裁判の準備で忙しい』って・・・白雪は『星伽の行事があるからだめ』だって・・・」

「・・・」

「レキは『仕事があります』って・・・理子は『今日はギャルゲーの日！』って・・・」

・・・レキは分かるが理子のは何なんだ？

「他にも風魔は『修行がありますゆえ』って・・・あかりちゃん達は『今日は三人で遊ぶ約束なんです。すいません・・・』って申し訳なさそうに・・・」

「・・・結局その日何してたんだ？」

「……一人じゃんけんしてた」

「なんでそんなさみしいことしてんだよ!？」

「……誰も暇な人いないし……」

「勉強しないのか？」

「……基本テスト満点だし」

「整備は？」

「……二十秒で全部終わったし」

「魔改造とかしないのか？」

「……大半がもう化物だし」

「ゲームとかは？」

「……今持ってるやつ全クリカンストしたし。アイテムとか隠しとか全部終わったし」

「昼寝は？」

「……俺一日一時間寝たら他の人が十時間以上寝たのと同じ効果があるし」

「……そ、そうか……じゃあじゃんけんの勝敗は？」

「・・・右手が103247428384726499873
勝。左手が2勝した。右手がクソ強かった」

「・・・そうか」

俺はナオヤの肩に手を置いた・・・。

なんだかちょっと・・・視界が霞んでいた。

（ナオヤ視点）

キンジに構ってもらって少しすっきりした。

そして今度遊ぶ約束をした。周りにいた人たちも一緒に遊んでくれることになった。

・・・うれしくて目の前が少し霞んでいた。そしたら皆が温かい目でこっちを見てた。

「・・・さて！そろそろ教室に行くか・・・ってお？おいリアー」

「ん？なんだ。ナオヤにキンジじゃない。・・・どうしたの？なんか目が赤いけど・・・」

「・・・後で説明する」

「?..?」

キンジ・・・

「それより今度さ……って、ん？」

「どうしたの？ ナオヤ……ってこれ……」

「……『星伽 白雪 マスターズ 至急教務科まで来い』……か。珍しいな。
白雪が呼びだし喰らうなんて」

そう、目の前の掲示板に白雪呼び出しの指示が書いてあったのだ。

……まさか

「アリア、キンジ……お前ら、毎回部屋で乱闘やってるからってグルで報告したんじゃない」「するか（わけないでしょ!?!）」「冗談だ」

「私たち貴族はね！ そんな告げ口みたいなことはしないのよ!!」

「ふん……」

「へえ……」

「な、なによ!」

「「いや、何でもないが?」」

「~~~~~ッ!」

ふははは特に理由のないこのイライラする攻撃でもくらっとけ!……
……本当に他意はないがな!!

「それよりも!!白雪を追うわよ!!」

「なぜだ?」

「弱みを握るのよ!!」

おいアリアさんや。告げ口はしないのに弱みを握るとはこれいかに。

「いいから行くわよ!!」

そしてそこからは原作通りだった。・・・途中までは。

キンジがかなりやけくそ気味にアリアを「たかいたかーい」といつて通気口まで押し上げ、アリアに鳩尾を蹴られた。・・・ププツ

そして、匍匐前進で中を進み（女性が匍匐前進で男性の前に行くのはどうかと・・・）アリアがさっさと前に行ってしまう。

キンジが「お前匍匐前進が早いな」といい、アリアは「強襲科アサルトのなかでは一番早いわ」と答え、またキンジが「そうだろうな。お前は邪魔になるものがないからな」といい、そしてアリアが「なにが?」と聞き・・・キンジの「胸だ」の発言の瞬間、俺の目でも捉える事の出来ない速度でアリアの足が動き、絶妙な角度でキンジの顔面にめり込んだ。

・・・5?ほど。っていうか陥没してね!?!?・・・ギャグ補正つええ・・・

そして白雪との会話を盗聴後、アリアが突入。キンジがアホみたい

にアリアの上に落下。そして俺はアリアたちが教師の綴に投げられたあたりで登場。

そこからの少し違った。

「んー？何これ？」

おい綴先生。教師なのに生徒をこれ扱いとは何事だ。

「あー・・・ハイジャックの時のカップルじゃん。」

カップルとか言ったら・・・ああ・・・もうアリアが真っ赤に・・・。

「んでこっちは人外バンザイじゃんか。」

「おいこら誰が人外バンザイか」

「お前だあー・・・神野ナオヤ。マスタース教務科を除くすべての科においてRランクの人外バンザイ」

おいせめて武偵とは呼んでくれないのか。

「だが実際はRランクに収まっておらず、実力だけならすでにRランクが百人束になっても勝てないという噂がある。」

・・・アレ？なにそれ・・・俺シラニンダケド・・・たぶんあつてるけど。

「だが一般校からの転校生のため、経験が足りないと思われる。」

はいあってます。ていうか転校生じゃなく転生者なんだけどね？

「情報科のSランクが調べたが、転校前の情報が一切存在しない。
最近では本当に人間かどうか怪しまれている。」

「……ナンテコッタイ。まあ突然学校に来たRランクなんて調べられない方がおかしいがな！……人間かどうかは最近自分でもわからなくなってるケド……」

「武器は……違法改造……ってか魔改造の鋼鉄破り。……射程範囲は6kmを超え、最近では秒間30発で乱射できる。弾倉に入る弾は全部で50発。……ねえ……弾倉の形どうなってんのさ。いやそれよりもなんで狙撃銃が当たり前のようにARよりも連射できるのさ。」

「俺にもよくわかりません」

「……通称《人外モデル》と呼ばれ」

「エ！？なにそれ！？せめて俺の名前を入れてよ！！」

「その人外モデルを二丁同時に持ち、スコープをのぞかずに6km以上先の的に平然と当てる。さらに狙撃時の反動をすべて押さえ、特殊なサイレンサーで現在では着弾時以外には聞こえない。……風切り音はどこういったのさ。立ったまま狙撃し、百発百中。……アンタ変態だね」

「なぜその結論に至ったかじっくりご教授願いたい」

「あたしはそれよりなぜそんな人外バンザイな体のつくりになっているのか知りたい。尋問してやろうか」

ヤメテ！

「……でこっちは神埼・H・アリア。Sランク武偵で双銃双剣^ラね。ロンドンではだいぶ活躍してたみたいだが全部ロンドンの武偵局が自分たちの業績にしたみたいだねえ。協調性がないせいだ。このマヌケエ。」

「ふん！貴族は誰かが自分の手柄を横取りしても威張らないのよ！」

「へえ……あたしは平民でよかったねえ。そういえばアンタ、およ「あああああああ！！！」」

ああ……そういえばアリアは……

「あ、あたしは浮き輪があれば大丈夫なのよ！！！」

泳げないんだったなあ……

ほらアリア、そんな風に自爆したから横でキンジが「いいこと聞いたぜ」みたいな顔で笑ってるよ？

「そこでこっちは遠山キンジ。Eランクの探偵^{インクスタ}科。」

「……」

「だが、強襲^{アサルト}科の生徒は一目置いているものが多く、ある種のカリスマ性があると思われる。」

ほんと、綴の頭はどうなってるのやら・・・どうせ全生徒の情報が頭に入ってたんだろうな。

「受けた依頼は、青海の猫探し、ANAのハイジャック・・・ねえ、なんでアンタやることの大きい小さいの差がそんなに激しいのさ。」

「俺に聞かないでください」

いやキンジよ。お前に聞かずに誰に聞けど・・・あ、アリアに聞けばいいか。どうせわからないだろうけどな！

「武器は違法改造のベレッタ。」

「（ギクッ）」

「三点バーストどころかフルオートまでできるキンジモデル通称つてやつだな。」

「は、はは・・・それはハイジャックの時に壊れちゃったんで今は普通のベレッタで合わせてます・・・。」

「アムド装備科の平賀綾に改造の予約入れてんだろ」

ジュッ

「あつ！」

笑いながら怒るという芸当を見せた綴が唾えていたたばこで根性焼き。・・・生徒に根性焼きはどうかと思うぞ？

「……で？その三人が何の用だ？」

「あたしたちが魔剣デュランダルから守るわ！」

「ほう……？」

「え？え？」

「今ならキンジの部屋に住み込みでボディーガード……」

「お願いします！……！」

うわっ！？早っ！？あれ！？原作だ！ここは少し言いあってからアリアがキンジに銃を突き付けてそれからOKじゃなかったか！？

「ちよ、なんで俺の部屋なんだよ！？」

「（あんたの部屋にすれば白雪が一発で落ちると思ったからよ）」

「……はぁ……もう勝手にしてくれ」

キンジ陥落！

「……先生。」

「いんじゃない？Sランクと人外バンザイが無料でボディーガード。お得じゃん」

「はい！」

うはっ W W うれしそう W W W

って

「だから人外バンザイ言っなって……」

こうして魔剣^{デュランダル}Ⅱジャンヌさんから白雪を守り抜こう！という作戦が
決定した……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7723v/>

緋弾のARIA～世界に見放され皆に見守られる者～

2011年11月17日19時04分発行